



097396-000-8

特9-669

天下豪傑惡狐退治

玉田 玉秀齋 / 講演

M4 1

DBS-1281

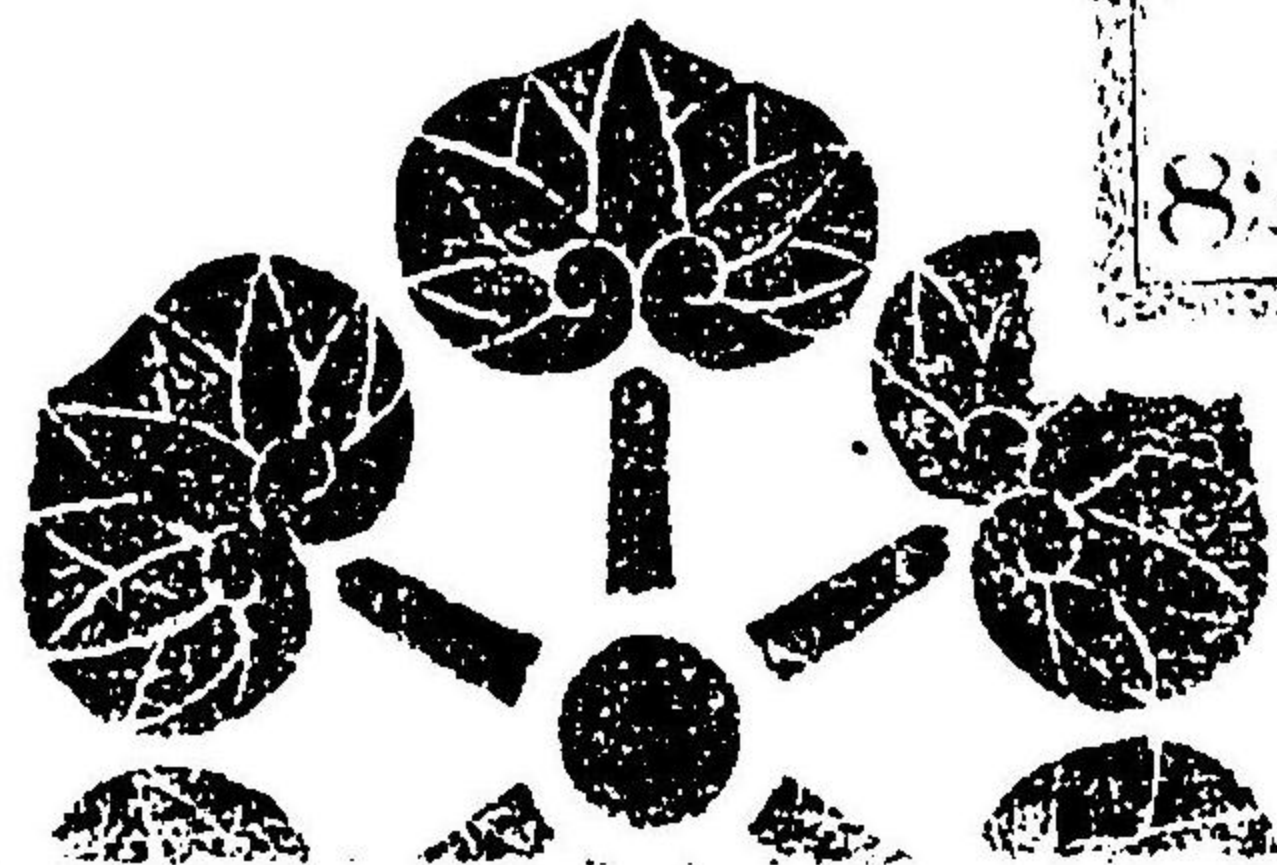
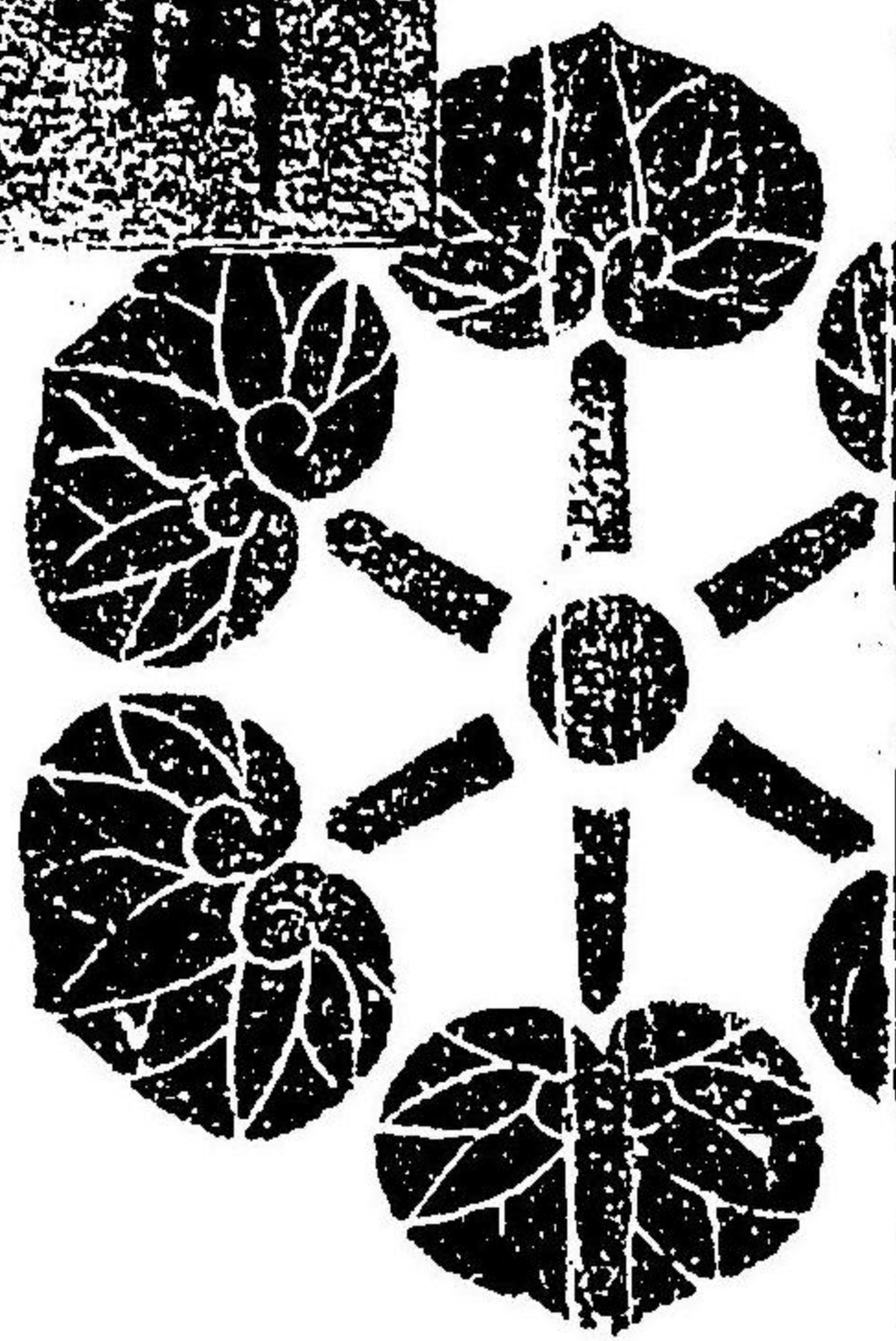


257  
820



天下  
一家  
傑  
惡狐退法

玉皇  
大帝  
降  
臨



257  
820

玉田五秀齋講演 中尾甚三郎速記

野州 庚申 惡狐塚の由來

實價 三十五錢

郵税 六錢

天下 傑惡狐退治

實價 三十五錢

郵税 六錢

表紙口繪共極彩色木版摺

美裝菊版形式百餘頁

……に廣告いたしますは、關東に於て其名も高き、野州は庚申山ある惡狐塚の由來記  
にごさいまして、後篇にありましては天下雙劍の名家、柳生飛騨守、小野治郎右衛門等の諸豪傑  
が、庚申山の奥猿渡りの洞窟といふに乗りこみ、其處で變化自在の惡狐を退治いたすといふ、至  
極壯怪の講談でございますから、好奇の諸君は購て見玉へ……。

秋月玉光講演 天野三郎速記

女龍神 お玉

實價 三十五錢

郵税 六錢

表紙口繪共極彩色無類美本

茲に廣告いたしますは、先に非常の好評を博して其愛讀者諸君より、また出ぬかまた出ぬかと、やかましく御催促にかつてをりましたる、浪花俠客、樂師梅吉傳の第四篇目にごさいまして、されば女俠の龍神お玉が、情夫梅吉の危難を助けんと、樂師の子分松島岩造を引き連れ、泉州濱寺の沖にと乗り出し、其場で勇壯の大活劇を演じて、九死一生の大難の中より、樂師の梅吉を救ひ出すといふ御話……それより奥に進みますると、梅吉の爲には父亡の仇たる、吉岡流の大劔客、勝田新六郎猛照が、諸國をめぐつてだんくと大阪へさして乗りこんでくる、さて梅吉と新六郎とが、何處で如何して出會ひますや、又如何様の敵討とあるか、それを知らんとする愛讀者諸君は、愚圖くせず此本を買ひ玉へ……



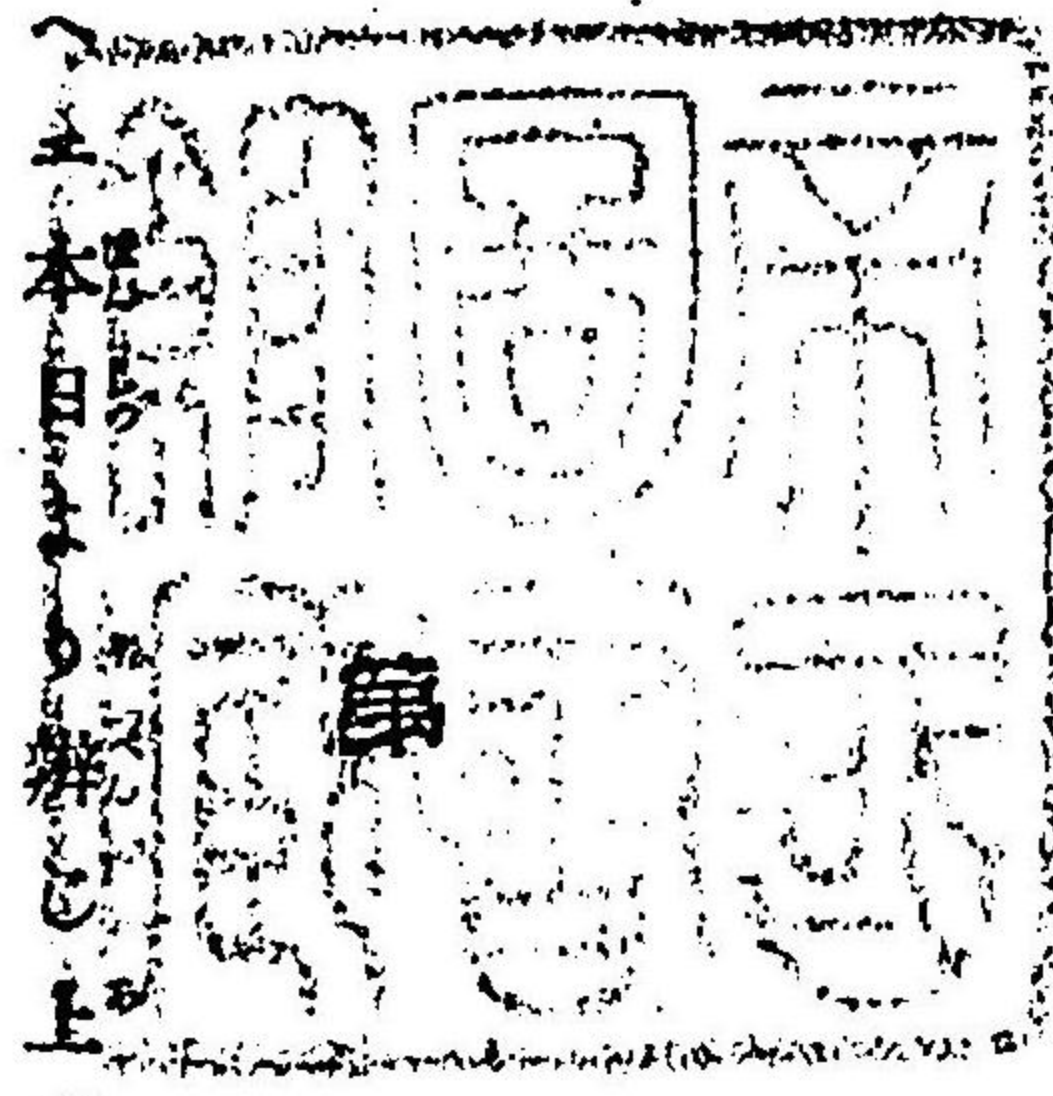


459  
667

天下豪傑悪狐退治

天下豪傑悪狐退治

玉田玉秀齋講演  
中尾甚三郎速記



一画

へま本日本より新編上げます講義は、先般御披露いたして置きました「野州庚申山悪狐塚の由来」の續き、即ち「天下豪傑悪狐退治」の御話を申し上げます、却説前編は何の邊まで伺ひ置きましたかと申します、大御所秀忠公の御愛妾お玉の方が天文方山路民部と天文理學の問答に及び、山路民部を言ひ伏せたる所より、終に其日の問答中止とある、仕済したりとお玉の

方は既に其座を立ち上らんとする、折りしも御次ぎの間より何者とも知れず、大音聲に「アアア」妖婦お玉の方、只今汝に尋問義あり、暫らく待てツと呼はりながら、間の御襖を押し開き其席へ這入つて來るといふ處まで、伺ひ置きましたる事にござい、返つて見れば、此時毒婦お玉の方は、立ち止り何者あるやと振りござい、そこでお玉の方は、お玉如何に立治法院、其方此席を何處と心得て居るや、畏れ多くも御兩將軍出御の御場所とも、御からず、御免しもあくして我儘にも當御席に通るおぞとは、身の程を知らん不届者下り居れツ」と確と睨む……此言葉にさ、此時副將軍水戸中納言頼房卿は、頼房「アイヤお玉の方お玉ハ、頼房今日は將軍家に成り代り、斯く申す頼房が目通りを免すのぢや、コレ頼本立治法院苦しうかい此御席へ……法院ハ、

ツ」と御應答へ申して立治法院は、大廣間に通り道か末座に兩手を支へ扣へて居る、すると水戸頼房卿は、頼房如何にお玉の方これに在つて承まはる……」此時お玉の方は容体を正してお玉如何にや立治法院、其方只今何か尋問る義有りとお申し、妾は醫術の事は存じんが、一体何を尋問るや……」そこで一寸と讀者諸君方へ御断りを申して置きます、此處で醫學の問答の事を細かに申し上げて居りますと、お固くありますからして、皆摘んで伺います、借ても此時立治法院は、威儀を正して、今日は何の事あれば言葉改める故左様う心得、されば今度畏れ多くも當將軍家の御不例に就き、御容体を伺ひ奉つるに、御熱甚だしく通常の御熱病にあらずして邪熱あり、最も此御病氣の發る原因と申すは、將軍家の御生命を縮め奉つらんと呪ふ曲者が有るに極まつたり、お玉シテ、其曲者と申すは……法院



されに餘人にあらず、お玉の方汝で有らう、何うぢや」とシ  
 イツと膝を進める、お玉の方は少しも屈せずお玉扣へ立治法院  
 上様の御不例は邪熱で有るの、又は妾が呪い奉つる邪氣女と申  
 すか、然らば此上は醫學をもつて尋問る故、逐一返答をいたせ  
 法院醫學の事あれば、如何にも答へをいたす、お玉醫者の始り  
 これ如何に……法院されば、我朝にては少彦命、佛法にては藥  
 師如來、唐國にては神農王あり、抑も三十七代の帝齋明天皇の  
 御宇、初めて傷寒論と言ふ醫學の書が我國に來り、これ我國漢  
 法醫の始めあり、お玉然らで醫者は、何をもつて人の病氣を知る  
 や、法院それが即ち脈を取つて知るあり、お玉シテ、其脈と申すは  
 法院一息に五度と申して、出る息が二度引く息が二度、これが  
 順環して來ると今一度打つ、これで一息に五度の脈が打つあり  
 これが變じる時は忽ち病とある、お玉然らば其邪熱と云ふ事を  
 るからば、何故藥法をもつて上様の御病氣を御平癒させ奉つら

んや」と云ひつゝ、又もや毒氣を吹かける、すると流石の名醫岡  
 本立治法院も、忽ち眼を閉じ息づまり言葉も出でず法院己れッ  
 と云はんとすれど何うしても言舌が廻りません……、されば此  
 時大御所秀忠公は、秀忠最早今日の問答は、玉女の勝利あり、コ  
 レ松平伊豆、山路民部、岡本立治法院の兩人に遠慮差扣へを申  
 し付けよ」ハ、ツと應答へて御老中御目附番松平伊豆守信綱は  
 心中に遠慮差扣へを申し付ける罪はございませぬが、然し大御  
 所公の台命あれば信綱如何に兩人、遠慮差控へを申し付けるか  
 ら、左様う心得……兩人ハ、此時お玉の方は、ニコ／＼打  
 ち笑つて居る、すると大御所公には秀忠玉女、來れッ」と仰せ  
 られてお玉の方を引伴れ、西の丸へ還御とある、跡に三代將軍  
 家光公は、ホット吐息をついで居らせられる、山路、岡本の兩  
 人は、上様へ御目禮をして御前を下らんとする、家光アイヤ、兩  
 人は暫らく待てッ、兩人ハ、家光イカニ頼房、卿は今日の問答如

天 下 豪 傑 惡 狐 退 治

何に思ふや、予は玉女の容子が何とも合点が参らん……頼房、  
、上様の仰せ御有理に存じます、某しも玉の方は合点の往か  
ぬ、と考へ居ります、コレ山路民部、玄治法院の兩人汝等は何  
んと心得て居るや兩人ハ、何んとかして渠が正体を見現はさ  
んと存じ種々理を盡して問答をいたせしに、議論半途にして俄  
に眼が曇り身が凍り言を發する事の出来ざる様うにありしは  
これお玉の方の所爲にございませぬ、然しお玉の方から狐狸妖怪の變化  
ではお玉の方の人間には違ひございませぬ、全く渠の身に惡  
狐が附屬して居て、かゝらす所爲をあすので有らうと考へます、  
頼房、然らばこれ捨置く事は相成らん、片時も早やく其惡狐退治  
をせんければあらんが、去りおがら眼で見事の出來ぬ、惡狐  
を退治するは甚だ難かしいが、松平伊豆何か好き考へはあいか、  
何うちや……伊豆ハ、何を申すも大御所様のお胤を宿して居  
ります事あれば、誠に難事でございます頼房、さりとて天下の大

天 下 豪 傑 惡 狐 退 治

事捨置く事は相あるまい、何うしたもので有らう」と御評定區  
々として一決いたしません、此時山路民部は民部「アイヤ御評定  
暫らく御待下され、某し此所に有つて諸神を祈り一筆立て見  
ませう」と懐中より算木筮竹を取り出し、種々考へる民部「只今  
現はれましてる卦の表をもつて判断いたしますれば、これはい  
まだ退去ける時到来らず、天氣運を待すと申して、急つて問答い  
たせしは重々某しの失策、時機の來るを待より外にいたし方は  
ございませぬ、よつて先お玉の方が安産の上にて惡狐退治を遊  
ばします様う、短兵急に事をあされては却て不爲かと存じます  
頼房「フム成程、汝の申す所有理の事あり、然らば左様うにいた  
さう」と此處に御評定一決して何づれも御城より下る、倍も  
其後寛永元年九月十七日に、お玉の方は分宛いたし、玉の様  
ある若君御誕生、大御所公は、殊の外ある御喜び遊ばし、御  
名を御祖父家康公の康の一字を取つて、康之助とお附けあされ

天下豪傑惡狐退治

御寵愛淺からずおいく御成長とある、  
八年まで別段御話しもございませぬ、  
大御所公には御不例とある、御番附が  
するに、其効も見へず漸次に御病氣御  
最期の際に、三代將軍家光公を御枕邊に  
忠委借て家光、予が今度の病氣は所詮  
何うぞ康之助の事を頼む、渠は早賤き  
可愛ふてありませぬ、何卒相當に取り  
家光ハ、康之助は此家光の爲には舍弟  
何にも其義承知仕りました秀忠オ、  
に思ひ置く事更にあし」と終には其翌  
御年五十四歳にて御他界とある、  
倍て又其後天下の副將軍、水府中納言  
頼房卿が御病氣とある、

天下豪傑惡狐退治

種々醫藥に手を盡されしが、其効も見  
せられず、御年四十九歳を一期として  
家におゐては、御嫡男の鶴千代丸様い  
するが、早速此若君をもつて御家督御  
公儀にて御聞濟の上、從三位中納言光  
然るに、お玉の方がお産み申せし、康  
お成り遊ばし、殊に御聰明の御賢ひ  
るにつきお玉の方には、心の中に打ち  
將軍を亡きものにして、康之助君をも  
亡君大谷吉隆公の修羅の御無念、且は  
これより秘密に徳川家に怨み有る、諸  
が此事誰れ知る者もかかりしと思ひ、  
つて到頭お玉の方、然る處茲に前年  
さでございませぬ、然る處茲に前年

天 下 豪 傑 惡 狐 退 治

いと始終に目を付けて居たる、老女村岡藤浪が此事を知つて、  
或夜忍んでお城を抜け出で、駿河臺ある大久保彦左衛門の邸に  
來り、密に對面の山上申しけるは、村岡借て豫て目を付けて居りま  
したる、お玉の方の舉動いよく怪しく、渠は大友家の浪人と  
は偽々、全くは關ヶ原の殘黨、武田作左衛門の娘玉の井と申す者  
にして、天下を顛覆さんとする謀叛人でございませぬ、且はお側  
の侍女の中にも怪しき者が居りますれば、片時も早く御取糺  
の程を願ひ上げます彦左、天晴克くも知らしたり、如何に  
も其義承知いたしました」と村岡藤浪を歸して置いて、夜の明ける  
のを相待つて、急ぎ小石川の水戸御館へ來り、御取次をもつて  
水戸中納言光國卿へ御對顔に及び彦左昨夜拙者邸へ老女村岡藤  
浪が忍んで参り、云々斯様う／＼と申し参つたり、これ全くお  
玉の方の叛逆の兆しにございませぬ、光國、左様か、借てこそ天  
下に仇あす毒婦で有りしが、今日迄は大御所公の御威徳に關る

天 下 豪 傑 惡 狐 退 治

故、等閑に捨て置きしが、最早猶豫すべきにあらず、ソレ誰れ  
が有る急ぎ天文方山路民部を召し出だせ……ハ、畏まり奉つ  
ると、早速御使番を小石川安藤阪ある、山路民部の邸へ立てら  
れる、早速御使番を小石川安藤阪ある、山路民部の邸へ立てら  
戸御館へ駆け附け來り、中納言光國卿の御目通りに出る光國、  
オ民部出たか、其方を至急召出だせしは餘の義にあらず、只今  
これある大久保彦左衛門が参り、云々斯様う／＼と申し参いた  
り、前年其方が申せしにより今日迄捨置きしが、最早猶豫すべ  
きにあらす、急ぎ惡狐退治を申しお玉の方の正体を見現はし、  
然して渠を召捕ねばあらんが何うぢや……民部ハ、大御所様  
御存生の中は渠に威勢ひも有りませぬが、最早御他界とありし  
上は勢力も餘程衰へたり、左すれば一刻も早く御退治有つて  
然るべきに存じます」と申し上げる、此時大久保彦左衛門は  
彦左、されば其義に就き餘り大業にいたさず、成丈け事穩便の御

取り斗らひを願はしう存じます……光國、夫れ柳生飛騨守  
を呼べつと御聲が掛る、そこで又々御使番を木挽町五丁目  
る柳生の邸へ立てられる、すると懸て暫らくして柳生飛騨守宗  
冬は、小石川の御館に参り、水府光國卿の御前に出で宗冬ハ、  
只今火急の御召しは何事にございます光國其義は其方に尋ねた  
き事有つて呼び出たしたのぢや、他の事ではあいが豫て不審と  
目を付けて居たる、お玉の方は云々斯様うくで有るからして  
これを大業にしては徳川家の不爲で有ると申すは、今普く天下  
に、豊臣願の諸大名も有り且は關ヶ原の殘黨の輩が諸所に徘徊  
徊あし、動もすれば天下を顛覆さんとする折りからあれば、倘  
や此處に乘じて如何ある事をあすやも量り難く、よつて成丈け  
秘密に事を取り斗らはねばあらん、就いては其方が前年諸國を  
經歷中に出會したる、勇士豪傑が有るで有らう、其者を密かに江  
戸表へ呼び寄せ、然して此者と一致共同して退治申し附けるか

ら、左様う相心得……宗冬ハ、仰せの如く拙者諸國修行中に  
出會ましたる、勇士豪傑は枚擧するに遑あらずでございます、  
然し餘り大勢呼び寄せましては事大業にありませぬ、先此中の  
二三の豪傑を召し出だされ、不肖宗冬も此中へお加へ有つて退  
治仰せ附けられませぬ様う、偏に願ひ奉つる光國、シテ又  
其豪傑と申すは誰々で有るか宗冬ハ、先紀伊家の關口八良右  
衛門、御當家の朝比奈彌太郎、御旗本の小野治良右衛門、櫻井  
六良左衛門、上州問庭の樋口十郎左衛門此人々を密かに御呼び  
出し遊はしたら如何でございます……光國オ、然らば左様  
ういたさう、然し此義は大老や老中にも沙汰せず内分にいたす  
と此處で副將軍水戸光國卿は、大久保彦左衛門、山路民部、柳  
生飛騨守と御密談の上、勇士豪傑を江戸表へ御呼び出しに  
と云ふ、サアこれから實に勇壯しき御物語りございまするが  
次回より引續いて申し上げます……

却説前回に向ひましたる、水戸中納言光國卿と申し上げ奉つるは、頼房卿の御嫡男にして御幼名を鶴千代丸と申された御方でございませぬ、然るに御父君頼房卿は、お五才の時までお乳人の手にて御養育にあり、五才の時よりお七才まで御側にお侍中のお傳史役を附置かれる、處が或年の冬大雪の降りましたる日の事でございまして、小石川御館中ある築山御殿の御障子を開かせ、御幼君鶴千代丸君には、お机へに寄り掛り御手習を遊ばして居らせられる、すると御側にお傳史役のお八重と云ふお侍女が、慇懃に手を支へ守護して居ります、然るに此お八重といふお侍女は、生得色が黒うございませぬからして、幼君鶴千

代丸君には、くろよくとお呼びあさる、借てもお侍女のお八重は、若君に打ち向ひ八重恐れながら若様へ申し上げます、若君オ、くろよ何事で有る八重ハ、外の事ではございませぬが、貴君は折りく侍女部家へお遊びに成らせられます、するとお侍女の中にはお上のお目を忍び居眠りをいたして居りますと鼻の穴へ觀世燃を差込んだり、或は顔に墨を塗り附けたりと惡戯ばかりを遊ばして、少しも仁恵がございませぬが、些とは菅公の事をお思ひ遊ばせ……若君「フム、菅原道真が何ういたした入重さればでございませぬ、菅公御幼年にして御歳お五才の時都西の洞院高辻館の御別殿にて、恰好今日の様うに大雪の降りますものもお厭もあく、お障子を明け擴げお手習のお稽古を遊ばして在らせられました、すると御側に綾子と申すお侍女が、兩手を支へブルブルと慄いながら、若君を守護して居ります、それを御覽遊ばしたる若君は、イトモ不憫に思召れたが、其時お

詠じあされしお歌が「降る雪がわたくおれば手に摘で枝が袖  
 にも入れたくぞあり」と斯様うにお遊ばしたお心は何うで  
 ざいます、降る雪が綿で有つたら手に摘んで綾子が若物の袖に  
 入れて遣りたいと云ふ、お慈悲心でございます若君、左様か  
 吾も其位いの歌から詠哩……八重、それでは詠で御覽遊ばせ若君  
 降る雪がちや八重、真似をしては不可ません若君、イヤ真似ではあ  
 い駄ッて聞け、降る雪が白粉あれば手にとつてくるが顔にも塗  
 りたくぞあり」とは何うぢや……八重、また左様な事を仰有る、  
 若君「アハ・・ツ」と笑ひに紛らしてお了いあされたが、斯  
 くして満お七、歳までお侍女が御養育を申し上げ、満七、歳の早よ  
 り沖周藏といふ者がお傅史役に選まれ、鶴千代君の御側に出る  
 然るに此沖周藏は、未だ三十歳未滿で有るに病で抜るのが頭の  
 髪、の毛、ポツ／＼抜けて了い、禿頭でございます、處が若君、鶴千  
 代様は、これをお嫌い遊ばし若君「コリヤ周藏、其方の様うに頭

に毛のあき者は忌嫌ぢや」と仰せられて御側を退去される、そ  
 こで周藏も仕方なく御側を下り、御館頼房卿の君前に出で周藏  
 ハ、若君様には云々云々様う／＼と仰せられます故、何卒他に  
 然るべきお傅史役の者を御選み遊ばされまします様う……頼房、  
 ヤ鶴千代の傅史役は其方より他にない、ト申すは其方の父周左  
 衛門は、予の傅史役を勤めたので有るからして、其先例をもつ  
 て申し附けるのぢや周藏、これは御上命には候得ども、頭に毛の  
 あき者は忌嫌ぢやと仰せられますれば、何うもいたし方がござ  
 いません頼房、然らば斯様うにして呉れんか、其方の頭に合ふ様  
 うに鬘を推へ、其鬘を頭の真中へ附けて出て見て呉れ……周藏  
 ハ、畏まり奉つる」と御請に及び御次へ下る、然して何處かで  
 鬘を推へさせ、其鬘を練り油にて禿頭の真中に附けて、早速若  
 君の御假に出るすると、御幼君鶴千代丸君には若君「オ、周藏、  
 俄に鬘が出来たナア周藏、ハ、若君「サア、來ひよ／＼」と仰せら

れて附け鬚が至極御意に叶ひました、然るに若君御年お十一才  
 とお成長遊ばす、する或口若君には若君コリヤ周藏、お父上  
 にお願ひ申して長袴を仕立てさせ、吾に穿して呉れ周藏ハ、ツ  
 と御前を下り此由か御館様へ言上に及ぶ、處が諸大名方では満  
 十五才にありませんと、長袴を穿しません、何故かと言ふに袴  
 の裾が足に纏ひ、それが爲に倒れ怪我する事がございませるか  
 ら、何うしても十五才未滿ではお穿しにありません、然しおが  
 ら水戸頼房卿には、御愛子の事故早速御用町人に仰せ附けられ  
 長袴を仕立させ、鶴千代君にお穿しにあら、すると若君には誠  
 にお喜び遊ばし、長袴をお穿しにあり御殿内を、彼方此方と  
 お歩行にある、御傳史役の沖周藏は、お怪我をさせてはあらん  
 と、お跡に付き従ひ守護して居る中に、ヲト過つてお長袴の先  
 を踏だのでございますから、若君には堪らずドンと前にお倒れ  
 にある、生憎敷居にて額をお打ちあされ見る、内に血が流れ

出り此時沖周藏は、心中にア、失策たとは思ひましたが、最早  
 出来て了った事はいたし方がございませぬ、御大切ある若君に  
 お我怪をさせたので有るからして、重くて切腹家断絶軽く永  
 のお眼にあるで有らうと、覺悟を定め、鶴千代丸様の御前に兩  
 支を突き頭を疊に附けて、只恐れ入つて平伏して居る、處で  
 これが下民の子供あれば、ヤア誰れ彼れが乃公の顔に斯様あに  
 疵を附けたと、ワア、と嘆き叫ぶのでございませぬ、然るに御  
 幼君鶴千代様は、何しろ後年水戸黄門光國卿と普く天下の人に  
 尊敬れ給ふたる、御明君でございますから、罪にはあさらず、  
 前に差俯向て居る沖周藏の附け鬚を指にてお摘み遊ばし若君コ  
 リヤ周藏、何を心配面をして居るか、ハア、何か今吾、過つて  
 疊の縁に爪づき打ち倒れ、此敷居にて額を打ち期く怪我をいた  
 せしを、其方が吾の長袴の裾を踏んで怪我をさせたと思ふて居  
 るか、けつして左様ではあ、何故あれば向ふむいて居る其方



が吾の長袴の裾を踏む道理はかい哩」と仰せられてヒヨイと驚き  
 を向ふむけにあさる、此時沖周藏は、心中に可笑くツて堪りま  
 せんが、笑ふ事も出来ず、此仁恵有るお言葉承はり、只有難泪  
 に咽んで居る、此事をお聞遊ばしたる父君頼房卿を初め奉つり  
 其他一家中の人は、此若君こそ今に天下に御高名を轟かし給  
 ふ、御名君ありと申し上げて居る、果して御若年あれど水戸家  
 御相續を遊ばし、副將軍水戸中納言光國卿と申し上げ、永く政  
 權を握らせ給ひ天下の爲に御苦辛をなされ、然して後年お年六  
 拾有餘歳の時に、御嫡男綱條卿に世をお譲りあされ、常州久慈  
 郡西山村へ御隠居遊ばし、黄門と仰せられしは此お方とござい  
 ます、扱ても水戸中納言光國卿は、大久保彦左衛門、山路民部  
 柳生飛騨守と御密談の上、勇士豪傑をお呼び寄せにある、江戸  
 に居合す人々は宜しいが、國に居る者は、夫れ江戶表より  
 御沙汰とある、處へ口を経て木挽町五丁目柳生飛騨守の邸へ、

本田家よりは荒木又右衛門、紀伊家よりは關口彌太郎、上州間  
 庭の樋口十郎左衛門其他勇士の人々おる、集合する、そこで  
 柳生飛騨守は、一同と共に小石川水戸館へ來り、お取次ぎをも  
 つて、中納言様へお目通りお願ふ、すると光國卿は光國、フム、  
 苦しうあい一同をこれへハ、ツとお取次は御前を下る、難て  
 の事に勇士の人々を案内をして、光國卿のお目通りへ出る、此  
 時勇士の各自々は、遙か此方に兩手を支へ扣へて居る、する  
 と光國卿は光國、オ、何づれも遠路の出府大義で有る……一同ハ  
 、今般吾々を御當地へ召出だされしは、如何ある御用にござ  
 います、光國其用件は追て申し付ける、ソレ誰れか有る盃の準備  
 をせよハ、ツと答應て御側衆が、其處へ銚子盃山海の珍味を  
 取り揃へて持出る、此時光國卿は光國、サア一同、今日は不禮を  
 免す十二分に過酒せよ一同ハ、有難く頂戴仕つる光國ソレ、  
 酌をして遣れ……ハ、ツと御近習衆が、銚子を取つて酌をす

る、處が此勇士の人々は、酒と來たら鬼も同様ですから、三升  
 や五升の酒を飲みましたとて、酔ひ潰れる様うあ事は少しもこ  
 ざいませぬ「同シテ今日の御用は光國用件は今に判る、マア十  
 二分に飲め」と仰せられて一向御用を申し付けられませぬ  
 そ、ここで勇士の人々は、互に目引き袖引きして、不審に思つて居  
 る、すると光國卿は、勇士一同に十二分酒が廻りしを御覽有つ  
 て光國「借て一同、今般其方共を呼び寄せしは餘の義にあらず、  
 先其御用と申すは、斯様う」云云で有る、これ三代將軍家の  
 御内命あればお請けをいたせ……「同ハ、御上命の趣き謹ん  
 でお請け奉つる、シテ其惡狐退治の日限は何つてございます、  
 光國「いよ、明晩と相定め……」同ハ、委細長まり奉つる」  
 と勇み立つて打ち喜び……光國「先今日は邸へ引取り休息いた  
 せ……」同ハ、ツ」と其儘御前を下り邸々へ引取る、中にも柳  
 生飛騨守宗冬は、木挽町の邸へ立ち歸り宗冬「お父上只今……」

但馬「オ、シテ何ういふ事にあつた……」宗冬「云々斯様う」に  
 して、いよ、惡狐退治は明晩と定まりました、但馬「フム左様か  
 然らば余人に劣らぬ様うにせよ……」宗冬「ハ、屹度明晩は惡狐  
 退治をいたします」とお話しをしてござる、所へ小牧猿が何  
 つの間に来たか、柳生父子の前に兩手を支へて居る、宗冬「オ、  
 小牧猿來たか、フムまた指先に書て教へて呉れるか、何  
 お玉の方には惡狐が附屬して居て業をあす故、かからず御油斷  
 されませぬ様う、またお玉の方召使ひの侍女の中にも怪しき  
 ものが居りますから、これ又御油斷のあい様う、尙此お守りを  
 貴君にお渡し申します、これを御懷中に納めて置いて下され……  
 オ、克く知らして呉れた」小牧猿は、キイ「ツと言つて其處  
 を立退つて了ふ、宗冬「お父上、人間も及ばぬ小牧猿の働らき、畜  
 生でさへ彼の通りシテ見れば吾々は飽く迄も天下の爲に惡狐退  
 治をいたさねば相成りませぬ」と大いに勇んでござる、所へ大

道寺平馬が来て、申し上げます。但馬、平馬、何事ぢや……平馬、只今お立關へ羽賀井一、心齋、磯端、伴藏の兩先生が、御前様に御目に掛りたいと申し参られました。如何いたしませうや。但馬、フム、左様か、一心齋は前名平馬と申され、羽賀井流の大名、磯端は拙者と共に上泉伊勢守秀綱先生の門に有つて、神影流の同じ流れを汲し兄弟、殊に伴宗冬の爲には師匠あれば、イト、叮嚀にして此處へ御案内いたせ……平馬ハ、ッ、長まりました。と其座を立つて立關口に出で来り、平馬ハ、御兩先生には誠にお待ちだうにございまして、サア何うか、此方へお通り下され、兩士、フム、然らば御免ん」と大道寺平馬に案内をさせ奥の一室に通る。此時柳生但馬守は、但馬、ヤア、これは誠に珍らしや、羽賀井、磯端先生先以一別以來御壯健にて大慶、兩士、但馬守殿にも、御健勝にてお目出度ござる」と此處で双方互に挨拶が終る、すると但馬守宗矩は、但馬、借て御兩先

生には、何等の用向き有つて参られしや、伴藏、されば拙者は久しく上州、箕輪の山中に隠遁して、生涯を終るの覺悟、然るに今度舊友の羽賀井氏が、隠家に訪問下され、御話には、同國、同村に在る、間庭、年流の達人樋口十郎左衛門が、何か御用有る趣きにて、江戸表より御召し出だしにありし故、何事あらんと段々、容子を聞合して見ると、云々、斯様う、この事、そこで老さき短き吾々、死に花を咲すは此時ありと思ひ、羽賀井氏と同道にて、急ぎ御當地へ罷り越たのござる。此時、羽賀井一、心齋は「心齋、何卒、勇士の御人数の中へ御加入の程を願ひたい、これ將軍家斗りのお爲にあらす、朝廷への御爲でござれば、何うか御貴殿のお取り成しを御頼み申す、但馬、これは御老体のお厭ひもかく遠路の御足勞、御苦勞に存じます、此由、水戸、光國卿へ言上いたしたるらば、嘸御満足に思召るゝで有らう、さらばこれより直ぐ御兩所

を水戸お館へ御同道をいたさう、兩士浪人者の吾々が、押して推  
 参いたすも恐れ有る、但馬イヤ、其義はけつして差支へはござら  
 ん、イヤ御案内をいたさん」と羽賀井、磯端の兩先生を引き伴  
 れ急ぎ小石川水戸邸へ來り、兩士をお次ぎに待たして置て、直  
 ちに中納言光國卿の御前に伺候して、斯様うく云々と言上、に  
 及ぶ、すると光國卿は、光國、フム左様か、苦しうかい速く兩士を  
 これへ……但馬ハ、ツ、長まり奉つる」とお次ぎへ下る、戀ての  
 事に、羽賀井、磯端の兩士を案内して再び光國卿の御前に出仕  
 する、此時羽賀井一心齋、磯端伴藏の兩人は、遙か此方に兩手  
 を支へ平伏をして居る、すると御上段にお着座遊ばして在らせ  
 られたる、御名君水戸中納言光國卿に、御聲靜に光國、其方が豫  
 て高名を聞及ぶ、羽賀井一心齋、磯端伴藏と申すか、予は水戸  
 光國で有る初めて會合ぞ、兩士ハ、水府お館様には、麗しき御  
 尊顔を拜し、恐悦至極に存じ奉つる……光國オ、其方兩士老体

の厭ひもかく當地に來たりしは、今回天下を騒さんとする毒婦  
 退治を申し附けたる勇士の列に加わりたいしたきとの願ひ誠に奇  
 特に思ふぞ、如何にも願ひの通り聞届けた……兩士ハ、誠に  
 有難き幸福に存じまする、シテ其日限は何つとお定めに相成り  
 ました、光國、いよ、明晩と決定いたしました、然し何を申すも毒婦  
 玉女は惡狐が附屬して居て業なす事故、これ一應一夕にては退治  
 事難かしく、只々其方等の勇力をもつて退治て貰はねばからん  
 ので有る、兩士ハ、何う仕つりまして、逆も吾々如きの微力に  
 ては思ひも寄らず、これ偏に將軍家の御武徳をもつて退治るの  
 でございます、光國、就ては明晩の勢揃ひ迄予が邸に滞在をいたせ、  
 ソレ誰そ有るか申し付けたる酒肴をこれへハ、ツと應答て御  
 近習衆が、お次ぎの間より用意の酒肴を持出る、此時光國卿は  
 光國、サア兩人、遠慮なく此處に在つて一献を過酒して道中の疲  
 れを休めよ、兩士ハ、お言葉に随ひ有難く頂戴仕つる」と此處

で柳生但馬守と共に、光國卿のお相手とあり打ち混じて深夜まで大酒盛り、麴て御酒宴終り光國卿は御寝所へお這入りとある。羽賀井一心齋、磯端伴藏の兩人は、水戸邸に止まる、柳生但馬守は、お暇を頂き木挽町のお邸へお歸りとある、偕て彼是する内に夜も白々と明け渡る、すると光國卿は、お眼覺とあり御寝所より起き出給ひ、御手水をお遣ひとありお朝飲を濟せられる。其中に早やお供が揃ひが整いましたる處より、小石川館をお乗り出しとあり紅葉山千代田城へお上り、直ちに桔梗の間の御殿へお通りとあり、三代將軍家光公へ御對顔の上、先其日の御挨拶が相済みますと光國ハ、上様へ申し上げ奉つる、昨日某し邸へ豫て天下に高名の聞へ渡りし武術の達人、羽賀井一心齋磯端伴藏、兩人が罷り越し惡狐退治を申し附けたる、勇士の列にお加へ下されたいと願ひ出でましてございます家光、フニ左様か……光國招かずして斯る勇士の來たるは、これ偏に上様の御

武徳の輝く事にございます家光「今日まで事を大業にせず秘密にいたせしが、最早今夜に迫る事故、此義大老を初め其他老中諸役人まで沙汰をいたして置け……光國ハ、委細畏まり奉つる」と將軍家の御前を下り、大老、中老、へ御沙汰とある、すると時の御大老井伊掃部守、御老中松平伊豆守其他若年寄衆に至るまで、何づれも此事を聞かれて大いに勇んでござる、早や其中に日も西山に傾むく黄昏の頃とある、そこで水戸光國卿は、大久保左衛門と御密談の上、勇士の各自を密かに西の丸の御庭前へ忍び込ませるといふ、サアいよく、これからが惡狐退治の一條、次回に譲つて申し上げます……。

借ても柳生但馬守、同飛騨守、高田又兵衛、關口八郎、或は浪士の人々には、羽賀井一心齋、磯端伴藏、樋口十郎左衛門、且小栗又市を初めとして、其他屈強の人々、何づれも充分支度に及び、宵の中より西丸の御庭前、彼方此方の樹木の蔭に身を潜め玉の方には、斯る事は少しも心注す、此程より御幼君康之助様がお玉の病氣に就き、晝夜御側に在つて御看病をいたして居る最も御側役松崎新六郎、これ等の侍女拾八人、御用人澤井卯太夫、て居る、處が早や其夜も丁度子の刻とある、上野東叡山の九ツの鐘の音がボン／＼と幽かに聞へる、するとお時計の間の時計がチン／＼と鳴る、御幼君康之助様は、スヤ／＼とお眠りあさる、此時毒婦お玉の方は、寢もやらず若君の御側に在つて

御介抱をして居ましたが、折りしもお次ぎの間にバタ／＼と足音がするからして、お玉「ハテ借て合点の往かぬ事で有る哩、深夜に及び、御幼君の御寢所へ抜き足さし足をして忍んで来るは、不審の至り」と尙も耳を歌て、ジ／＼と聞かして居ますと、御襖傍にてピタリと足音が止る、そこでお玉の方は「いよ／＼怪しみお玉「ヤア／＼」斯く深夜に及び、御幼君の御寢所へ、抜き足さし足をして忍んで来るは、何者あるや名を名乗ッ」と聲を掛け、言ふより早く、お徳をパーツと押し開いて、其間へ這入つて来た、心齋、磯端伴藏、樋口十郎左衛門、高田又兵衛、關口八郎、小野治郎右衛門、櫻井六郎左衛門、金松又四郎、小栗又市都合十、二人の勇士の人々、何づれも思ひ／＼の装扮にて佇立で居る、大抵の者あれば、これに荒膽を抜かれるのでございませうが、お

玉の方は少しも騒がすお玉「ヤア、恐れ多くも前の將軍家御公達様の御殿所とも憚からず、深夜に及び斯く異形の装扮にて推参いたせし汝等は、何者あるや名を名乗れッ……」此時一同は思ひく、に名を名乗り一同抑も吾々が今宵斯く若君の御殿所へ推察せしは、私事にあらす恐れ多くも將軍家の台命あり、如何にお玉の方汝こそは大友家の浪人武田某の娘とは偽りにして、事實は先年濃州關ヶ原にて亡びたる、大谷刑郡吉隆の一族武田作左衛門の娘玉の井と申す者で有らう、殊に汝の身に悪狐が付き居り、これ迄上様の御心を憐まし奉つり然して人の目を暗まし、天下を顛覆さんと成したる謀叛人ある事明白あり、サア最早叶はんイザ正体を現はせよ」とジリッ、と側へ詰寄る、お玉の方は、些とも驚かず傍に掛けたる薙刀を手早やく追ッ取りお玉前の將軍台徳院殿様に御寵愛を蒙りし妾に對し正体を現はせよとは奇怪千萬、殊更三代將軍家の御舍弟康之助君の御病

氣も憚からず、斯く狼籍をあすは不届至極で有らう下り居れッ」と確と睨む……此時柳生但馬守は聲高く但馬「ヤア、黙れ毒婦め、此場に及んで如何様うに言葉飾り言ひ通れてとしても最早敵はん、ソレ各自」と下知をするお旗下の金松又四郎、小栗又市の兩人が一刀を引き抜き、兩人「ヤア、毒婦、観念せよ」とドッとはかりに切り込み来る、折りしも此騒ぎを聞つけ駆け出だしたる十八人のお侍女は、それと見るより侍女「お部家様へ狼藉をあす不埒者、覺悟をいたせ」と一同にドッと切つて掛る兩人「エ、何を猪牙才か」と夥多の侍女を敵手にチャチャリッ、と、火花を散して渡り合ふ、此戦ひの中にお玉の方は隙を窺ひ、康之助様を伴れ、薙刀小脇に抱へ既に其場を通れんとする有様、これを見て取つたる、小野次郎右衛門、櫻井六郎左衛門の二人りは、二人「己れ毒婦、汝を遁してあるべきや」と攫とばかりに切り附けるを、お玉の方は「お玉何を」と言ひ様薙刀を風車の如く、リ

ウツと打ち廻り、小野、櫻井の両勇士を敵手に切り結ぶ。然るに、薙刀の刃尖が七八ツにも見へる、これが爲にさしもの勇士小野、櫻井の二人は、大いに辟易おし次第、に切り立てられ、シリ、ツと後退りする處を、お玉の方は其處を附け入り、お玉「ヤア、ツ」と一聲叫ぶと、共に小野、櫻井の二人に薄手を負せ、其儘後をも見ずして、康之助様を引き連れ、御庭前の方へ逃げ出だすを、小野、櫻井は手疵も屈せず、尙も後より追ひ掛け來る、處へ羽賀井一心齋、磯畑伴藏、樋口十郎左衛門の三浪士を初めとして、其他關口八郎、高田又兵衛、柳生父子、何づれも其場へ追ひ詰め來り、四方八方より取り圍む……、すると毒婦お玉の方は、さも物凄き眼色にて、勇士の人々を確と睨みしは、宛然鬼女に均しき有様でございます、此時勇士の人々は少しも臆せず、何づれも一刀の鞘を拂い切つて掛らんとする、お玉の方は眼を怒らし、又もや例の毒氣を吹き掛ける、これには流石の

勇士豪傑も兩眼垂み、既に其場に仆れんとする、中にも柳生飛騨守宗冬は、少しも其毒氣に感せず、宗冬「己れ毒婦、觀念せよ」と切り附ける、お玉の方は薙刀にて、ハツシと受け止め、一と下、千返萬化と、虚術を盡して戦ふたり、聽て七八合も涉り合つて居る中に、飛騨守宗冬が「宗冬「ヤア、ツ」」と一聲叫んで切り附け、けし一太刀が、何處かに感じたかお玉の方は、キヤアツと一聲悲鳴を發る、シテヤッタリと宗冬は、既に二の太刀を切り附けんとする、折りしも不思議や御庭前、彼方に此方に光る數多の狐火、或はコン、ツと泣聲がするかと思へば、俄に一天墨を流せし如く、眞暗さある、實に西丸の大奥は上を下への大騒動……、此ぎに紛れ、毒婦お玉の方は、何國ともなく逃げ去つて了いました、此時、柳生飛騨守を初め諸勇士の人々は、互に手分けを命じ、御殿内、御庭前の隅々を探しますると、彼方此方にお侍女の死体と、狐が五六頭、斃れ死して居りまして、肝心討つべきお玉の方の行



末が判りませんからして、一同は誠に残念に思ひしが何うもい  
 たし方がございませぬ、取り敢ず夜の明けを待つて此由を、  
 御老中へ御届をする、御老中松平伊豆守殿は、お目附を従へ西  
 九へ來り、死体お改めの上御法の如く取り片附けを申し付け、  
 然して御本丸へ引揚げ、三代將軍家光公へ昨夜の事情を、云々  
 斯様うくと言上にあぶ、すると家光公は家光「フム、取り逃せ  
 しとは残念な事をいたしました、先何は兎も有れ勇士をこれへ召し  
 出だせ……伊豆ハ、ツ、畏まり奉つる」と早速此趣きをそれく  
 に沙汰をする、應て暫らくして勇士の人々、何づれも打ち揃ひ  
 將軍家の御前に出仕して、遙か此方に平伏して居る、此時將軍  
 家光公は家光「如何に一同の者、昨夜の働き過分て有るぞ一同ハ  
 、肝心討つべき毒婦を取り逃しましたるは、吾々一同誠に面  
 目次第もございませぬ家光「イヤ、くけつして耻入るに及ばん、  
 いまだ討つべき時機が來たらんので有らう、今度は遠路の處大

義で有つた」と勇士一同へそれく「お手當金を下し給はる、そ  
 こで一同は、有難く頂戴して將軍家の御前を下り、本國へ歸國  
 する者も有れば、また江戸に止まるも有る、然るに三代將軍家  
 光公は、毒婦の事は敢て御心にも掛け給はず、成れども御舎弟  
 康之助君は、御父臺徳院殿様御存生中に御遺言が有りし故、等  
 閑に打ち捨て置く事は出来ませんからして、御老中へ舎弟康之  
 助の行末を探せといふ御内命が下る、そこで松平伊豆守信綱は  
 江戸町奉行は申すに及ばず、關八州の諸役人へ御沙汰とあり、  
 山々谷々津々浦々に至るまで御搜索にありませぬが、何うして  
 もお行末が判りませぬ、三代將軍家には、早やく探し出だせよ  
 と度々の御内命が下る、之れによつて天下の諸役人は、種々御  
 評定のの上、東は奥州蝦夷松前西は九州薩摩海南は紀州熊の浦北  
 は加能越の三ヶ國まで手を盡くして搜索いたしまするに、更に  
 手掛りがございませぬ、扱て此間に餘程年月が經過て居ります

然るに妙を所より知れて参りましたといふは、如何なる理由かと申しまするに、茲に下總國小金の住人、伊東一刀齋といふ一と申しまするに、此人は前名彌五郎と申せし頃は、上州箕輪の住人上泉伊勢守秀綱の四天王の一人で、神影流より一刀流といふ人上泉伊勢守秀綱の名を一刀齋と改めたる天下の名人でございませぬ妙を案出し、名を一刀齋と改めたる天下の名人でございませぬ處がこれ程の大先生で有りながら、門人に目録を書て渡しまするに、本字で書事が出来ないので假名で書て渡す、これ世にも名高い一刀齋の假名字目録といふ、併て此伊東一刀齋が諸國を廻り、下總國小金に來り、此處に縁有つて足を止め道場を開き、老の娯樂に門人を集め武術の指南をいたして居る、然るに今般江戸表に有つて、毒婦征伐惡狐退治の義に附き、副將軍水戸光國卿が、勇士をお召し出しにやつた其中に、自分の舊友羽賀井一心齋、磯畑伴藏、樋口十郎左衛門が加はつて居るといふ事を聞いて、誠に残念に思ひ、一間に這入つて獨り言「一刀何

故光國卿が吾をお召出しにからざりしや、老年にして武術も衰へたと思召ての事か、羽賀井、磯畑、樋口も老年にて格別歳に相違は有るまい、殊に江戸より程遠からぬ此下總小金に在る吾一人りを除かれしは、かへすも残念で有る」と大いに憤り且は光國卿を恨んで居る、併て伊東一刀齋は、其翌日より道場へ出で門人衆に指南をいたしまするに、大變稽古が荒くあり、ビシリと容赦なく打ちすへる、そこで門人衆は心の中に、何んで斯様に稽古が荒くあつたかと思ひながら門人へ「先生何うかお手軟に願ひます一刀黙れッ、お手軟とは何んだ、荒稽古をするのが其身の爲だ、サア烈しく打ち込んで参れ門人ハ、ヤア一ツと一聲叫んで打ち込み来る一刀オ、左様ぢや、何うも御名君が判らん哩」ビシリと打つ門人「参りました一刀まだく老年にて役にたつんと思はれたのが残念で有る、ビシリ……」門人「参つた一刀歳は寄つても腕には年は寄らんぞ、ビシリ……」

門人先生、恐れ入りました。一刀老衰したと侮られしは残念ありとビシリと打すへる、打たれる門人こそ飛んだ迷惑でございます、されば伊東一刀齋は、自分に腹の立つ事があるからして、毎日く門人を手酷く打すへる處より、漸次に稽古人が来て、まい様に、然るに此伊東の道場に先達より足を止め、一刀齋の指南を受けて居る、伊達家の浪人で平松源治郎といふ者が此容子を見て源治先生、貴方は今度江戸表よりお召し出しにあらざりしを憤り、御門人衆へ手荒いお稽古をかざる故、稽古人が来あい様になりました、然し光國卿が貴方を老衰したとお侮りあさるあぞといふ事はけつして有りませぬ、これ事にお洩せん様」と異見をする、そこで一刀齋もフト心注ぎ「一刀齋成程左様ぢや、光國卿を恨みしは吾が誤り、此上は御幼君康之助様のお行末を探し出し、天下の役人の眠りを覺して呉ん」と此事

を門人衆に言ひ聞し、康之助君のお行末を探させ、然して自分も折りく、幽谷深山に分け入つて、共にお行末を捜ねて居る、然る處、茲に水戸家のお抱醫師で二百五十石を頂く、笠井周伯といふ名醫がございます、御長男の周市郎は幼年の頃より醫學の修業をかされ、今では父にも勝る名醫とある、然るに周市郎は大の臆病でございます、それに劍術が熱心で豫て習ひたいと望んで居た、丁度二十三才の時に父に此事を願ふ、すると父の周伯は周伯劍術を學びたいと申すが克が物を考へて見よ、其方の様に熟練し人の病氣を癒せば、それでお役に立つのぢや、周市郎は父上のお言葉とも存じません、町醫者あれば宜しいが、苟且にも二百五十石のお祿を頂き帯劍をいたすお抱へ醫者が劍術を知らいでありませうや、開は何かあれば今にも亂世とあり、君のお供をして戰場へ進みし時、倘敵が君の御馬前近くへ乗り込

門人先生、恐れ入りました一刀老衰したと侮られしは残念ありとビシリと打すへる、打たれる門人こそ飛んだ迷惑でございます、されば伊東一刀齋は、自分に腹の立つ事があるからして、毎日く門人を手酷く打すへる處より、漸次に稽古人が來て、毎様にある、然るに此伊東の道場に先達より足を止め、一刀の指南を受けて居る、伊達家の浪人で平松源治郎といふ者が此容子を見て源治先生、貴方は今度江戸表よりお召し出しにあらざりしを憤り、御門人衆へ手荒いお稽古をおさる故、稽古人が來あい様になりました、然し光國卿が貴方を老衰したとお侮りあさるあぞといふ事はけつして有りませぬ、これ事にお洩せん様」と異見をする、そこで一刀齋もフト心注ぎ一刀づ成程左様ぢや、光國卿を恨みしは吾が誤り、此上は御幼君康之助様のお行末を探し出し、天下の役人の眼を覺して呉ん」と此事を

を門人衆に言ひ聞し、康之助君のお行末を探させ、然して自分も折りく、幽谷深山に分け入つて、共にお行末を捜ねて居る、然る處茲に水戸家のお抱醫師で二百五十石を頂く、笠井周伯といふ名醫がございます、御長男の周市郎は幼年の頃より醫學の修業をなされ、今では父にも勝る名醫とある、然るに周市郎は大の臆病でございます、それに劍術が熱心で豫て習ひたいと望んで居た、丁度二十三才の時に父に此事を願ふ、すると父の周伯は周伯劍術を學びたいと申すが克が物を考へて見よ、其方の様うか柔弱臆病者が武術を習つて何の役に立つか、醫者は醫學に熟練し人の病氣を癒せば、それでお役に立つのぢや周市、これは父上のお言葉とも存じませぬ、町醫者あれば宜しいが、苟且にも二百五十石のお祿を頂き帶劔をいたすお抱へ醫者が劍術を知らいでありませうや、開は何故あれば今にも亂世とあり、君のお供をして戰場へ進みし時、倘敵が君の御馬前近くへ乗り込

んで來りし時、ヒをもつて敵が防れまするや、矢張鎧刀であく  
 ば防戦は出來ますまい、左すれば何うしても武術は習つて置ね  
 ばかりません」と父の異見も聞入れず、水戸家の御指南番田宮  
 勘八郎の道場に来り、委細の事を話して頼む、すると勘八郎は  
 其志しに感じ教道をする、臆病にしては却く記臆が宜しうと  
 ざいます二十三才より二十五才迄武藝を勵む、然るに水戸一家  
 中の壯年侍は周市郎に勝者が一人りもございません、然し眞劍  
 を見せるとブルブル、慄ひ出す、そこで一家中の壯年侍が、面白  
 半分で折り、眞劍を抜いて周市郎を脅す、處が或日師匠田宮  
 勘八郎は、笠井周市郎を一室に招き勘八郎偕て周市郎殿、其許は  
 拙者の門に入り、僅少か二三年にして天晴武藝熟練をせられ、  
 今一家中の壯年侍衆に一人りと勝者があひ、成れども情けあひ  
 あか眞劍を見るとブルブル、慄へる、これ柔弱臆病とや言はん、  
 左様うそ精神にて武術を學だ所が何んの役にもたらん、よつて

今日を限り止めてお丁いささい」と懇々異見をする、笠井周市  
 郎は、其盡吾家へ立ち歸り一室に這入り、ツクツク考へて「吾  
 が臆病は幼年より御兩親の御側で成長した吾儘より斯く臆病に  
 あつたので有らう、左様ぢや今より諸國を廻り修行をいたした  
 らば、些とは癒るで有らう」と書置を残して家出をする、然  
 るに周市郎は、何國の道場へ参りましたも敗た事はございませ  
 んが、眞劍にあるとブルブル、慄ひ出す、斯くして廻り、て野  
 州那須野ヶ原より二里手前の小田新田春木村といふ處へ來た、  
 頃は寛永十年十一月二十四日の丁度正午刻時分でございます、  
 何處かで支度をせんと見やる傍へに、野州屋孫兵衛といふ宿屋  
 が有り其家へ周市「コリヤ、免るせ」と這入つて來る、すると下  
 婢が下婢へエ、入らッしやいませ周市「面倒だが肴は何んでも宜  
 いが、一杯飲まして呉れんか下婢「ハイ、長まりました」と直ぐ  
 在合せの肴と酒を畑して持ち來る、周市郎は獨酌で飲むんで居

る下婢「モシお武家様、貴方はお國は何ちら様でございます周市、  
 乃公は常州水戸の家來だが、何うた武士に見ゆるか下婢「武士に  
 見ゆるかとは可笑事を仰しやれますが、大小刀を帯して在らッ  
 しやいますれば、お武家様でございませう周市「イヤ武士には見  
 へるが、實は水戸家の醫者だ……下婢「へエ、左様うでございま  
 すか周市「醫者は日本一だ下婢「それあれば、御修行あさらいでも  
 宜ちやアございませんか周市「其處に些と不足あ處が有るのた、  
 下婢「何んたか薩張り理由が判りません」と話して居る、すると  
 傍の床机に休んで居た旅人が、此事を聞て何思ひけん周市郎の  
 傍に出で來り旅人「モシ旦那御免あさい、只今承はりますれば  
 貴方は諸國を御修行にお廻りあさるさうでございます、私も旅  
 から旅を廻りまする者で有りませ、所謂旅は道伴れ世は情けと  
 か申しますれば、何うかお心安く願ひます、シテ何んですか貴  
 君は醫術の御修行ですか周市「何に醫者は日本一だから、修行し

あくつても宜いのだ旅人「ちやア何んの御修行に、お廻りあすッ  
 て在らつしやるのでございます周市「醫者で有りながら劍術が好  
 だ、それ故斯く修行に廻つて居るのだ、然し世の中には名人は  
 僅少ものちや、何處の道場へ參つても敗た事はあいな旅人「左様で  
 ございますか、時に旦那甚だ失禮ですが持ち合せの此盃、何う  
 かお請けあすッて下さい周市「拙者は只今飲み終つたのだが、然  
 し折角の親切を無にするも如何で、それちや頂く……旅人「へエ  
 お酌をいたします」と旅人が徳利を取つて酒を酌んとする、  
 其途端旅脇差が、パタリ抜ける、笠井周市郎は周市「キヤーツ」  
 と驚き持つたる盃を取り落し、ブルク、慄ひ出す、すると伴の  
 旅人は旅人「旦那、何うあすつたのです周市「乃公は眞劍を見ると  
 此通り慄ひが出るのちや旅人「笑言ッちや不可ません、貴方は  
 只今何處の道場へ往つても敗けた事はあいなと仰しやッたちやご  
 ざいとせんか、それに旅脇差の鞘走つたのを見て驚きあさるは

何うした事です周市「何んば名醫でも臆病といふ病ひを癒す事が出来ぬのは、誠に面目次第もかい……旅人「へエ、何うしても癒りませんか周市「これはかりは何うしても癒らんので有る」と話して居るを傍で聞いて居たる、野州屋孫兵衛を初め下婢下男は、アハ、ハ、ハ、と大口開いて打ち笑ふ……周市「イア何を笑ふか臆病でも醫者は日本一だ……下婢「オヤまた日本一、黍園子が聞いて呆れる」されば件の旅人は、何か心に點頭き旅人「へエ旦那また何處かでお目に掛る事もございませう、私はお先へ出立をいたしましたする」と周市「周市郎を尻目に掛け其儘其處を出て往きます後に笠井周市郎は周市「倍て御亭主、大きに面倒をいたした、これ勘定をして呉れ」と懐中より小判一枚取り出す孫兵衛「へエ、有難う存じます然し今夜は私方でお泊りあすつたら何うです、斯様う申しますると吾田へ水を引く様うでございしますが、此先が廣々たる那須野ヶ原で種々の獸物が棲で居りまして、誠に危

險な處でございませう周市「乃公は只真剣を見ると慄ひ出す臆病者だが、其外別に恐怖しいと思つた事は無い、其様を獸物が出たから却つて賑やかで宜からう」と拂いをして其處を立ち出で那須野ヶ原へさし掛りし時分は、早や日も暮れて物の白黒も判らぬ眞の暗、人家はあきやと薄き高蓋を押し分け掻き分け歩いて来る、折りしも向ふに火の光りが見ゆる、ヤレ嬉しやと其火を見當りに来て見ると、一人りの男が松火を携へ通り掛る、此時笠井周市郎は、摺違ひに其男の顔を見て周市「ヤア和郎は先刻春木の宿屋で出会たる、旅人ではあいか旅人「オ、これは旦那ですか、臆病の貴君がヨウ斯様お出でございました周市「乃公は先刻も話した通り真剣を見たら驚くが、其外に何にも恐怖と思ふたものは無いのぢや、時に何處か此邊に一夜の宿を求め人家はあいか旅人「へエ此先に庵室が有ります、私は庵主様とは懇意にして居りますから、御同道して参りお宿を頼みませう周市「そ

れちや何うか宜しく頼む」と彼の旅人に伴れられて来て見ると  
 薄き高堂が人の背よりも高く生へ茂りたる其中に、半町四面も  
 有らうといふ庵室が建て有る、其戸外迄来ると旅人「何うか暫ら  
 く此處に待つて居て下さい、私は庵主に會て頼んで来ます」と  
 中に這入る、後に笠井周市郎は、素より恐か人ではあいかからッ  
 ク、考へ、何うも合点の往かぬは此廣々たる原中に建たる庵  
 室、尙や山賊の住家では有るまいかと、心の容子を窺ふて居る  
 處へ懸て暫らくして以前の旅人出で来り旅人「サア何うぞ此方へ  
 お這入りあさい、借て庵主は婦人でございます周市「フム左様か」  
 と前後に心を配りあがら中に這入ひて来るといふ、サア此庵  
 主に住む婦人は一体何者でございませうや、例によつて例の如  
 し……。

第 四 回

借ても笠井周市郎は、旅人に案内をされ勝手元へ通る、すると  
 臺所には荒男が五六人、圍爐表に焚火をあし、自在土鍋を掛け  
 何か物を煮あがら、酒盛りをして居る、笠井周市郎は、庭に行  
 立み邊りをジロく眺めて居ますと、五六人の荒男か ○「ヤ  
 イ權太、何をして居るんだ、早やくお客人を此方へお通し申さ  
 ねねか權太「サア旦那、此方へお通りあさいませ周市「然らば御免  
 ん」と草鞋の紐を解き洗足をして、漸う奥の一室に通る、  
 此時一室の正面に年齢三十有餘歳の婦人が、緑りの黒髪を紫の  
 紐にて根元を結び下げ髪にして、身には自給子の衣服を重ね着  
 にいたし、三ッ葉葵の上紋付きし胸息に寄り掛つて居る、そこ  
 で周市郎は、何うも山賊夜盗とも見へず、借ては高貴の御方が



世を忍んでござるので有らうと察したから、遙か此方に平伏あし周市ハ……これは初めてお目通りをいたしました、拙者は諸國を修行して廻る者でございます、往き暮れて甚だ困難をいたして居りました、今宵は格別のお情けをもちまして、お宿を頂き有難き幸福に存じます婦人イヤ、これしきの事、何のお禮に及ぼうや、斯様うあ廢家あれど心置きあくゆる、泊つて下さい、斯る避地の事故さし上げる看ともあらざれど酒ありとも飲つて下され、コレ申し付けたる酒肴をこれへ……」ハイと應答へて次ぎの間より、白き衣類を着たる若き侍女が二三人酒肴を持つて出で來り、侍女「サア貴方、お一ツお飲みさされ」と酌をして呉れる、周市郎は心の中に、何共合点のゆかぬ事であるとは思ひましたが、然し毒を飲まして殺さんといふ悪意も有る様うには見へませぬからして、充分酒も飲み飯も食します婦人、今宵は旅のお疲れも有り何うかゆる、寝込んで下さい、何づれ

明朝何かとお話しをいたしませう周市誠に種々のお待遇有難う存じます、借て先刻より貴女の御容子を見るに、人品骨柄卑賤からざるは、高貴の御方と見奉つる、斯る寂寥たる原中にお住居あるは、仰も如何ある理由でございますや、承はりたい婦人「妾は些と仔細有つて高貴の御方を守護仕奉るに、就きそれ故斯く世を忍んで居るのでございます、然し只今は詳細しく申し上げ、事は叶ひません、重ねて御尋は御無用……」周市「イヤ、左様うあ事あれば強てお尋ねはいたさん、然らば明朝お目に掛ります、笠井周市郎を一室に招き婦人「借て先生、妾は貴方に折り入つて一ツの願ひがございます、當春以來曲者の爲に足に疵を受けました、表向き醫者を招いて治療をすか事が叶いません、故に下部を旅人にして諸方へ出し、御名醫を探させて居りました、豊に計らんや昨日春木にて云云斯様うくと下部

の知らせ、それ故下部をもつて貴君を當座室へお伴れ申しお宿  
を参らせたのでございませう、何うぞ先生の御情けにて早やくも  
疵の癒ます様う御治療を願ひます周市如何にも承知いたしました  
一應疵をお見せあされ婦人「ハイ、御覽下さい」と足を出し疵口  
を見せる周市「フム、此疵を今少し拾置く時は破傷風とある、左  
すれば御生命に關はる……婦人「モウ癒る見込みはございません  
か周市「イヤ屹度癒して進せる、然し薬品を手に入れるのが難し  
うござる婦人「それは何くとお認め下されたら、早速手に入れ  
る事にいたします周市「宜しうござる」と藥名書を認めて相渡す  
早速下部に言ひ附け此藥を取り寄せる、然して周市郎は、暫時  
此處に足を止め日々治療を施す、然るに五六ヶ月はかゝると思  
ひの外、二三月にて全治いたしました、婦人の喜び一方から  
す、先生「と大切に待遇をする、そこで周市郎も、誠心居心  
が宜しうございませうからして、此處に彼是一年ばかり足を止

て居ましたが、或日の事に周市郎は、彼の婦人に向ひ周市「借  
借者も永く御厄介に相成りましたが、明日は一先出立をいたし  
ます婦人「これは甚だ失禮ではございませうが、御道中旅費の足  
にして下され」と手文庫の中より金一百兩を取り出し、周市郎  
の前に差出す周市「これは折角の御芳志忝けなく頂戴仕つる」と  
懐中に納める婦人「借て妾はまだ先生の御所御姓名を承はりま  
せせが、シテ貴方は何國の何んと仰在る方でございませう周市「さ  
れば拙者は東國の浪人、笠井周市郎と申す者でござる婦人「妾も  
只今實名を明す筈あれど、豫て申し上げました通り次第あ  
れば、身の素性を語ります事は御容赦、其中に世に出る事に  
ありましたから、御恩報じをいたします、何うぞ何國へお出で  
にありましたも、此隠家の事は御他言御無要に願ひます周市「委  
細承知いたしました」そこで其日の中に暇乞をして、翌朝此處を出  
立これより諸所がとて出て来たのは、下總國小金

の驛傍へに一せん飯屋が有りまして、馬方や半方雲助が這入つて飯を食して居ります、笠井周市郎も、其家へ這入つて参り床机に腰を掛け休んで居る、すると飯屋の婆々が婆々旦那様、御時分でございませうが、何が差上げませうか周市酒を二合ばかり爛して持つて来い、婆へエ、畏まりました」と有り合せの肴を添へて持ち来る、周市郎は、獨酌で飲んで居る、所へ戶外よりドヤ／＼と四五人の道樂者が這入つて参り道樂オ、婆アさん酒を爛て持つて来ナ、婆これは入らッしやいませ、只今稽古戻りでございませうか道樂オ、然うよ、早やく酒を持つて来ひ、婆へエ、宜しうございませう」と酒肴を持ち来る、そこで道樂者は身体の文身が自慢で皆々大肌脱ぎで、酒盛りをして居りました、が、應て其中の一人りが、笠井周市郎に向ひ、〇モシ其處にお在でござるお武家様、貴君は劍術の御修行と見へます、周市オ、如何にも左様う、〇失禮ながらまだお前様は劍術遣いと云へ

ねわ、劔振り太刀振り棒振りのへッポコ先生でせう、周市ヤイ、へッポコとは、酷ひ事を言ふ奴だ、何處ぞ此邊に劔術の先生が有るか、〇お前様は鳥あき里の蝙蝠も同様で何んにも御存じは有りませせんが、此下總小金には日本開闢以來の大先生が居あさるんだ、周市開闢以來の大先生とは誰れの事だ……、〇オ、其大先生のお名前を聞いて驚きあさるゝ周市、又物を見たら腰を抜すが、名前を聞いた位いちや驚かあ、〇又物を見たら腰を抜すとは、何うです……、周市イヤそんな事は何うでも宜い、して其大先生と言ふと、〇一刀流の開祖で、伊東一刀齋といふ大先生だ、周市フム、何んと申す、借ては天下に御高名の聞へ涉つたる伊東一刀齋大先生が、〇何うだ、開闢以來の先生だらう、周市シテ道場は何處に在る、〇此處二三丁往きあさると、左り側に楠の大木が有る其處に門構へ玄關附きの邸が有る、其家が一刀齋先生のお邸だ、周市それは克く教へて呉れて忝けあ、コレ婆ア

さん此金で勘定を取つて呉れ」と小判一枚放り出す。兼々「斯様を  
に御多分に頂きましては……周市「残り茶代に取つて置けッ」  
と言ひ捨て、其儘其處を立ち出で、漸うく伊東一刀齋の道場  
玄關に掛り、市「お頼み申す……」すると内より段小倉の稽古袴  
を着けたる門人が出て来り、門人「ドヲレ周市拙者は水戸家の醫士  
笠井周市郎と申す者でござるが、剣道熱心に就き諸國修行をい  
たして居りまするが、いまだこれぞと言ふ先生に出會し事なく  
然るに今日からはからずも御當地に來り、伊東先生の事を承はり御  
教道に預り度斯く推参いたしたり、何卒宜しく御取次をお願ひ  
申す取次「ハイ、其由先生へ申し入れますれば、暫時此處にお扣  
へ下された」と言ひ置いて道場へ來り取次「ハ、先生へ申し上げ  
ます、只今武術修行者が参り斯様うくに申して居りまするが  
如何取り斗らひませう」刀「フム左様か、苦しうかいこれへ通せ  
取次「ハ、ッ」と再び玄關に参り取次「サア、お修行者には此方へ

お通りあさい周市「然らば御免ん」と洗足の水を貰つて足を洗ひ  
門人の案内に伴われられて道場に通り此方に扣へて居る、すると  
見番所に居る伊東一刀齋は「刀」フム、其許が水府公の御家來笠  
井周市郎殿と言はれるか、某しは伊東一刀齋でござる、初めて  
御面會を申す周市「ハイ申しおくれしました、拙者は笠井周一郎で  
ござる、何卒一刀流の御指南に預りたく存じます」刀「御熱心か  
れば御教道申さう、然し今日は疲れてござる故、明朝より指南  
をいたす周市「何うか宜しく御願ひをいたします」倍て其夜明け  
て翌朝笠井周市郎は、早やくより道場へ出て待受けて居る、其  
中におゝる門人も來る、伊東一刀齋は、昨日初めて入門したる  
従へ道場に出る、門人も來る、伊東一刀齋は、昨日初めて入門したる  
笠井周市郎の技倆を試して見よう、門人衆と立合して見ると  
一人も勝者がございませうと、門人衆と立合して見ると  
其許は醫術も餘程出來る様子、殊に武術も天晴御鍛練で有る、

シテ見れば此上修行をかざる事は入りませぬ、よつて水戸家へ歸られたら如何でござる。周市拙者は一ツの難がございます。一ツ、シテ、其難と言はれるは……周市誠に情けな事には生得。臆病にして、真剣を見ますとブルブル、慄いが出ます、それ故。武術修行に出ましたからば、少しは臆病が癒らうかと斯く漫遊いたして居るのでござる。一ツ、フム左様か、イヤそれかれば少し修行をいたされたら癒るで有らう」と話して居る、それを聞いて、修行人衆は、周市郎を驚かして遣らうと、態と一ツの鞘を拂いたる。門人衆は、周市郎は、キヤアツと言つてアル、一ツ、驚ひ出す、此ふ、見ると周市郎は、大口開てアハ、ツと打ち笑ひ門人、ヤア、体を見て門人衆は、大開口してアハ、ツと打ち笑ひ門人、ヤア、笠井の臆病先生、と嘲弄るを、伊東一刀齋は、一ツ、コレ御一同決して笑ひ給ふ、醫術も充分出来武術も衆に勝れたる技倆を、持ちあがら修行に廻るは、臆病と云ふ病が有る故だ、かからず以後は嘲弄る事は相成らん」と門人を叱つて居る、然るに或日

大雨の降りし徒然に、伊東一刀齋は、稽古休みと門人を集めての大酒盛りの上、四方山の雑談話をして居る、すると福原多四郎といふ門人が、福原何んと御一同、世の中に不思議な事が克く有ります、各自方が諸國修行中に、何んぞ左様言ふ事に、お出合あされはいたしませんか、サア今日は先生へ御酒のお肴に、何んありと一ツ宛お面白きお話しをいたされよ」とここで一人り、が、不思議な話しを仕初める、中にも笠井周市郎は、酒を飲みながら人の話しを黙って聞いて居る、すると福原多四郎が、福原笠井氏、御一同が斯く面白き話しをいたして居られるに、御貴殿一人りが黙って聞いて居られるが、定めて諸國修行中に、何にか珍説奇談が有りませう、サア此處にてお話し有れ」と言はれて周市郎は、只差俯向て居ました、然し此義は他言を擲り、周市それではお話しをいたします、偕て茲に一ツの不思議と言、ます故何うぞ此場切りに願ひます、

ふは、抑もく、拙者生得臆病にして、福原、そんな事は、何うでも宜しい、只、不思議な事だけを……周市、サア、其、不思議な話しをするには、初めから言はんと判らん、二十五才の春武術修行に出るに、それより諸國の深山幽谷を廻り、丁度、去年の十一月、通り掛つたのが、音に名高き野州那須野ヶ原、往けども、人家はあし、其中に夜にも入る、拙者も殆んど困難に及び如何はせん、と、途方に暮れて居た折りしも、其處へ通り掛りし旅人の案内にて、歩つて来たのが、其、原中に建たる半丁四面ばかりの庵室、借てこそ、山賊の住家と心得中に通つて見れば、奥の一室に其、庵主と見へて、年齢三十四五歳の尼御前、姿は斯様うく、にして、人品骨柄卑賤からず、何うも山賊とは思はれず、又、狐狸に誑されて居るのでもございませぬから、漸うく、其夜は、其庵で泊る事にあつた、福原、フム、貴殿は、臆病だが、よう、其様處で泊つたナア、それから、何うした、周市、借て、其翌朝、尼御前が、拙者に向つて、斯様うく、

云々と物語り然して、悪人の爲に、足に手疵を受け、たから、癒して、呉れ、との段々との頼み、そこで、醫は、仁術の事を、あれば、否む事も、あらず、早速、治療を施し、二三月にして、疵を癒した、然るに、拙者、出立の時、に、尼御前の申すには、妾も、今に世に出る事も、ございませぬ、其時は、屹度、御恩報じを、いたします、故、か、あらず、此、隠れ家の事、は、他言をして、呉れ、あと、申した、が、何んと、各々、方、は、此、尼御前を、何人、と思はれるや、拙者は、今に、合点が、参らん、先、諸國、漫遊、中に、不思議、といふのは、これで、ござる」と、話して、居るを、餘念、なく、聞いて、居、たる、伊、東、一、刀、齋、は、一、刀、平、松、氏、只、今、の、話、し、を、聞、れた、か、こ、れ、を、日、頃、某、し、が、お、行、術、を、御、捜、ね、申、す、康、之、助、様、を、伴、れ、て、逃、げ、た、る、毒、婦、玉、の、井、の、隠、れ、家、で、は、有、る、ま、ひ、か、松、平、仰、せ、の、如、く、倘、や、そ、れ、か、も、知、れ、ま、せ、ん、一、刀、フ、ム、吾、こ、れ、よ、り、急、ぎ、野、州、須、那、野、ヶ、原、の、隠、れ、家、に、乗、り、込、み、玉、の、井、を、生、捕、然、し、て、康、之、助、様、を、御、公、儀、へ、差、出、し、天、下、の、爲、に、御、奉、公、を、せ、ん」と、既、に、身、支、度、に、及、ば、ん、と、す

るを、平松源治郎は平松先生マアお待ちあされ、先充分其庵室の様子を探り、其上にてお乗り込みあされたら如何でございませぬ、一ツシテ其庵室を探るは、何うしたら宜しい平松「されば拙者が笠井氏を案内者として、那須野ヶ原の庵室に乗り込み、篤と様子を探りて参りませう」一ツ「それでは何うかお頼み申す……」平松「借て周市郎殿、只今貴殿が不思儀と言はれたる、尼御前といふは云々斯様う、有らうと察したり、よつて御苦勞がら拙者を其隠れ家迄案内して下さらんか周市「フム、宜しい、天下の謀叛人と有るからは、如何にも御案内をいたそう」そこで二人は旅の調度を整へ、二人「先生、左様から……」一ツ「それぢや何うか宜しく頼む……」二人「委細承知」と小金を出立して泊りを重ねて漸う、野洲那須野ヶ原に來た頃は、其日の丁度申の刻時、處が周市郎も隠れ家へ一度來たばかりで確と方角が判りませぬからして、岩に腰打掛け休んで居る、處へ傍への落き尾花の中よ

り柴を背負出て來る者が有る故、何人あるやとよく見れば、見覺への有る下部の權八でございませぬ、周市「ヤア、和郎は權八ぢやあいか權八オ、貴方は笠井先生ぢや有りませぬか、誠に御機嫌宜しうございませぬ、尼御前も毎度貴方のお風評をして在らッしやれます、周市「昨年來より奥羽筋の方を漫遊中、はからずもこれある朋友に出會たる處より、今般同道して本國へ歸る途中、有る、何うか一泊を頼む權八「へエ、お安い事でございませぬ、サア御案内をいたしませう」と同道して庵室へ立歸つて参り、尼御前へ云々斯様と話しをする、すると尼御前は「尼フム左様か、それでは早速これへお通し申せ權八「へエツ」と其處を立つて聽ての事に、二人を伴れて通る、尼「オ、これは笠井先生でございませぬか、先年は段々と御世話にあり誠に有難う存じます、周市「イヤ其御禮には何うも痛み入りませぬ、借て尼御前これに居られるは拙者の朋友平松源治郎と言はれる、何うか宜しく……」尼「

これは初めてお目に掛ります、妾の事は定めて笠井殿よりお聞き下されたでございませう、少し憚る事が有りまして斯く世を忍んで居るのでございませう、平松ハ、左様か、某しは天下無祿の浪人でござる、何うか今宵一夜の御厄介をお頼み申す、尼お心置さかくお泊り下され、コレ申し附けたる酒肴をこれへ持ちや「ハ、ツ」と應答へて次の間より酒肴を持ち来る、尼「サア、何はあくと一献召飲つて下さい、平松、これは種々の御待遇千萬忝けあい、然らば頂戴いたす」と深夜迄酒盛りをする、聽て酒宴も終り漸うく一ト間に這入つて寢床につく、すると笠井周市郎が小音で周市源治郎殿、何うでござる容子が相判りましたか源治、されば人跡絶たる此那須野の原中に庵室を建て、住居而已ならず殊に怪しき奴が集り居る處を考へれば、これ只の婦人で、は有るまひ、尙此上篤と實否を糺して見よう」と其夜は眠りにつく、借て其翌朝にみると俄に暴風が吹き起り大雨とある、そ

こで二人りは出立する事が出来ませんから、これ僥倖と其日も滞在する事にある、すると庵主の尼御前は、二人りを一室に招き、尼借てお二人り様、今日は生憎大暴風とありし故、逆も御出立は出来ませう、よつて緩々御逗留をさせますよう」と又々酒肴を調製させ二人を待遇、借て其中におい、酒酣はとある、此時平松源治郎は、心の裡に渠が胸中を探ぐつて遣らうと庵主に向ひ平松借て拙者尼御前へ御伺ひ申したき事有り、開は餘の義でもございませぬが、貴女のお身の上はこれある笠井氏より略承はつて居りますが、何んでも貴人の御方が悪人の爲に世を逼められてござると察したり、就きましては吾々事と品とによりましたら屹度御相談のお對手にあり申す故、何うかお話しをして下さらんか」とシリツと側へ語り寄る……すると尼御前は、何か心中に打ち點頭、尼「これは、御信切ある其お尋ね妾誠に嬉しう存じます、さらば大事を打明けてお話しをいた



天 下 豪 傑 惡 狐 退 治

しまするが、此事他へ渡さんといふ御金打をして下され  
何にも承知」と此處で二人は金打をする。尼偕てお二人様、  
此上は妾の身の上を話します。善悪に均らすお力にお成り  
下されるか。兩人刀に掛けて、抑も妾は何をか包まん、慶長五年の  
は、一ト通り申し上げます。抑も妾は何をか包まん、慶長五年の  
秋九月濃州關ヶ原にて亡びたる、大谷刑部吉隆の一族、武田作  
左衛門の娘にして玉の井と申す者あり、然るに先年父と申し合  
せ云々斯様うくの謀り事にて、首尾能く二代將軍秀忠公の御  
愛妾に上り、名をお玉の方と改め、然して折りも有らば徳川の  
天下を顛覆さんと思へども、いまだ時機來らず、其中に二代公  
御隠居おされ大御所とお成りあさる、竹千代君御相續の上三代  
將軍家光公とお成り遊ばす、妾は前の將軍家のお胤を宿し月滿  
てお産み申したのが、即ちこれにお在で遊です御公達康之助様  
あり、然るに其後年月経つて大御所秀忠公御他界遊はしたに就

天 下 豪 傑 惡 狐 退 治

き、三代將軍家光公を弑し奉つり、康之助君を將軍職にあし、  
天下を一統せんと謀叛を企てしが成就せず、遂には露顯に及び  
西の丸へ討手が向ひし故、夜に紛れ其場を切り抜け、康之助君  
をお供申して漸う、此地迄遁れ來り、人の氣附かぬ此那須野  
の原中に一ツ家を繕ひ、味方を語らひ時機の來る迄と斯く世を  
忍んで居るのでございませ、何うぞお二人様には、今より若  
君にお隨從下され、さすれば事成就の上は一國一城の主にし  
するが、如何でござる」と所謂天に口かし人をもつて言はしむ  
ることは宜あるか、毒婦玉の井も己れの悪事を探りに來て居ると  
は、夢にも不知、到頭自分の口から饒舌りしは最早亡びる時機が  
來たのでございませ、此時笠井、平松の二人は、心中にシテ  
ヤツタリと打ち喜び、兩人ハ、倍てはこれに在らせられる若  
様は、二代將軍秀忠公の御公達様で有りしか、それとも知らず  
不禮の段々平に御容赦、如何にも吾々屹度お味方を仕つらん、

……玉の「早速の御承知誠に嬉しく存じます、然らばこれに御血判をして下され」と手文庫の中より連判状を取り出し、二人りの前にと差出す、すると平松源治郎は平松委細承知」と連判状に名面を認め小指を斬つて血判をかき、サア笠井氏、血判をかされ、コレ周市郎殿何んだ雨眼を閉じてブル、慄つてござる周市拙者は何うも刃物を見ては堪らん、斯うやつて居る中に何うかお頼み申す平松貴殿程の御人が刃物を見た位に恐れるとは誠に可笑、宜しいと眼を閉じて居る中に、小指を斬つて血判をする平松血判を御覧下されと差出す玉の「フム、儘に血判を見届けました、何うぞ此上あがら宜しく御頼み申す……」二人吾々身命を抛てお味方を仕つる」と此處で盃の取り遣りをして深夜迄酒盛りをする、斯くして暫らく此隠れ家に足を止め篤と様子を取り調べて置いて、或日平松源治郎は、玉の井に向ひ平松借て玉の井様、拙者奥羽兩國漫遊中諸所にて出會し諸國の浪人者

有り、これ等の浪人を語らつて参ります、さあき時は今にも一朝事有る時は、迎もこれ丈の御人数にては敵に抵抗事は思ひもよりません玉、それでは何うぞ宜しくお頼み申す、これは甚だ些少あれど御道中の旅費の足しにして下され」と金五十兩を差出す平松、こは有難く頂戴仕つる」と懐中に巻き納め其儘此處を出立して道中へ出ます、すると笠井周市郎は周市平松氏、貴殿は何故一味黨の連判状に血判をいたされた平松成程血判といふものは誠に重き事であるが、然し連判をする時に心の裡に神様へお断りがして有るから、けつして差支へはござらん」と急ぎくで下總國小金の里に立歸り、委細の事を伊東一刀齋に物語ります、取らんと、野州那須野ヶ原ある隠れ家へ乗り込みの一段、一寸息入れまして申し上げます……。

借ても二人は漸うく下織小金の伊東の道場へ立歸つて参り  
 兩人ハ、先生只今……一刀オ、御兩士、貴殿等のお歸りを待  
 ちかねて居た、シテ庵室の容子は何うで有つたか兩人ハ、段々  
 々容子を探りましたる處、云云斯様うくにして全く毒婦玉  
 の井の隠れ家に相違はございませぬが、然し只恐れ外きは前の  
 將軍家の御公達、三代將軍家の御舎弟康之助様に万一の事が  
 有りましたは一大事でございます一刀フム、借てこそ天下を騒  
 かさんとあしたる毒婦玉の井で有りしか、今に見よく征伐を  
 いたして呉れん、此上は片時も豫猶する處にあらず、サア周市  
 郎殿其許は急ぎ江戸邸へ立歸り、久々中納言光國卿のお目通り  
 をして一伍一什を言上いたせ、而して光國卿の御命令に隨ひ事

をかさん周市ハ、心得たりと周市郎は早速下織小金を出立  
 して、急ぎ果して江戸小石川邸へ立歸つて來り、御側御用人山  
 邊主税に對面して周市拙者はいまだ武術修行中の身には候得  
 も、天下の一大事を御館様へ言上仕つらんと存じ、今日突然と  
 立歸りましたる事にございます、何卒此義お取次を願ひます  
 主税「フム、然らば其由を申し上げん」と君公の御前に出で云  
 新様うと言上に及ぶ、すると光國卿には光國オ、苦しうあ  
 これへ通うせ主税ハ、如何にお次に控へし笠井周市郎、君公  
 のお免しおればこれハ、ハ、ツと應答へて周市郎は、衣紋を正  
 くして一間に通り遙か此方に懸懸に兩手を支へ控へて居る、此  
 時水戸中納言光國卿は光國オ、周市郎か、久々に對面をいた  
 す、先其方にも無事にて目出度……周市ハ、御館様にも慶し  
 き御尊顔を拜し奉つり恐悦至極に存じます光國「ム、其方武  
 術修行中で有るに、何か天下の一大事を申さんと立歸つたる由

シテ其一大事と申すは、如何ある義ぢや周市ハ、其義は云々斯  
様うくでございまする」と一伍一什を言上にあふ、すると光  
國卿は至極お喜び遊ばし光國オ、天晴克くも知らせたり、  
毒婦玉の井の所在を捜し出だせしは、これ全く伊東一刀齋の働  
きあり、よつて至急一刀齋を召出し毒婦退治を申し付ける、先  
其方は次へ下つて休息いたせ周市ハ、光國ソレ、誰れか有る、  
急ぎ下總小金の里に罷り在、伊東一刀齋、仙臺の浪人平松源治  
郎の兩人を至急召出せ」との嚴命でございます「ハ、ツ」と應答  
へて御使番馬に打跨り、急ぎ下總小金に來り、此由伊東一刀齋  
に申し聞す、一刀齋は委細長まつたとお請けに及び、御使番を  
歸して置て直様身支度をいたし、平松源治郎を引伴れ急ぎ  
で江戸表小石川ある水戸お邸に來り、お取次をもつて中納言様  
へ申し上げる、すると苦しうかいこれへ通うせとの仰せが下る  
そこでお側お取次の者が、兩人を案内して奥書院へ伴れて通る

兩人は遙か下段に兩手を突き控へて居る、此時正面お袴の上に  
お着座遊ばして居らせられる光國卿は光國オ、其方が豫て高  
名を聞及ぶ伊東一刀齋と申すか、予は光國で有る、初めて……  
「一刀ハ、ツ」と一刀齋よりも御挨拶を申し上げる光國フム、先  
其方は暫時予が邸に滞在せよ、予はこれより登城をいたし、此  
趣を將軍家へ言上に及ぶ」直に紅葉山千代田城へお昇り有つて  
將軍家光公へ御對顔の上、一と通りを言上に及ぶ、すると家光  
公には家光フム左様か、毒婦玉の井を討取らば自然と惡狐も亡  
びる、然し康之助は御父台徳院殿様の御遺言も有り、殊に予が  
爲には舍弟で有るからして、勇士の者に申し付け充分保護をい  
たさせよ光國ハ、畏まり奉つる」と御前を下り小石川館へお  
歸りの上、伊東一刀齋、平松源治郎、笠井周市郎を召され光國  
只今登城の上將軍家へ言上に及ひし處、上様の台命には云々斯  
様く、よつて康之助君にお怪我のあき様保護せよ、尙謀事は

斯様も前年来より武術修行に出し故、最早臆病も癒つたで有ら  
 う、よつて今度は充分の働きをいたせ、周市ハ、仰せには候得  
 ども、情けあい事には拙者いまだ臆病が癒りません、矢張真劍  
 を見れば、慄ひが出来ます、光國ア、困つた奴ぢや、アハ、ツ」と  
 お笑ひ遊ばし、光國然らば其方は伊東一刀齋に附随ひ、野州那須  
 野の隠れ家に参り、いよ一同行が働らく時に、物蔭に忍んで  
 様子を窺ひ、只康之助君をお助け申せよ、周市ハ、光國何うちや  
 此役からよもや腰の抜ける氣遣ひは有るまひ、周市イヤ、これは  
 詢に恐れ入ります、倍ても水戸中納言光國卿の御命令に随ひ、  
 毒婦玉の井退治に乗り出す人々は、伊東一刀齋、平松源治郎、  
 水戸家の勇士朝比奈彌太郎、御指南番田宮勘八郎、同新十郎、  
 相列んで、磯貝權十郎、鈴木半左衛門、稻垣左司馬、高木重太夫、  
 佐々木助右衛門の此十勇士と、臆病者の笠井周市郎の十一人、

何づれも黒の紋服に野袴を穿ち、金銀鍍たる大小刀を帯し充分  
 の身支度をいたして、夜の中に江戸表を出立に及び、漸うやく  
 野州那須野ヶ原の一ツ家に來る、此時平松、笠井の兩人は先に  
 立つて庵室の中に這入つて來り、毒婦玉の井に對面に及び、兩人  
 偕て玉の井殿へ申し上げる、豫て示し合せたる企てに就き今般  
 味方の黨を同伴して参つたり、何うか御對面を願ふ玉の、これは  
 御一同初め、何卒此上あが宜しく御味方をお頼み申す一同ハ、  
 りませう、何卒此上あが宜しく御味方をお頼み申す一同ハ、  
 如何にも承知……玉の、サア、何うぞこれへ御血判を願ひたい」  
 と連判状を差出す、此時伊東一刀齋を初め、勇士の人人は、心の  
 裡に血判も何れも入るものかとは思ひました、然し敵に油断を  
 させるのでございませう、互に滅茶苦茶な名前を書て血判を  
 する、されば其夜は一同と共に夜の深る迄、大酒盛り、倍て其翌  
 晩、豫て示し合せたる水戸家の同勢三百人、忍びく、で那須野の

原に來り、隠れ家の左右前後を取り圍む、此時隠れ家の中に有つて、伊東一刀齋は一刀サア御一同、最早毒婦征伐の時機來つたり、何づれも御準備有れ一同ハ、心得たり」と勇士の人々密に越上り早や充分の身支度に及ばれたり、然るに臆病者の周市郎の姿が見へあから、何うしたかと思つて見ると隅の方へ這入つて寝て居る。○サア周市郎殿、時刻でござる早や準備をいたされ、周市拙者は例の臆病故御免んを蒙る。○ダカラ貴殿は物蔭に忍び、若君を守護いたされよ周市心得たり」と起上り身支度をして密に物蔭に身を忍ばせて若君を助け出さんとシツと容子を窺ふて居る、其中に早や夜も深く更け涉り、彼は子の刻にもある折りしも隠れ家の前後の方に、何かバチ／＼と物音がする故、玉の井は何事あらんと起上り見ればこは如何に、表と裏の方に炎々と火が燃上つて居るからして、これはとばかり打驚き玉の「サア御一同、火事でござるぞ起き給へ」と聲高々

と呼はつて居る、此時伊東一刀齋は、天地に響く大音聲に一刀齋と申す者あり、今般天下の副將軍水戸中納言光國卿の仰せを蒙り當隠れ家に向ふたり、最早謀叛露現の上は所詮敵はんサア尋常に細に掛るや又は討取らうや、如何に」と詰寄つたり、續いて勇士の人々は吾は水府の藩何の某しと銘々思ひに名を名乗る、すると毒婦玉の井は玉の「倍てこそ汝等は徳川家の間者で有つたか、謀略に陥入りしかア、ラ残念口惜しや、イテ此上は妾の手練の程を見せ呉れん」と言ふより早や傍へに掛けたる薙刀を取つて、風車の如くリツ／＼と打ち振り、伊東一刀齋へ切つて掛る、伊東一刀齋は「一刀何を小癩あッ」と粟田口の住人近江守忠綱の大刀をズラリと引抜き、切り込む薙刀をガッキと受け平め、上段下段と火花を散して戦ふたり、折柄次の間に寝臥て居たる下部等は、起上り此体を見て大いに驚

下部「ソレツ、尼御前を助けよ」と撥と横合より切り込んで来る  
を、勇士の人々は勇士「エイ、面倒あり」と片ツ端よりハツタ  
と斬り倒す、此時水戸家の勇士朝比奈彌太郎は彌太「ヤア、各  
自、斯る名もあき奴原に目を掛け給ふか、毒婦玉の井を逃して  
は一大事、生捕にするには及ばす手に餘らは討取つて了へ」と  
下知をする、心得れりと勇士の人々は、玉の井の左右前後を取  
圍む、これが爲に最早玉の井の運命も儘んとする、折りしも不  
思議や俄に一天墨を流せし如くカキ雲り眞暗とあり、ゴロ  
鳴り出す震動雷電、庚申山より吹下す嵐の爲に小石を雨霰の如  
くに吹飛ばすは、實に物凄き有様にございませす、惜ても伊東一  
刀齋を初め其他勇士の人々は、擔ます屈せず吾一に毒婦玉の井  
を討取らんとする中に、彼方此方にバ……と光る數多の狐火、  
すると傍への殺生石の上に悪狐が現はれ、頻りに毒氣を吹掛け  
る、これが爲に勇士の人々は、ア、ツとばかりに身軀痠み眼が

飛び、此隙に玉の井は、康之助様を伴れて逃げんとするを、  
垣左司馬、佐々木助右衛門の二人が追ひ駆け來り、玉の井の  
に手疵を受け搦と尻居に打ち倒れる、此体を見て朝比奈彌太郎  
田宮親子、仙臺の浪士平松源治郎は、  
「はせし」と追ひ詰め來る、又も毒氣を吹掛ける、勇士の人々は  
眼が曇り身自由からず、此間に玉の井は、裏手の方へ逃げ出  
す、折りしも侍への茂の中より現はれたる、武智光秀あら  
勇壯ございます、臆病の笠井周市郎は周市「ヤア、毒婦待てッ」  
と呼び止める玉の「オ、汝は笠井周市郎か、よくも妾を救たナ  
ア、此處で生命を取る奴あれど、一度妾を助け呉れたる恩も有  
れば救け遣はす周市「玉の井、汝がお伴れ申して居る、若君様を  
拙者に手渡しをせよ玉の「ヤア、黙れッ、此若君を汝に渡ししてある  
べきや、妨害をせず其處を退け」と懐劍を抜て振り廻す、キ  
ヤアツと言つて周市郎は、其處へ腰を抜す……其中に玉の井は

天下豪傑惡狐退治

康之助様を伴れ何國ともかく姿を隠して丁いたしました、其處へ水戸家の同勢二百人が乗り込み来る、火の中で焼死或は切り死生捕れるも有る、伊東一刀齋を初め何づれも勇士の人々、肝心毒婦玉の井を取り逃せしを残念がる、然し笠井周市郎は、康之助君をお救ひ申したで有らうと、一同裏手方を探して見ると周市郎は傍に打ち倒れて居るからして、〇ヤア周市郎殿、何ういたされたか周市云く斯様うくで腰を抜しました、何うか御推量下され」すると一同は「同アハ……ッ」と大口開いて打ち笑ふ……此時伊東一刀齋は「刀取り逃せしは是非も無い、サア此上は當隠れ家を焼拂ひ一洗江右表へ引上げ、此山を水府侯へ言上せん」と此處で隠れ家を焼拂ひ一洗江右表へ引上げ、此山を水府侯へ立歸り、中納言光國卿の御前に出て、一同打揃い江戸表小石川館へ爲に妨害され、毒婦玉の井を取り逃しましたる段、何共申し譯がございませぬ光國イヤ、汝等の落度にあらず、いまだ亡ば

天下豪傑惡狐退治

す時機が来たらるので有らう、予はこれより登城をして此次第を將軍家へ言上せん」と伊東一刀齋を止め置て直様千代田の御城へお登りとなり、事の次第を將軍家へ具に言上に及ぶ、すると將軍家には、伊東一刀齋を初め其他勇士の者共へ御賞美の御上意が下る而已ならず、それ／＼に御褒美の金を下し給はる、されば水戸光國卿は、此御上意を承はり小石川館へお歸りの上伊東一刀齋、仙臺の浪人平松源治郎を召され、云云斯様うくと將軍家の御上意の趣きを申し聞かす、すると伊東一刀齋は「一刀ハ、上様よりお叱りを蒙ると思ひの外、却て御賞美の御上意を下し給はる而巳ならず、まだ其上に莫大の御賞金迄も下し置れるは、冥加至極に存じ奉つる」と御厚禮を申し上げ御暇を頂き御前を下り、冥加至極に存じ奉つる」と御厚禮を申し上げ御暇を頂サアこれから此奥は何うなりませうや、次回に詳細しく申し上げる事にいたします……。



借ても大公儀におきましては、天下の諸役人方は種々御評議の上、關八州の諸大名へ天下を騒さんとしたる、毒婦玉の井の行方、證議せよと御沙汰とある、之れによつて諸大名は御領分の山々谷々或は海邊在々掛けて嚴しく御詮議をなさるに、何うしてても所在が知れませんが、知れぬも無理か茲に毒婦玉の井は、野州那須野ヶ原の隠れ家を通れ、同區庚申山の奥に猿涉りといふ人も通はぬ、嶮岨の大難所がございませぬ、此處に岩崖を繕ひ住居とあし、康之助君に文武兩道を教へ飽までも、此若君を將軍職にして天下を一統せんと謀叛を企て居る、處が康之助様は早や十三才と御成長あさる、身体強壯にしてお勇力も有り、其上

文武の道を充く記懸あさる、流石は二代公の御落胤丈け有つて、誠に聰明伶俐の若君でございませぬ、されば其中に年月経て早や、寛永十四年とある、然るに同年四月十七日、三代將軍家光公には、野州日光方へ御社參に就き、此事前もつて仰せ出だされる、そこで御老中御月番より、江戸町奉行或は道中奉行へ、將軍家御通行の途々不都合のあき様にいたせとの、御沙汰が下る、之れによつて町々在々掛けて道路普請しを仰せ付けられる、最も御出立の前日に道中奉行増山河内守、下檢分として江戸を出立、借てもいよ御當日とある、江戸城お留守番には、越前福井の城主御高七十五万石、越前少將忠直卿、懸て御出立の御時刻とある、するに阪下御門お太鼓櫓に有つてドン／＼と、五ッのお太鼓を打ち出だす、これが相圖と見へて御乗り出だしに相成ります、旗下が二行に列んで進む、其後は續いて寺社御を着けたるが、

奉<sup>り</sup>行<sup>つ</sup>、肥<sup>前</sup>國<sup>大</sup>村<sup>の</sup>城<sup>主</sup>三<sup>萬</sup>石<sup>、</sup>大<sup>村</sup>丹<sup>後</sup>守<sup>重</sup>俊<sup>、</sup>若<sup>御</sup>年<sup>寄</sup>、  
 武<sup>州</sup>川<sup>越</sup>の城<sup>主</sup>十<sup>五</sup>萬<sup>石、</sup>堀<sup>田</sup>加<sup>賀</sup>守<sup>紀</sup>正<sup>盛、</sup>御<sup>老</sup>中<sup>、</sup>下<sup>總</sup>國<sup>、</sup>  
 古<sup>河</sup>の城<sup>主</sup>八<sup>萬</sup>石<sup>、</sup>土<sup>井</sup>大<sup>炊</sup>頭<sup>利</sup>勝<sup>、</sup>大<sup>番</sup>頭<sup>四</sup>千<sup>石、</sup>安<sup>藤</sup>伊<sup>豫</sup>、  
 守<sup>大</sup>目<sup>附</sup>千<sup>二</sup>百<sup>石、</sup>太<sup>田</sup>信<sup>濃</sup>守<sup>、</sup>其<sup>外</sup>の諸<sup>太</sup>名<sup>に</sup>は、遠<sup>州</sup>、  
 掛<sup>川</sup>の城<sup>主</sup>五<sup>萬</sup>八<sup>千</sup>石<sup>、</sup>淺<sup>倉</sup>筑<sup>前</sup>守<sup>、</sup>濃<sup>州</sup>大<sup>垣</sup>の城<sup>主</sup>十<sup>萬</sup>石<sup>、</sup>  
 戸<sup>田</sup>采<sup>女</sup>正<sup>和</sup>州<sup>高</sup>取<sup>の</sup>城<sup>主</sup>二<sup>萬</sup>五<sup>千</sup>石<sup>、</sup>植<sup>村</sup>駿<sup>河</sup>守<sup>、</sup>引<sup>き</sup>續<sup>、</sup>  
 いてお鐵<sup>砲</sup>組<sup>お</sup>弓<sup>組、</sup>其<sup>後</sup>に金<sup>銀</sup>の金<sup>物</sup>を打<sup>ち</sup>し網<sup>代</sup>のお乗<sup>、</sup>  
 り物<sup>の</sup>中<sup>に</sup>在<sup>ら</sup>せら<sup>れ</sup>る<sup>は、</sup>三<sup>代</sup>將<sup>軍</sup>家<sup>光</sup>公<sup>、</sup>お乗<sup>り</sup>物<sup>の</sup>左<sup>右</sup>、  
 には、大<sup>久</sup>保<sup>彦</sup>左<sup>衛</sup>門<sup>、</sup>水<sup>野</sup>十<sup>郎</sup>左<sup>衛</sup>門<sup>、</sup>近<sup>藏</sup>登<sup>之</sup>助<sup>、</sup>安<sup>部</sup>四<sup>郎</sup>、  
 郎<sup>五</sup>郎<sup>、</sup>金<sup>松</sup>又<sup>四</sup>郎<sup>、</sup>小<sup>栗</sup>又<sup>市、</sup>其<sup>又</sup>後<sup>に</sup>隨<sup>從</sup>ふ諸<sup>太</sup>名<sup>は、</sup>筑<sup>後</sup>、  
 後<sup>久</sup>留<sup>米</sup>の城<sup>主</sup>二<sup>十</sup>一<sup>萬</sup>石<sup>、</sup>有<sup>馬</sup>玄<sup>蕃</sup>頭<sup>、</sup>豊<sup>前</sup>小<sup>倉</sup>の城<sup>主</sup>十<sup>五</sup>、  
 萬<sup>石、</sup>小<sup>笠</sup>原<sup>右</sup>近<sup>大</sup>夫<sup>、</sup>後<sup>押</sup>へと<sup>し</sup>て近<sup>江</sup>國<sup>彦</sup>根<sup>の</sup>城<sup>主</sup>三<sup>十</sup>五<sup>、</sup>  
 萬<sup>石、</sup>井<sup>伊</sup>掃<sup>部</sup>頭<sup>、</sup>其<sup>外</sup>馬<sup>合</sup>羽<sup>お</sup>茶<sup>辨</sup>當<sup>に</sup>到<sup>る</sup>ま<sup>で</sup>善<sup>美</sup>を  
 儘<sup>さ</sup>れ<sup>た</sup>る<sup>は、</sup>こ<sup>れ</sup>を<sup>征</sup>夷<sup>大</sup>將<sup>軍</sup>の御<sup>社</sup>參<sup>と</sup>こ<sup>を</sup>思<sup>は</sup>れ<sup>た</sup>り、

借<sup>て</sup>御<sup>當</sup>日<sup>は</sup>武<sup>州</sup>岩<sup>槻</sup>の<sup>お</sup>泊<sup>り、</sup>翌<sup>日</sup>は野<sup>州</sup>宇<sup>都</sup>宮<sup>へ</sup>御<sup>着</sup>と<sup>お</sup>、  
 出<sup>迎</sup>を申<sup>し</sup>上<sup>げ</sup>る<sup>、</sup>其<sup>夜</sup>は宇<sup>都</sup>宮<sup>の</sup>お泊<sup>り、</sup>翌<sup>朝</sup>御<sup>出</sup>立<sup>日</sup>光<sup>へ</sup>  
 十二<sup>里</sup>の<sup>里</sup>程<sup>で</sup>ござ<sup>い</sup>ます<sup>、</sup>恙<sup>あ</sup>く<sup>日</sup>光<sup>山</sup>へ御<sup>到</sup>着<sup>、</sup>其<sup>夜</sup>は日<sup>光</sup>  
 光<sup>に</sup>てお泊<sup>り、</sup>翌<sup>日</sup>東<sup>照</sup>權<sup>現</sup>の御<sup>靈</sup>舎<sup>へ</sup>御<sup>參</sup>拜<sup>を</sup>濟<sup>せ</sup>ら<sup>れ</sup>て、  
 日<sup>光</sup>を御<sup>下</sup>山<sup>今</sup>じも<sup>丁</sup>度<sup>宇</sup>都<sup>宮</sup>へ二<sup>里</sup>手<sup>前</sup>ま<sup>で</sup>お歸<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>る、  
 すると今<sup>迄</sup>快<sup>々</sup>晴<sup>々</sup>たる<sup>好</sup>天<sup>氣</sup>でござ<sup>い</sup>ました<sup>の</sup>が、不<sup>思</sup>議<sup>や</sup>  
 一<sup>天</sup>掻<sup>き</sup>雲<sup>り</sup>暗<sup>夜</sup>の如<sup>く</sup>真<sup>暗</sup>と<sup>あ</sup>り、ゴ<sup>ウ</sup>ト<sup>、</sup>吹<sup>き</sup>出<sup>す</sup>大<sup>風</sup>大<sup>、</sup>  
 雷<sup>實</sup>にも物<sup>凄</sup>じ<sup>き</sup>有<sup>様</sup>あり、さ<sup>ら</sup>ば此<sup>時</sup>御<sup>供</sup>の諸<sup>太</sup>名<sup>お</sup>旗<sup>下</sup>、  
 の銘<sup>々</sup>は、上<sup>を</sup>下<sup>へ</sup>と周<sup>章</sup>狼<sup>狽</sup>、折<sup>り</sup>か<sup>ら</sup>又<sup>も</sup>烈<sup>げ</sup>し<sup>き</sup>震<sup>動</sup>雷<sup>、</sup>  
 電<sup>、</sup>カ<sup>リ</sup>、上<sup>を</sup>下<sup>へ</sup>と周<sup>章</sup>狼<sup>狽</sup>、折<sup>り</sup>か<sup>ら</sup>又<sup>も</sup>烈<sup>げ</sup>し<sup>き</sup>震<sup>動</sup>雷<sup>、</sup>  
 に黒<sup>雲</sup>が舞<sup>下</sup>り將<sup>軍</sup>家<sup>の</sup>乗<sup>つ</sup>てござ<sup>る</sup>お乗<sup>り</sup>物<sup>を</sup>包<sup>む</sup>んだ<sup>か</sup>と  
 思<sup>ふ</sup>と、お乗<sup>り</sup>物<sup>が</sup>上<sup>へ</sup>舞<sup>上</sup>る、中<sup>に</sup>も大<sup>久</sup>保<sup>彦</sup>左<sup>衛</sup>門<sup>は</sup>少<sup>し</sup>も騒<sup>、</sup>  
 ばた<sup>り</sup>に打<sup>ち</sup>驚<sup>いて</sup>ござ<sup>る、</sup>中<sup>に</sup>も大<sup>久</sup>保<sup>彦</sup>左<sup>衛</sup>門<sup>は</sup>少<sup>し</sup>も騒<sup>、</sup>

がす、こは一大事と弓矢を携さへ大空を礎ッたて見ればこは如  
 何に、黒雲の中に怪しの官女が光り々々、姿を現はして居るから  
 して彦左「アア」銃砲弓組の銘々、彼れかる怪しき官女を打て  
 やく」と下知をする、心得たりとお銃砲組、お弓組の銘々は  
 雨霰の如く砲發をする、忽ち官女の姿が消ると早や年を経たる白  
 狐と變じる、此時大久保彦左衛門は、己れ憎くき惡狐イデヤ退  
 治て呉れんと、重藤の弓に鷲の羽の矢を番ひキリ、と引絞し、  
 彦左「惡魔退散怨敵退散」と言ふより早やくヒヨフツと切つて  
 放す、すると空中にコンコンと狐の泣聲がしたかと思ふ、折  
 りしもお乗り物がドサリツと落る、早や其中に大空は俄に晴れ  
 て以前の晴天とある、そこで大久保彦左衛門は彦左ソレ、上様  
 を早やく宇都宮城へ御供をいたせ」ハ、ツと應答へてお徒士衆  
 は、お乗り物を擔ぎ宇都宮城へドント急ぐ、其後より諸大名  
 方も御供をする、此時宇都宮城には、將軍家のお歸りをお待受

として、國家老奥平圖書、生田龜之助、御用人尾崎才兵衛、松  
 井孫兵衛、大島治郎左衛門、何つれも大手までお出迎ひ、お玄關  
 敷臺には、松平下總守を初め御附の銘々控へて居る、されは將  
 軍家には御城中へお通りとあり、大久保彦左衛門を召されて、  
 家光如何に爺よ、今日途中においての變動と言ひ、殊に予を腦  
 さんとする憎くき惡狐早く退治いたせ彦左ハ、御有理の御上  
 意には候得ども、今般は日光御社參御歸路の事故、一先江戸城  
 へ還御の上御評定有つて然るびよう存じまする家光アム、然  
 らば左様いたす」と其夜は宇都宮城にてお泊り、翌朝御發駕御  
 道中嚴重に守護仕奉つり、目出度御歸城とある、然るに將軍家  
 の御評定を仰せ出だされる、正御上段御簾の中においては惡狐退治  
 軍家光公着座、御簾の前には、御大老御老中若年寄寺社奉行、  
 御家門御譜代お旗下、其外御指南番柳生但馬守、同飛騨守、小

野治良右衛門何づれも奇羅星の如くに列座をあし、これより皆  
 思ひく、に發言をいたし、一口も早やく惡狐退治せねばからん  
 と言ひ出すも有り、又は通力を得たる白狐あれば、一應一夕で  
 は退治られんと言ふも有り、或は此惡狐を先に退治して後は毒  
 婦玉の井を誅伐するやと、評定區々として一決いたしません、  
 するに御老中松平伊豆守信綱は信綱如何に御一同、此惡狐を此  
 儘等閑に捨置時は、將軍家の御武徳に係はるよつて一日も早や  
 く退治ねばありますまい、就ては此惡狐が何處に棲や否やを確  
 めねばありません、此義如何でござる」と申し出でられるに、  
 一座の人々誰有つて發言する者がございませぬ、此時大久保彦  
 左衛門は彦左拙者愚意一ト通り申し上げん、此惡狐は里には居  
 りませぬ、かからず幽谷深山に棲いをして居るに相違ございま  
 せん、故に諸大名方の御領城山々谷々を綿密に狐狩を催された  
 ら、自然と惡狐の居棲居が知れるで有らうと存じまするが、此

義如何でござる信綱、實に大久保御老体の言はれる處至極  
 御有理あり、然らばこれに一決せん」と申出でられる、此時副  
 將軍水戸光國卿は光國アイヤ伊豆暫らく待てッ、成程彦左衛門  
 の申す處有理然るべき事では有るが、然しあがら今突如と諸大  
 名に沙汰いたし、狐狩を申し附ける時は其國々の騒ぎとある、  
 尙此處に乗じて事を起さんとする者があきにしもあらず、よつ  
 て先惡狐の棲居を確め然して惡狐退治を申し附けよ信綱ハ、  
 シテ其惡狐の棲居を確め、如何いたされまするや光國、  
 されば斯様お時には、天文方山地民部を召出し、彼に方角を判  
 断させん、ソレ急ぎ山地民部に登城を申し附けよ」と御使者番  
 へ御沙汰とある、ハ、ツと應答して御使者番は天下馬先より馬に  
 打跨り、小石川安藤阪の山地民部の邸に來り、斯くと告げる、  
 山地民部は委細長まつたと御請けの返答に及び、御使者番を歸  
 して置いて、直ちに衣紋を改め紅葉山千代田城へ登城をして、

大廣間遙か此方に、低須平身をして扣へて居る、此時副將軍水戸光國卿は光國山地民部出たか、苦しうあい近ふ……民部ハ、ツと席を進む……光國其方を至急呼び出だせしは餘の義にあらず、これ迄屢々天下を騒さんとあしたる、毒婦玉の井亦是悪狐退治の義に就き、只今尋ぬる事あり速に應答をいたせ民部ハ、不肖の某しへ如何ある御尋ねかは存じませぬど、身に心得て居ります事は御應答を仕つる光國昨年其方と玉の井の兩人に天文易道の問答を申し付けたる處、悪狐の所爲にて其方勝事能はずして不覺を取つたり、然るに其後彼玉の井の悪事露現に及び、西の丸を透れ其儘往未知れず相成り居りし處、今般上様日光御社參の御歸路、云云斯様うくにして、又々上様を惱まし奉らんとする、之れによつて今日の評定には、毒婦玉の井の所在を捜し誅するよりは、先に白狐を退治せんとの、就いては悪狐を退治するには何の方面の山に棲や、其方此處に有つて

判断せよ民部ハ、却々通力自在を得たる白狐あれば、一應一夕にては退治する事思ひき寄りませぬ、何卒暫時御免しを蒙りまする」と其座を起つて御椽側に出で、暫らく大空を打眺めて居ましたが、聽ての事にそれへ算木筵竹を取り出し、何事か考へて居りましたが、稍あつて以前の座に着き民部ハ、申し上げ奉つる、これは逆も此近邊の山には居りませぬ、かゝらず幽谷深山に棲で居るに相違ございませぬ光國「フム、予も然う考へて居ると思ふが、併しそれでは其國々の驛とある、よつて先白狐の棲む方角を的然して其方面の山々を狩立を申し付けようと思ふ、サア東西南北何の方面に棲や判断をせよ民部ハ、先某しの恩案には、東國の高山に棲で居ると判断を仕つります光國「フム然うか、然らばこれに一決せん、ソレ松平伊豆守此由東國大名へ沙汰いたせ伊豆ハ、畏まり奉つる」とこれより東國大名へ

御沙汰とあり、其領分の山々を狩立、退治たる狐を殘らず江戸  
表へ差送れよと仰せ付けられる、サアこれからが、いよく東  
國大名が領分の山々谷々を狩立、狐狩を始めるといふ一段次席  
に詳細しう申し上げる事にいたします……。

第 六 回

借て往古は狐狸の類ひや、或は怪猫が祟りをあして、御家を騒  
がしたる例は少からず、毎々辯じます豫州松山の狸問答、肥  
前佐賀の夜櫻、筑後馬騷動はこれ皆狐狸怪猫の祟りでござい  
ませう、當開明の今日は人の智識が進歩して、狐狸に誑される  
の亦是は崇れるあぞといふ事は、けつしてあいと申しまするが、  
併しさう一涯には申されませんが、其は何故かと言ひまするに、

茲に京都市下京區六條の兩本願寺でございます、西本願寺は往  
古から今に一度も焼失事は有りませんが、東本願寺はこれ迄に  
二三度も焼失して居ります漸々前年本堂は立派に建上りました  
が、山門丈けは今に何うしても建上りません、山門が出来  
と本普請でいさうでございます、山門が出来上つたら東本願  
寺を焼て了ふと言ふのは、これ即ち狐の祟りでございます、何  
故東本願寺に狐が祟りをするかと申しまするは、何つの頃か知  
りませんが餘程前年の事、東本願寺の境内に經藏か阿彌陀堂を  
建ると就き、地内に稻荷の祠が有りまして、其中に七頭の狐の子が居  
ると知らずして、其儘土中に埋めて了いました、然るに其後  
親狐が其時の御門跡様の夢枕に立ちて、云々斯様くでござい  
ます、何うか祠を建て祀つて下されと頼みました、それを何狐  
如きがと其儘に御捨置きに於る、そこで此狐の祟りで子七頭殺

されたから、七度焼といふ事でございませぬ、茲五六十年の間に  
 東本願寺が三度焼て居ります、餘程前年の事でございませぬが  
 下京區雪駄屋町より出火いたしました時、火元より東本願寺ま  
 で二三丁間がございませぬ、ソレ火事よと言ふ間に見る、  
 内に東本願寺が一面の火炎とある、實に彼の時の火事は不思議  
 と言はなければなりません、既に昨年も東本願寺の境内に有る  
 作事小家に、山門を建てるに就き大さな規や檜、最早大方木組  
 が出来上りしに、一夜の間に黒焦に焼て了いたしました、これ皆狐  
 の祟りでございませぬ、然し亦或人の説には狐の祟りばかりでは  
 ない、神罰で有ると申されませぬ、其は亦何故かと言ふに京都六  
 條の地内は、伏見の稻荷神社の氏地にして、毎年御祭禮の時  
 西本願寺は、地内に住居して居る者を御祭り燈を出さして御  
 祭りをさせます然うして渡御の時、西本願寺の裏手大宮通り  
 を五社の御輿が通ります、其際薦樽三挺持出して、御輿擔の人

に飲します、然るに東本願寺は地内の者にお祭りをさせませぬ  
 さうにございませぬ、よつて狐の祟りと稻荷神社の御罰で有らう  
 といふ方がございませぬ、然し何ちらにいたしました處が不思議と言は  
 れればありません、それに就いて今度東本願寺には、狐の祠  
 を御建てにございませぬ、狐の祟り、狐の祠  
 に聞きました儘を茲に御話しをいたします、されば此事は、彼の地の人  
 きまして、今般三代將軍家光公より狐退治を仰せ付けられまし  
 たる處より、御係り御老中松平伊豆守殿は、東國大名へ此由を  
 御沙汰とある、之れによつて東國の諸大名は、其領分の山々谷  
 々を狩立退治たる狐をおる、江戶表へ送ッて來る、其狐を千  
 住骨ヶ原にて一々改めるのでございませぬ、そこで町奉行坪内左  
 京之進が下役一人を引伴れ、千住骨ヶ原へ出張して一々狐を御受  
 取にあり、傍へ積並べて有る、處へ檢分御改めの御役として  
 大久保彦左衛門忠教、家來の伊東治郎助、笹尾喜内其他中間を

隨へ歩ッて参り彦左「アこれは坪内左京殿には御苦勞で有る、  
 左京ハ、大久保御老体にも御役目御苦勞に存じます彦左左京  
 殿、何んと夥しい狐でござるが、一頭は年古びたる白狐を退治  
 に、これだけ退治たとして見れば、他の狐こそ飛んだ災難で  
 ざる、ア、此香は何うも臭氣ッて堪らねわ、何うか貴殿拙者に  
 代つて御改め下され左京「イヤこれは眞平御免を蒙る、御老体が  
 御改めの御役目でござる」そこで大久保彦左衛門は、嫌々あが  
 ら老眼に眼鏡を掛け彦左「コリヤ治郎助喜内、これある狐を一々  
 改め……」兩人ハ、ツ、御前様此香は臭氣ッて鼻もちが出来ませ  
 ん彦左「イヤ予は對軍家の臺命によつて改めるお役を蒙つたのち  
 や、汝等は予が命命だ主命だ、それに何んぞや鼻もちが出来ん  
 とは何んだ、白痴者奴……」ア、實に此香は堪らぬ兩人「ソレ  
 御覽遊ばせ、御前様でも其通りでございませう彦左「イヤ、苦圖  
 言はんと速く改めよ」と家來を叱り付けあがら狐の死体を

一々改めまするに、年古びたる白狐らしきものは一向見當りま  
 せん、然るに御話し轉つて茲に下野國宇都宮城主御高十八万石  
 松平下總守忠弘公は、今般江戸表御老中松平伊豆守殿より、領  
 分庚申山を山狩を催し狐退治をせよとの御沙汰とある、そこで  
 下總守忠弘公は、一家中の者に申し付けられ、近々庚申山を狩  
 立んと専ら其準備をして居られる、處が茲に庚申山の奥ある猿  
 渉りの岩崖に隠れて居る、毒婦玉の井の一味の者が此事を聞い  
 て、急ぎ岩崖に立歸ッて参り ○「エ、尼御前様へ御注進申し  
 上げます」すると玉の井は玉の「オ、慌たしく何事の有るか  
 ○「今般將軍家の台命によつて東國大名へ狐狩を仰せ付けられ  
 たるに就き、領主松平下總守が近々當庚申山を狩立んと、其準  
 備をいたして居ります玉の「左様で有るか、然し妾が此山案に隠  
 れ居る事を知つて来るか、知らずと来るかは別らねども、何は  
 しかり油断はあらん」と玉の井は大きに心を痛め、イデ此上は



出で四郎ハ、只今の仰せ吾々一同の意見も何も入る譯はござ  
いませぬ、將軍家の御心を憐れしたる惡狐あれば、片時も速く庚  
申山に参り其惡狐の棲所を捜し出し、退治するこそこれ將軍家  
への忠義あれば、速く御狩倉を御催し遊ばせ」とお勸め申し上  
げる、此時同役の邊見主税が主税「アイヤ生田氏お控へあされ、  
其許主君に狩倉の義をお勸めあさるが、却々通力を得たる白狐  
あれば、さう易々には退治されませぬ、倘仕損じる時は却て御  
當家の御耻辱にも相成りますれば、此義は先づ御見合せあさる  
が宜しからうと存じまする生田、これは邊見殿には柔弱臆病とや  
言はん、將軍家の御武徳殊に主君の御勢力をもつてするに、何  
んぞ退治られん事がござるか、其許は御老体にて勇氣がござら  
んから、左様うお事を言はれるので有らう邊見、ア黙り召され  
年こそ密つたる某しかれど、幼年の頃より戰場万場を往來あし  
鍛上げたる身体で有る、それに何んぞや老体にて勇氣があいと

殺生石を祈らんと、惣身に水を掛り一心不亂に那須野ヶ原の殺  
生石を祈つて居ると、俄かに夜嵐が颯と吹込む折りしも不思議や  
彼方此方に光る數多の狐火、其中より光々白狐が姿を現はれ、  
空中へ飛び去り人魂のよう光り物が、宇都宮の方へ走る、此  
様子眺め玉の井は玉の「借てこそ吾に力を添給ふか、アラ有  
難や忝けあや」と大きに打喜悦で居る、それに引換宇都宮城中  
に有つては、松平下總守忠弘公は庚申山狐狩の御評定と有つて  
老臣生田四郎左衛門、邊見主税、平野勘右衛門を初め其他一家  
中の若侍士を御集めに相成、忠弘如何に一家中の者共、今日斯く  
呼び集めしは餘の義にあらず、今般江戸表御老中御月番、松平  
伊豆守殿より云々斯様く、この御沙汰、これ恐れ多くも將軍家  
の台命あり、よつて予は近々庚申山を狩立狐狩をいたさうと存  
する、然し亦其方共の意見も有らうから、思ひ／＼に腹藏あく  
申し述べよ」と仰せ聞けられる、すると生田四郎左衛門が進み

は何んたる一言「生田」それは血氣壯年の者に御氣象はお劣はあさ  
 るまい、然し年を取れば氣力が薄くあつて、事のお役には相立  
 ち申さん邊見「ヤア、老年にて事の役に立たんとは、某しを侮  
 りし不禮の一言、サア今一言申して見よ、其場は立たさん「生田」  
 高の知れたる畜生如きに恐れ、狐狩を見合せとはこれ柔弱臆病  
 で有らう、サア勇氣が衰弱たと申せしは拙者の誤りで有るか」  
 と互に争論既に双方立上らんとする忠弘「ヤア兩人控へ居れッ、  
 今般仰せ付けられた、狐狩は私事にあらず、將軍家の御心を憐  
 まさんとする惡狐あれば、予に退治せよと台命が下つたので有  
 る、コリヤ兩人の者よく聞け、生田は狐狩を催し白狐退治をし  
 て、予の名譽を輝かさんとするは忠あり、亦邊見は若仕損じる  
 時は主家の耻辱で有るからして、一時見合せと申すも忠あり、  
 よつて今日の評定はこれ迄にして、亦改めて明日の評定に事を  
 決する、先づ今日は下れッ……兩人「ハ、ッ」と生田四郎左衛門

は御前を立つて下城をする、邊見主税は其夜、宿直の御泊り番  
 でございませすから御城に止まる、偖ても御殿忠弘公は其夜御  
 所にお遁入りとあつて御睡眠あさる、すると丁度夜半の頃御枕  
 元へ十七八歳の官女が姿を現はす、すると忠弘公は夢現ともあ  
 く忠弘「コレよ、其方は何國の何者で有るか官女「ハ、妾今宵こ  
 れへ参りしは、餘の義にあらず、今般忠弘公には、將軍家の台  
 命によつて狩倉をあさると由、抑も庚申山には猿田彦の神が祀  
 奉つりし靈山あり、よつて當山を荒されては如何ある神のお崇  
 りが有るやも斗り難く、故に山狩の義は思ひ止まられるよう、  
 此義をお告げ申さん爲推参いたしたり」と言ふかと思へば忽ち  
 官女の姿は消へて夢は覺たり、此時忠弘公には忠弘「ハテ不思儀  
 か夢を見た哩、コレよ邊見は居らんか、邊見々々」とお呼あさ  
 るから、お次に控へし邊見主税は、熱湯の汗を流し給ひ、餘程お苦  
 來り見れば、御主君忠弘公には熱湯の汗を流し給ひ、餘程お苦

しい様子にございます邊見ハ、主君様には御不快にございます  
るか、御病氣あれば早速醫師を招きませう忠弘イヤ病氣で  
はない、只今云々斯様う、夢とは申しながら庚申山は猿田彦  
の神をお祀申せし、神地靈山あれば誠に恐れ有る……邊見ハ、  
某しも只今其通りの夢を見ました、夢と夢を合して見れば同じ  
夢でございます、さすれば何うしても此狩倉の義はお宜しうご  
さいませぬ、猿田彦の神は荒神の事あれば如何なる祟り有る  
やも知れませぬ故に、何卒御狩倉の義はお見合せ遊ばせ忠秀フ  
ム、恐るべき時は恐れねば相成らん、然らば狩倉の義は暫時延  
引をするぞ邊見ハ、彼是する中に速夜も明け離れましたる故  
邊見主税は、お暇を告げ、今既に御前を下らんとする、折から  
生田四郎左衛門が早天の登城に及び、御主君の御前に出で當日  
の御挨拶を申し上げ、然して邊見主税と互に挨拶が終る、する  
と四郎左衛門は生田ハ、主君様へ伺ひ奉つる、今般仰せ出ださ

れし御狩倉の日は、何日とお定めに相成りました邊見アイヤ生  
田氏、其儀は拙者より申し上げる、昨夜斯様う、云云全く神  
のお告げあれば、これを叛て尙神のお崇りが有る時は、御家の  
一大事ありよつて狩倉の義は先づお見合せと相成りましてござ  
る、生田夢を御覽有つて狩倉お見合せとは怪かりませぬ、夢は五  
臓の疲勞あれば信するに足らん邊見イヤ、然うてはござらん  
夢にも種々見ようが有つて、虚夢、思夢、欲夢、靈夢と申すが  
昨夜主君が御覽遊ばしたる夢は、正しく神のお告げの靈夢でこ  
ざる、故に恐るべき時は恐れねば如何なる祟り有るやも斗り  
難く生田アア、何を馬鹿か事を言はれるや、如何にも仰せの  
如く庚申山は、猿田彦の神を祀し靈山あれば、これは敬神恐れ  
ねば相成り申さんが、然しあが將軍家の台命を背きあば、そ  
れこそ如何なる御咎めの來るやも料り難く、さすれば御家の一  
大事でござる邊見イヤ其儀は御公儀へ御断りを申し上げれば、

事は相濟む……生田「フム、左様う言はれるからば宜しい、ア、主君にも日頃の御勇氣が衰弱、俄に御柔弱、臆病にお成り遊ばしたか、ア、ハ……ッ」と大口開いて打ち笑ふ。忠秀「ヤ、黙れッ。四郎左衛門、主の言葉を背くは不禮で有らう、神へ恐れが有る故に延引と申したの有る、然るに其方予に對して柔弱、臆病とは不届至極、目通り叶はん立てッ……生田「ハ、恐れ入り奉つります、就きましては某し一ツの御願ひがございます。忠秀「改めて願ひと申すは、何事の有るや。生田「神の祟りを恐れ給ひ、狩倉御延引は是非もあい次第、併し此儘にては如何にも残念の至り、よつて何うか某し一人に仰せ付けられますよう願ひ奉つる、倘仕損じまする時は某しの恥辱にして、敢て主君の御恥辱にも相成りますまい、さすれば將軍家へ御申し譯も相立ませう。忠弘「フム、其願ひも有理で有るが、然し庚申山には目差白狐が居るとも居あいとも判然せん、無暗に山を狩立、倘神の祟りを受けては

宜しく有まひ、よつて此儀は思ひ止まれ、勇氣に誇つて狩倉をすると申すは、物に恐れんと言ふものぢや。生田「ハ、主君のお言葉を背くに似りと雖ども、忠義の爲にするに何んぞ神の祟りがございませうや。忠弘「左程までに申すから其方一人に申し付けする」と大言を吐て御前を下り吾郎へと立歸ッて參り。生田「サア家來共、いよ、明早天庚申山へ登山をして、山々谷々を狩立るから、其方共も充分の働きをいたせ。家來「ハ、畏まりました。ございます」。借て其日の中に準備を整ひ、翌六ツ時より生田四郎左衛門は、馬に打ち跨り自分の家來と足輕百五十人を従ひ、宇都宮を出立に及び庚申山へ登ッて来る。山半腹に猿田彦の祠が有る、生田四郎左衛門は、祠の前にて馬より飛下り、先猿田彦の神に敬禮をあし、再び馬に打ち跨りそれより次第、一際へ入り込んで來ると、樹木叢々と生へ茂りたる森の中に、一際

目立ばかりの楠の大木有り、これを眺めた生田四郎左衛門は、生田「ヤア、勢子の者共、ッレ此中を狩立よ進め」と下知をする、心得たりと一同に割竹を携へ、ワア、ッ、と関を上げ、樹木の中を狩立てんとする、時こそ有れや俄にゴウ、ッ、と展動して山鳴りがするから、数多の勢子は、大きに恐れ慄上り一人として進むものがございませぬ、生田四郎左衛門は、馬上に有つて此体を打眺め生田「ヤア、汝等は何を恐れをあすや、將軍家の台命で有るぞ……」勢子「へエ、綱の目でも鯨の目でも敵ひません……」生田「ヤア言ひ甲斐なき奴原で有る、進め」と下知をする、数多の勢子は、割竹を叩き慄ひながら進まんとする、折りしも空一面真暗とあり今迄白晝で有つたのが、俄に暗夜の如くとある勢子「ッ、ッ、ッ、」出たぞ神の祟りぢや白狐の祟り」と恐れ慄きワア、言つて居ると、黒雲が八方へ散亂する、すると暴風が吹起り頭上より火の玉が降つて來るからして、いよ、

勢子は、大きに恐れ慄々、それへ打ち倒れる、此体を眺めたる生田四郎左衛門は生田「フム、」借てこそ悪狐の仕業と見へたり、何んぞ畜生如きに恐れる事が有るか、進め、ッ、と尙も烈しく下知をする、此言葉に烈まされ亦もやワア、ッ、と関を上げ、進まんとする、其中に伴の火の玉は、穴の中にバア、ッ、と這入る生田「ヤア彼の、」そこを自狐の棲穴と見へたり、ッ、レ鐵砲組の者共、速く打ち込め……」そこで鐵砲組の者は、筒先を揃へて穴の中へボン、ッ……、ッ、と打ち込む、彈丸が跡戻りをして却ッ、て鐵砲組の者の額に的る、亦弓組に下知をする、弓組の者は、弓に矢を番ひ穴の中へ矢を切つて放す、周章狼狽をする、此時生田四郎左衛門は生田「己れ悪く、」白狐め、イデや此上は吾強弓の弓勢を見せ、呉れん」と重藤の弓に鴻の霜降り矢を打番ひ、ヒ、フツと穴の中へ切つて放すと、其又矢が跡戻りして四郎左衛

門が乗ッたる馬面に的なる、馬は驚きヒーンツと跳上る途端に、四郎左衛門は、挫とそれへ落馬をしてウーンツと氣絶をする、家來の矢阪辰藏は、主人を抱き起し辰藏御主人様、お氣を確にお持ちあされ……生田ウーン……辰藏お氣が附きましたか生田オ、辰藏か殘念で有る、サア今一度彼の穴の中を狩立てよ、辰藏仰せ御有理にごさいまするが、最早日も西山に傾きますれば、今日は先づ御引上げあされ生田フム、然らば左様ういたさう」と揚げ貝を吹き同勢を引伴れ、宇都宮城へ引揚げて來るサアこれからが尙々惡狐が祟りをするとはいふ御物語り、次席に辨じます……。

第七 席

借ても生田四郎左衛門は、惡狐の爲に思はぬ不覺を取り空しく吾郎く立歸ッて參り、奥の一室に通り酒肴を取り寄せ、腹臣の家來矢阪辰藏を對手に酒盛りをしあがら生田ア、吾主君のお止め有りしを聞ずして、強て山狩をいたせし故、神の御祟りを蒙りしか、思へば實に恐ろしや」と益を持た儘只茫然として居る辰藏御主人様、貴方は餘程お疲勞の御容子、お速くお臥め遊ばせ生田フム、其方も長家へ下ッて休息せよ」と其儘所に這入ッて眠りにつく、矢阪辰藏は、何うも主人の容子が變だと思ひし故、長家へも下らす次の間に有つてジツと容子を窺つて居ると、俄にウーンと苦む聲が聞へましたるから、寢所に來り辰藏御主人様々々と捲起す、すると四郎左衛門は、ハアツと兩眼を見開きましたたが、サモ物凄ぎ眼色をして生田ヤア吾今般山狩をいたせしが、忠臣天も感應まし、たか山神の祟もあい然るに汝畜生の分際として、吾を惱さんとするは不届至極、ア

レ向ふより妖怪が来た、ソレ彼處へも来た」と多數の理を  
 彼方此方へ狂ひ廻るを、御家來衆は家來御主人様、お心をお鎮  
 めあされ「と三四人の者が止めに掛るを生田エ、何をするか」  
 と左右へ掻きと突飛し蹴飛ばして置て、其儘其處に打倒れ前後も知  
 らず寝臥て了ふ、此容子を見たる矢辰藏は、これは白狐の所  
 業で有るか、亦是山神の祟りで有るや何にもせよア、身の毛も  
 よだつ有様で有ると、大きに恐れをかし其儘自分の長家へ下つ  
 て來る、氣分が悪いと雨戸障子を開き、下婢に命じて酒肴を關  
 へさせ、酒を吞みながら辰藏「コレさんや、何故奥は参らんか下婢、  
 ハイ、奥様はお坊様が虫氣でお悪うございますので、御介抱を  
 して居られます、旦那様がお下りにあつたら、其由を申して呉  
 れと仰在れました辰藏「フム然うか」と言ひながらフト庭前の方  
 を見ると、又一人現はれ二人現はれして、彼是二十人ばかりも現は

れて、一同にゲラゲラ笑ひ出す辰藏「フム、一体此數多の小坊  
 主奴は何處より來せたか」と侍に有つたる一刀を引付け、シッ  
 と眼を据て眺めて居ると、今度は大坊主が現はれ踊り出す辰藏  
 己れッ悪くき大坊主奴、覺悟いたせ」と一刀の鞘を拂ひやア  
 ッとばかりに片足を切り落す、すると今迄踊つて居たる大坊主  
 の姿は消えてあくある、亦小坊主の姿も消了了ふ、此有様を眺め  
 た矢辰藏は辰藏「ア、神の祟りと思ひしは吾心の迷ひで有りし  
 か、倍てこそ白狐の仕業に相違有まひ」と言つて居る、折りし  
 も一問の方にキアツと、一聲叫ぶ聲が聞へました、處へ下婢の  
 さんが慌しく下婢旦那様、大變でございます、何うがお速くお  
 出で下され」何事やらんと矢辰藏は、血刀引提げ次の間へ馳  
 け込んで参り辰藏「奥や、何うしたか奥ハイ、坊が出氣で悪う  
 ございますから、介抱をいたして居ります處へ、何者とも知れ  
 す只今これへ出て参り、坊の足を切落し其儘何處ともかく逃げ

失せましてございます辰蔵「エ……ッ」と驚いて居る處へ、生田の若黨三平といふ者が走ッて参り三平「何うか矢阪様、お早くお出で下され辰蔵「オ、三平か、何事で有る三平」御主人様が亦々屋敷の中をお狂ひ出しにありました辰蔵「フム、吾子の事も捨置れんが、然し主人の大事も捨置れじ」と急ぎ長家を飛び出だし、主人の寢所へ来て見ると、四郎左衛門は、一刀を引抜き狂ひ廻ッて居るからして、矢阪辰蔵は、其手を確と押へ辰蔵御主人様矢阪辰蔵でございます、お心を確に……生田「オ、辰蔵か辰蔵お氣が注ぎましたか……生田「フム、吾此様は何うしたのぢや辰蔵」斯様う／＼云云でございます生田「これ皆惡狐の仕業で有つたか畜生如きに心を迷はされるは、武士として此上もあき耻辱有る……辰蔵「實私もお耻かしき事ながら、斯様／＼云云……生田「借ては其方までも……主従共に惡狐の爲に惱まされるとは、ア、情けあき事有る」と大きに歎息して居る處へ、這入ッて来た

のが、生田四郎左衛門の親族にして、知行八百石を頂く、林三左衛門でございます三左「ヤア四郎左衛門殿、承はりますれば御貴殿御病氣の由、シテ御病氣は如何でござる生田「御見舞下されて恐れあいが、然し別に病氣といふ譯ではござらん、實は云々斯様う／＼惡狐の爲に惱まされるとは心害に存じます、殊に御殿を初め一家中の人々へも面目次第もございません三左「フウ、左様か、如何に年古びたる、白狐と云ども、高の知れたる畜生おれば、何條何程の事や有らん、宜し拙者これより準備を申し人数を引伴れ、急ぎ庚申山へ登山を申し、屹度惡狐を退治して御貴殿の御無念を御晴し申す生田「イヤ御深切は忝けあいが、それは迎も難かしい三左「何が難かしい……生田「されば通力を得たる白狐おれば、却々一通りや二通りでは何うして退治られませうか却て其許が祟りを受ける事が出来すから、此義は御止まりあされ三左「イヤ／＼それは御貴殿がお氣が弱ひと言ふものぢや、



狐狸妖怪はかからず弱身に附け込むものでござる、よつて拙者はこれより庚申山へ登り他までも悪狐退治をいたす生田イヤ、それはお悪いからお止しおされ三左何拙者も八百石取の武士かり、物の美事に退治をいたし、御貴殿主従の御無念を晴す、けつして御心配御無用にあらせし、と止るも開す急ぎ吾郎の立間に掛る、中間がお歸りつと觸込む……すると奥方政子殿がそれへ出迎ひ政子オ、旦那様、お歸り遊ばせ……三左衛門は、其儘ズツと奥の一室へ通ると、奥の間にも政子殿が座つて居るを見て三左ヤア、これは何うちや、此方にも政子此處にも政子ハ、ア儲ては最早悪狐奴が吾に祟りをするか、ヤイ吾を誰と思ふや松原下總守の家來御納戸役を勤むる、林三左衛門で有るぞ、汝如きの畜生に救れるや、サア速く正体を現はせ……政子アレ旦那様、此方は何を仰在ます、妾は千石取來島傳五左衛門の娘政子でございませす、コリヤ其處に居る怪しの女、其女は一体何者

で有る政子ヤア駭れつ、妾は八百石取林三左衛門の妻政子あり其方こそ怪しき者で有らう」と互に争論つて居るを、林三左衛門は三左ヤア、妻の政子が二人有らう筈はあし、何ちらか一人が化粧のものに相違有るまい、宜し今に正体を見現はして呉れん、コリヤまつや燈火を持ってッ」すると下婢のお松がまつアレ旦那様、まだ白晝でございませす、と燈火を持ってとは何うした事とございませす三左、黙れッ日も暮れかゝり物の白黒も別らんやうにあつて居るに、白晝とは何んだ白痴者奴、速く燈火を持ってッ」下婢のお松は、呆れ返り漸々其處へ燈火を持來る、すると林三左衛門は、燈火を前に引寄せ、心弱くては相成らんと臍下に英氣を入れ、眼を据て二人の政子をツツと睨んで居ると、一人の政子が俄に身を慄はしたかと思ふと、忽ち年古びたる白狐の姿に變じたり三左己れッ」と言ひ様手速く一刀の鞘を拂ひ、ヤア、ツツとばかりに切り付けるぞ、白狐の姿が消て火の玉と變

じ、三左衛門を目掛けて飛つて来るを、ヤア一ツと聲掛け二ツに斬ると、其亦火の玉が二ツにあつて飛掛る、續いて斬る四ツに、八ツ十六見る、内に數多の火の玉とある、林三左衛門は、何をと言ひ様四方八方へ斬つて、斬り巻りましたが、到々根氣につきて其處へ撞と打倒れ、只茫然として吐息をついで居る、處へ生田四郎左衛門が、飛込み來り生田ヤア三左衛門殿、氣を確に持たれよ、拙者其許の事が氣にある故、心あらずも急いでこれへ參つたり、白晝に燈火とは何事でござる三左衛門、生田氏か……生田林氏、何うあされた三左衛門は、何うも恐るべき惡狐の所意で有る、然し此儘にして止まるから、武士に取つては誠に耻かしき事でござるが、暫時山狩は見合す事にいたす」と話して居る折から次の間より、御家來が家來ハ、申し上げます、只今江戸表より將軍家の御上使として、大久保彦左衛門様がお入りにございます三左衛門、將軍家よりの御上使、

フムー何はしかり御出迎ひ申さねばあらん」と生田四郎左衛門と共に、御出迎ひ申し上げ、然して御上使大久保彦左衛門、附添人笹尾喜内を上席に通して初ハ、こは御上使様にはお役目御苦勞に存じます、シテ御上使の趣きは何等の義にごさいまするや、承はり度……彦左衛門、將軍家の御上意餘の義にあらを、今般上様の台命によつて、庚申山の山狩を申し付けしが、然し庚申山は猿田彦大神を祀し神地靈山あり、其山を荒しては神への不敬、よつて一度仰せ出だされたる山狩あれど、暫時延引申し付けよとの御上意で有るぞ……兩人ハ、御上意の趣き長まり奉つる、早速此趣きを主人忠弘へ申し聞けます間、暫時御扣へを願ふ」と申し置て直に登城をして、云云斯様うくと、言下及ぶ、するど下總守忠弘公は忠弘フム左様か、狐狩延引の御上使とは重疊々々先づ何はとも有れ御上使に來りし、大久保彦左衛門へ充分の馳走をいたせ三左衛門、委細承知仕つりま

した」と邸へ立歸り、種々ある珍味を取揃へ、大久保主従の前  
に持來り三左ハ、御上使様には御遠路の處御苦勞千萬、先何は  
あくとも魚酒一献召食られますよう彦左イヤこれは大層お御馳  
走々々拙者耻を言はねば譯が判らんが、神君御名代將軍家御意  
見番の重き御役を蒙り、食祿三千石を頂くと雖も年中貧乏に  
して、斯様お御馳走おぞを食する事あし、年を寄ると色氣離れ  
て食氣一方で有る、然らば遠慮なく頂くぞ、コリヤ喜内其方も  
頂け……喜内ハ、御招伴をいたします」この時喜内は三左衛  
門に向ひまして喜内私人は斯様うお珍味より、總て油濃き物  
が大のお好物でござる三左シテ、其油濃き物とは……喜内され  
ば天麩羅亦是油揚げの様うお物が、大好物でござるさうして御  
飯も小豆飯がお好でござる三左左様うか、それでは調製て差上  
げませう」と天麩羅に小豆飯を調製て持つて出る、すると大久  
保主従は、遠慮用捨もあく、天麩羅に小豆飯をドシ〜大食を

する、此時林三左衛門に生田四郎左衛門の二人は、互に顔と顔  
を見合し、心の裡に如何に貧乏大久保とは言ひながら、餘りの  
事と呆れ返つて見て居ります、借て御話し轉つて江戸表に有つ  
ては、東國大名より狩取たる狐を江戸表へ差送つて來る中に、  
松平下總守よりはいまだ一頭の狐を送つて参りません、そこで  
御係り町奉行坪内左京は、御老中御月番松平伊豆守信綱公のお  
目通りに出で左京ハ、申し上げます、日々東國の諸大名より狩  
取りし狐を送り來る中に、野州宇都宮の城主松平下總守よりは  
いまだ一頭の狐を送つて参りませんが、此義如何でございませ  
う伊豆フム左様か、それは拾置れん」と直ちに桔梗の間の御殿  
に出仕して、三代將軍家光公へお目通りの上、云云斯様う〜  
と言上にあぶ、すると將軍家光公は家光予が台命をもつて申し  
付けたる山狩を、等閑に拾置くようお忠弘ではあいが、これに  
は何か仔細ぞあらん」と仰せられしを、御傍に聞いて居られし

して漸々野州宇都宮の邊り迄來ると、先觸をもつて只今江戸表より、將軍家の御上使として、柳生飛騨守様、大久保彦左衛門様の御兩名、御入來にございますと、宇都宮城中へ知らして参りました、すると此事を聞いて、松平下總守忠弘は忠弘ハテ不審き事では有る、先刻林三左衛門の邸へ、御上使として大久保彦左衛門殿が参られしに、今亦當城へ柳生飛騨守殿、大久保彦左衛門殿が御上使として参られしは、何とも合点の往かざる事の有る哩、併し先づ何はとも有れお出迎ひをいたさねば相成らん」と御側衆を従ひ御立關まで御出ましにあり、御上使の御入城をお待受けにあつて居る處へ、程あく入來る御上使、柳生飛騨守、副使大久保彦左衛門、此時松平下總守忠弘は、其處に兩手を支へ、忠弘ハ、これは御上使様には、御役目御苦勞千萬に存じます、イザ先づ奥へお通り下されまますよう兩士オ、こは下總守殿には御出迎ひ大義、然らば通ると立關より上る

副將軍水戸中納言光國卿は、光國ハ、上様へ申し上げ奉つる、先づ何はとも有れ一應宇都宮へ御上使を立てられて、其仔細を篤と御訊し遊ばせ家光フム、然らば上使を立てん、ソレ柳生飛騨守を呼べよ」ハ、ツと應答へて御側御用人、久具筑前守より斯くと飛騨守に通じる、聽ての事に柳生飛騨守宗冬は、御召に應じ桔梗の間御殿遙か此方に平伏して居る三代オ、飛騨出たか、其方今般野州宇都宮城へ、云云斯様うくの上使の役を申し付け、宗冬ハ、委細長まり奉つる」と御受けの返答に及ぶ、すると此時御側に控へし大久保彦左衛門は彦左ハ、上様へ申し上げます、柳生飛騨守をもつて、宇都宮へ御上使に立てられますが、何卒斯く申す大久保彦左衛門へ、副使の役を仰せ付けられます、飛騨守宗冬は、御上使の御役を仰せ付けられ、大久保彦左衛門を副使の御役として、御同勢百人ばかりを従ひ、江戸表を出立

下總守忠弘は、御上使を使者の間に御案内を申し上げ、然して  
 お茶お菓子を出し、町重に饗應あし、暫し御免んとお次へ下り、  
 早速老臣來島傳右衛門、生田四郎左衛門、邊見主税、御納戸役  
 林三左衛門を招き、申されけるは、忠弘只今當城へ將軍家御上使  
 として、柳生飛騨守殿、副使として大久保彦左衛門殿の御兩名  
 が來たられしは、何とも合点が參らん、ト申すは既に先刻林三  
 左衛門の邸へ、御上使として參られたので有らう、さすれば大  
 久保彦左衛門が二人有らう筈は、あし、何とも此義不審の至り、  
 其方どもは如何思ふや」と御尋ねにある、すると三家老は、三士  
 何うも合点の參らん事でごさいます、林氏貴殿の邸へ參られし  
 は、全く大久保彦左衛門殿に相違ござらんか三左如何にも相違  
 ございませぬ、其義は生田四郎左衛門殿も御承知の如く、只今  
 にも某し邸にて饗應を申し上げ、御酒宴最中にごさいます、弘忠  
 三左衛門、其方邸に大久保彦左衛門殿は居られるナア三左ハ、

居られます、忠弘フム左様か、それこそ不審晴やらん、先づ何は  
 とも有れ御上使の御口上を承はらん」と一同を従ひ御上使の間  
 に来う、遙か此方に低頭平身をして忠弘ハ、今般當城へ畏れ  
 多くも將軍家よりの御上使として御入來に相成りしは、抑も何  
 等の御事にございますや、御上意の趣き丁總守忠弘、謙慎で  
 承はる、此時上使柳生飛騨守宗冬は、宗冬御上意餘の義にあらず  
 豫て天下を騒さんとする惡狐退治の義に就き、將軍家より台命  
 をもつて東國の諸大名へ、狐狩の義を仰せ付けられ、然して狩  
 取りし狐を一々江戸表へ差送れよとの嚴命に就き、他の諸大名  
 より追々差送りに相成る、然るに忠弘其方一人今に何んの沙  
 汰あし、よつて上様不審に思召れ、斯く上使の役として、柳生  
 飛騨守罷り越したり、サア其返答を承はらん何うぢや……する  
 と副使大久保彦左衛門忠敬は、彦左如何に忠弘、其方何故將軍家  
 の台命を違背しや、此義不届至極の至り、イヤ御應答をいたせ

忠弘ハ、御上使の御言葉恐れ入り奉つる、斯く申す忠弘台命を承はるや否、直ちに庚申山を狩立んと其準備に及びし處、豈に斗らんや云云斯様うくの不思議ある夢を見たり、夢は五臓の疲れとは申せども、これ正夢にして即ち庚申山は猿田彦大神を祭祀りし神地靈山あり、故に山を荒しては神への不敬、殊に神罰を蒙りかば、大事と存じ、暫時山狩を見合し、此義一應江戸表へ伺い奉つり、其上の事にいたさんと思ひし處、即ちこれに扣へて居ります、生田四郎左衛門の申しまするには、將軍家の台命をもつてするに何んの祟りが有るべきや、よつて山狩の義は是非某し一手に仰せ付けられよと願ひし故其望に任したり然るに四郎左衛門早速人数を引率して、庚申山へ登山を申し山狩をいたせし處、云云斯様うく尙これに居ります林三左衛門もこれ亦同様……、正に惡狐の所爲でり、イデ此上は庚申山を狩の祟りにあらず、

立んと其準備をいたせし折りしも、江戸表より將軍家の御上使として、大久以彦左衛門殿が、林三左衛門の邸へ参られ、山狩の義は見合せよとの台命故、差扣へましたる義にございます……、彦左アイヤ、忠弘殿何んと言はるよ、此彦左衛門が將軍家の上使に立つた、シテ何處に居るや忠弘されば、即ちこれある林三左衛門の邸に来て居られます彦左拙者此處に罷り在るに、大久保彦左衛門が二人有る筈はあい、それは何かの間違でござらう、コレ林三左衛門其方の邸に此彦左衛門が上使に参つたを三左ハ、如何にも御在でございます彦左コリヤ、白痴た事を言ふあ、彦左衛門は此處に居るぢやあいか三左イヤ何んと仰せられまして、貴方様に違ひございません、現に某しがこれへ参りますます迄御纏應をいたし、御酒宴最中に云云斯様うくにございます彦左フム……、何んだ天麩羅に油揚げ小豆飯が大好物だ……、借てこそ其奴は狐の變化に相違ない、宜しこれより拙

者其方の邸へ参り、偽彦左衛門に對面して正体を見顯して呉れん、サア案内いたせ三左ハ……彦左衛門様が、彦左衛門様に對面おさるとは、これは妙でございます、アハ、彦左コリヤ何が可笑……飛騨殿貴殿暫らく此處にお待下され、拙者これより参つて、正体を見顯して参る……宗冬イヤ宜しうござる、屹度實否を御訊し有れ……彦左サア三左衛門、同道いたせ三左ハ、畏まりました」と大久保彦左衛門を案内して、邸へ立歸つて來る彦左「三左衛門、シテ偽彦左衛門は、何處に居るか三左ハ、此次の間に居られます、彼の通り聲がして居ります彦左「フム……ドレ何處に」と襖の透間より密と中を覗て見ると、果して二人は酒宴最中にございます三左大久保の御前、如何でございます彦左「フム、居る」旨く化だナア、アノマア天麩羅に油揚げをドシ〜食ふは、いよ〜狐の變化に相違ない、己れッ正体を見顯して呉れん」と怒つて居る、すると中に居る偽彦左衛門が

偽彦コリヤ喜内、誰か襖の外より吾々主従が酒盛をして居るを隙見する奴が有る、かあらす油断をするか喜内ハ、ヤイ何奴かは知らざれども、神君御名代將軍家御意見番たる、大久保の御前様が御酒宴を遊ばしてござるを、襖の外より隙見するとは不禮で有らう」と怒鳴りつける、すると彦左衛門忠教は忠教何を「と言ひ様サアツと襖を押し開き、襖と其場へ飛込み來り、忠教「ヤイ、汝圖々しくも此彦左衛門に妾を變じ、偽上使とあつて當家に來り、天麩羅が好きで有るの或は油揚げか好物で有るあぞと申して、大食をするとははれ野狐の類ひあるや、又は白狐の所爲あるや、イデヤ正体を見顯せよ」と一刀の柄に手を掛けッ、吾こそは畏れ多くも東照神君の御名代、兼將軍家の御意見番たる彦左衛門に對して、野狐あぞとは怪からん事を申す、汝こそ偽彦左衛門で有らう不禮者奴、其分には免さんぞ」と同じ

く一刀の柄に手を掛る、何ちらが怪からんやら理由が判りませ  
 ん、信の彦左衛門は、大きに憤り、忠教「ヤア、汝が偽彦左衛門で  
 有らう、サア速く正体を顯はせ……」偽彦「ナニ、汝こそ怪しき彦  
 左衛門に相違有るまひ、速に正体を顯はせ、忠教「ナニ、汝こそ狐の  
 變化で有らう」と彦左衛門同士が互に争論ッて居るを、傍で聞  
 いて居たる、林三左衛門は大きに驚き、此分には捨置れんと急  
 ぎ城中に來り、柳生飛騨守殿へ、云云「斯様う〜にございます  
 何うか、只今御入來を願ひますと申し入れる、すると飛騨守宗  
 冬「宗冬「フム、左様か、然らば案内をいたせ」と林三左衛門に案  
 内をさせて、急ぎ林の邸へ來て見ると、彦左衛門同士が、互に  
 一刀を引抜き、双方御待有れッ……彦左「イヤ飛騨殿、かからずお止め  
 ヤア、此奴狐の變化あれば正体を見顯して見せる、偽彦「ヤア、  
 有るあ、御止めおさるあ、此奴怪しの者に相違ござらん、よつ  
 宗冬殿、御止めおさるあ、此奴怪しの者に相違ござらん、よつ

て只今正体を見顯して御覽に入れる」と双方争論ッて居るから  
 して、飛騨守宗冬は、何ちらが何うとも信偽の程が判りませ  
 ん、そこで日頃念じる、淺草寺の觀世音、一寸八分黄金の尊像の納め  
 て有る、御厨子を懐中より取り出したし、扉を開くと不思議やバ  
 アーッ、金色の光明を發する、すると今まで争論ッて居たる、  
 偽彦左衛門は堪らず俄に惣身を慄し、見る／＼中に白狐の姿に  
 變じ、其場を逃げ去らんとするから、彦左衛門忠教は忠教「己れ  
 ツ、逃しはせじ」と一刀を引提げ搦と椽側まで追ひ掛ける、其  
 中に速空中へ飛行して、何國ともなく飛び去ッて了いました、  
 そとで彦左衛門は、残念に思ひました、が仕方なく、取ッて返し  
 て参り、柳生飛騨守と共に、再び城中使者の間に通り彦左衛門  
 忠教殿、只今云云「斯様う〜でござる、何んと一家中の歴々が  
 狐の爲に救れるとは、何んと情けかい事ではござらんか、併し  
 最早神の祟りではあ、全く悪狐の所意と言ふ事が判りし上は、



早々庚申山を狩立られよ忠弘ハ、畏まり奉つる、近日の内、  
 充分の準備をいたし、山狩を催し悪狐退治を仕つりますれば、  
 江戸表へ御歸城の上は、此由將軍家へ御披露を願ひ奉つる彦左  
 フム、如何にも承知」と其夜は宇都宮城にて一泊、翌朝出立し  
 て江戸表へ立歸つて参り、早速登城の上將軍家へお目通りをし  
 て、柳生飛騨守より云云斯様うくと、有りし次第を具に言上  
 に及びました、すると三代將軍家光公は家光フム左様か、コレ  
 爺よ其方は宇都宮城へ上使に参り、天麩羅に油揚げを大層う食  
 したさうぢや喃彦左イヤ、こは上様には御戲言を仰せられます  
 るか、某しは左様うか油濃氣物は大嫌いでござる哩……家光ア  
 ハ……ッとお笑ひあさる家光「偕て一同の者、畜生の分際とし  
 て上使に化して予が名義を騙とは不届至極、斯く悪狐の棲居も  
 大抵相知れたれば、最早諸大名の手を借には及ばん、此上は予  
 が自ら同勢を引率して、庚申山に馳せ向ひ一舉にこれを亡滅さ

ん、速く大番頭に申し付け、軍馬の準備をいたさせよ」との御  
 上意でございませう、すると此時御側に伺候して居らせられた  
 る、御將軍水戸中納言光國卿は光國ハ、こは上様には御有理  
 なるば、素より白狐ばかりを退治るに相ならず、肝腎亡滅さねば相  
 成りません、毒婦玉の井の行方は今に相判らず、倘や玉の井が  
 庚申山に隠れ居るやも量り難く、然るに上様が一舉に軍馬を差  
 向けられる時は、毒婦玉の井奴がこれに恐怖て亦他國へ逃げ隠  
 るゝは必一定、さする時は渠を亡滅に大きに日數の掛る道理、よ  
 つて庚申山に玉の井が隠れ居るや否哉を、然るべき者に申し付  
 け山を探らせ、いよ居るに相違あいと相判りましたるから  
 ば、其時軍馬を差向け、毒婦玉の井と白狐を一時に亡滅す事に  
 いたしたからば、如何にございまするか家光フム成程これは光國  
 の申す處、至極最とも理に當れり、シテ庚申山を探らせるは、

誰に申し付け、屹度申山を探らせる事に仕つりますれば軍馬御準備の  
義は暫時御見合せ遊ばせ家光「フム、然らば其方家來田宮新十郎  
の歸るまで相待ぞよ光國「ハ……」家光「柳生宗冬、大久保彦左衛門  
忠教、使者の役目御苦勞で有った、次へ下ッて休息をいたせ、  
兩人「ハ……ッ」とお暇を告げて御前を下る、水戸中納言光國卿  
も、君前を下り小石川館へ御歸館にある、サアいよ、これか  
らが、實に佳境に入る御物語り、一息休めまして次席に申し上  
げます……」

第 八 回

借ても天下の副將軍、水戸中納言光國卿は、小石川館へお歸

にあると、早速指南番、田宮新十郎を御側へ召され光國「コレ  
よ田宮新十郎を近こう進め……」新十「ハ……」光國「今般其方へ予が  
申し付け、大役有り、進んで勤めよ新十「ハ、如何ある御用か  
は存じませんが、私身に應じましたる義あれば、如何ようの事  
にても辭退は仕つりません光國「其申し付ける大役と申すは、豫  
て其方も知る通り、上様の御心を慥し奉つりし惡狐は略庚申  
に居る事相知れたり、然るに肝腎亡滅さねばあらん毒婦玉の井  
の行方は今に相判らす、予は多分同山中に隠れ潜むと思ふ、よ  
つて其方彼地に参り渠が所在を探ッて來れ新十「ハ、數あらぬ  
私に斯る大役を仰せ付けられます段、身にとりまして如何ば  
かり大慶至極に存じ奉つる、仰せに隨ひ彼地に参り、庚申山の  
山々谷々を充分に探り、屹度毒婦玉の井が隠れ居るや居らざる  
やの否やを、搜索して立歸ります光國「恥と申し付けたぞ新十「ハ  
畏まり奉つる」と御受けに及び御長家へ下ッて参り、これ

より虚無僧の姿に身を扮し、人知れず小石川御館を立出で、日  
 を経て野州庚申山に來り、然して山々谷々を切處難處の嫌なく  
 駆け廻り探しまするに、一向手係りがございませぬ、然るに或  
 日丁度未の刻時分、庚申山の麓築田村の茶店の前を通りかゝる  
 すると茶店の爺さんが、爺「コレ婆々どんや、今日は娘の祥月命  
 日ぢや、今戸外を虚無僧様がお通りあさるから、報謝をせんか  
 ね、婆々「ハイ、彼のモシ、それへお出であさいます、虚無僧様  
 一寸待ッて下さい」と呼び止められて、田宮新十郎は、戸外に  
 佇止まり新十「婆アさん、何んぢや……」婆々「今日は娘の祥月命日  
 でございますから、報謝をいたします」とお盆の上へ白米を  
 少し乗せて持て出る新十「これは今日の志、忝けあい」と押し頂  
 き頭陀袋に收める婆々「虚無僧様、暫らく休んでお出であさいま  
 せ新十「ハイ、然らば暫時休まして貰おう」と空た床机に腰打ち  
 掛る 爺「コレ婆々どん、澁茶ありともお進せ申せ婆々「ハイ、虚

無僧様お茶一ツお飲りあさいませ新十「これは忝けあい……」婆々  
 さん「モウ何時ぢや婆々「ハイ、八ツ下りでございます新十「時にお  
 前方は、斯う云ふ山の麓の寂寥處に住居で居るが、泥坊の用心  
 は悪くはあいか、何うぢや 爺「ハイ、大變此頃は不用心でござ  
 います、併し吾々のようを貧乏人は安心です、中等以上の家  
 へ盗賊が押し入ります新十「シテ其盗賊は、一体何處に居るのぢ  
 や 爺「ハイ、それが何んでも此庚申山の奥に住んで居るといふ  
 風評でございませぬ、確な事は判りませぬ新十「左様か、それは  
 何うも用心の悪い事である、然し其賊を何故御領主様が、御捨  
 置きあさるのぢや 爺「ハイ、何んでも聞いて居りまするに、當  
 庚申山に悪い狐が棲で居りまするので近日御領主様が山狩あさ  
 るさうです、其狐狩で賊の方く御手が廻らんのでございませう  
 新十「シテ其惡狐は、人民に害をするか 爺「イ、エ、けつして人  
 民に害はいたしません新十「さうか」と話して居る處へ戸外より

遣入ッて来たが、越中富山の薬賣薬屋へエ、御免んあさい、オ  
 イ婆アさん茶を一ツ下さい婆々「ハイ……薬屋何んぞ美味肴が有  
 るか……婆々「今日は其處に有り合せの物より、何んにも有りま  
 せん薬屋左様か、ちやア何んでも宜いから、二合燗して持て來  
 て呉れ婆々「ハイ、長まりました」と何んだか嫌な顔をして、漸  
 々酒を持來る」すると薬屋は獨酌で飲んで居りまするを側で見  
 て居た、田宮新十郎は心の裡に、此奴の眼光の鋭處は何うも怪  
 しい奴に、相違有るまいとシツと眼を付けて居る」と件の薬屋  
 は薬屋モシ普化僧様、私は越中富山の賣薬屋でございまして、  
 年が年中旅ばかりを廻りまするが、貴君も同様に旅を御修行を  
 あさいます……新十「ハイ、左様でございまして」と話して居る  
 處へ、年齢十二三の少年が肩の抜た衣類を着て、手に小桶に鱈  
 を一升ばかり入れたのを引提げ少年へエ、お爺さん今日は 爺  
 オ、宗吉か宗吉お爺さん、今日は 一升ばかりより有りません

何うぞ買ッて下さい 爺折角持つて來て呉れたが、今日は三升  
 ばかりも残つて居るから入らぬ、外へ持つて行け宗吉其様を  
 事を言つて貰ッては困ります、今來掛けに酒屋のお爺さんが買  
 ヲて遺ると言ひあすつたが、直が違ひますから買すに來たんで  
 す、是非お爺さんの方で買ッて下さい 爺何れも酒屋に限らねへ  
 外へ持つて往つたら何處を賣れる、乃公の方は何うしても今  
 日は買はねへ 宗吉それちやアお爺さん、お前は親子を干殺しに  
 しあさるのか 爺乃公が何んで、親子を殺すか……宗吉私此  
 鱈を賣ッて歸りに米を買ッて歸り、さうして親父さんに飯を食  
 ますのです、それに鱈が賣あかつたら米買事が出來ません、さ  
 すれば親子の者が餓死をします、親子殺しや人殺しや……爺  
 オイ、宗吉をんか無茶な事を言ッて呉れては困る」と言ひ合  
 ヲて居るを、聞いて居たる田宮新十郎は新十「爺さん、今聞  
 いて居れば此小僧は僅少を賣つてそれで親を養んで居るのぢ

やあいか、それに鯨を買って遣らあいは何うした事だ、それでは今日は娘に祥月命日で報謝をした事が、功德にもあらあいコレ小僧其鯨は乃公が買って遣らう少年へエ、有難うございませす新十乃公が金を三兩遣るから、それで歸りに米を買って歸つて、親へ孝を盡せよ」と懐中より胸巻を取り出し、態と側に居る薬屋に見せつけるを、薬賣はそれを尻目で、シツと眺めて居る新十「ア小僧、これを持って往け宗吉へエ……、此様に澤山に頂きましては……新十イヤ〜親孝行の其方に仁恵で遣でのぢや、早く往け……宗吉へエ、有難う存じます」と少年は喜悅んで出て往きす、後に田宮新十郎は新十「ア爺さん、人を救けた程心持の宜い事はあい爺却〜買君は餘程慈善を御方でございませす、然し大金を胸巻より御取り出しにあり、それを無暗に見せ開かして居らッしやいませすがこれは甚だ宜しうございません、小人に科あし玉を抱て科有りとか申しまして、人を救

けるのも金亦人が悪心を起すのも金故でございませす、よつて道中は金があつても無い様にするのが當然、此後は成る丈け他人に金は見せぬ様にあされませ新十「私は出家佛門の身あれば、金は有つても入らぬ物ぢや、若此金に眼を掛け盗む者が有らば盗め、併し盗む奴は俗人ぢや爺イヤ〜金はさう無暗に人に見せるものでございません薬屋「オイ婆アさん、勘定して呉れ、婆々「ハイ〜酒は一合二十四文皿盛が一皿八文宛でございませす薬屋「ちやア此處へ置くよ、残りはお茶代だ婆「ハイ、有難うございませす薬屋「普化僧様、お先へ参じます又何處かでお目に掛ります」と其儘戶外へ出て往く後に茶店の老爺は爺「モン普化僧様、貴方は今の薬屋を何んだと思つてござる新十「富山の薬賣ぢやアあいか爺それは身扮は薬賣にあつて居りますか、彼奴は此街道を徘徊いたします胡魔の蠅で山猫の國藏といふ奴でございませす新十「フム、胡魔か……爺「悪い奴が傍に居ります

に、それに貴方は嗣巻から金をザラ〜お出しあされ、見せ開かして居らっしゃりましたを、ジツと目を付けて居りましたから、往先はかゝらず御用儀あさいませ新十「此金を取らば取れた盗賊に恐れる様を事では、逆も諸國修行は出来あい、ちやア茶代を此處へ置くよ 爺、ハイ、有難うございます新十「何處ぞ此邊に宿屋はあいか 爺、これから十丁程お越しあさいますと、築田新田と申す處がございます、其處に三軒の宿屋が有ります、其の中野中屋が一番町等にいたしますから、其家でお泊りあされませ新十「大きにお世話で有つた…… 爺、ハイ、お氣を付けてお居てあされませ」借ても田宮新十郎は、モウ此邊で胡魔の蠅奴が出さうあものちやと、思ひあがら今しも丁度築田村まで來ると果して傍へより以前の藥屋が藥屋「ヤア普化僧様、今ですか……新十「オ、藥屋さん又お目に掛りました、時に貴方は今晚何處でお泊りあ廻り漸々これへ参りましたが、

ざいます新十「野中屋で泊ります藥屋「左様ですか、私も野中屋で泊ります、ちやア御同宿をいたします新十「ハイ……」同道して築田村の野中屋に來り藥屋「へニ御免あさい亭主「これは入らっしゃいます、藥屋御亭主、此普化僧様と道伴にありましたから、御同道して來ました亭主「それは有難うございます、シテ間は同間にしませうか、別間にいたしませうか 藥屋「普化僧様、何うです同間にして貰ひませうか新十「イヤ、私は朝夕經門を唱へ御勤めをいたします故、八釜しうございます、よつて別間にして貰ひませう 藥屋「ちやア御亭主、何うか別間にして下さい亭主「へ、承知いたしました、コレおまつや此御客様を、四疊半と六疊の間へ御案内をせいで下婢「ハイ、左様から御案内をいたしよ」と別々の間へ二人を入れ下婢「へい、無僧さん、貴方はお精進に新十「イヤ、私は魚類でも何んでも遣ります下婢「お湯にお遣入りあさいませ新十「イヤ、藥屋様を先へ遣入つて貰うて下さい、

下婢彼の薬屋さん、貴方からお先へ……薬屋ちやア、お先へ入  
 れて貰いませう」と湯殿へ出て往きます其後へ亭主が出て参り  
 まして亭主モシ普化僧様、貴方は御同道の薬屋を何んと思ふて  
 ござる新十富山の薬買ちやと思ふで居る亭主彼れは此界限を稼  
 ぐ胡魔の蠅でございます新十アハ、亭主普化僧様、此ひ事ち  
 や有りません、貴方は大金を所持して居あさるでせう新十ハイ  
 此通り持て居ります亭主サア其金に眼を注けて居るのです、其  
 お金は私方へお預り申しませう新十イヤ、私は別に盗賊には  
 恐れはせん、取られたらそれ迄の事、決して心配して呉れるか  
 然し賊の爲に旅人が困難するで有らう亭主へエ、大變に難儀を  
 いたします新十佛法では人を救けるのは出家の役ぢや、よつて  
 今晚彼の賊を生捕つて人の迷惑を救けて遣らう、かあらず悟ら  
 れぬように……亭主へエ、承知いたしました」と話して居る處  
 へ薬屋ヤレ、宜い心持だ、サア普化僧様直ぐにお出であさい

新十私は少し風邪氣で有りますから、湯は止しませう薬屋ちや  
 ア薬でも飲んで、汗でもあさいませ新十私は先へ睡眠して貰を  
 う」と食事を通し下婢に寢床を敷して眠りに着く、すると富山  
 の薬買は、酒肴を眺へて獨酌で酒を飲みながら、ジイト容子を  
 考へて居る中に、グウ、ツと軒の聲が聞へ出しましたから、  
 シテやつたりと自分も寢床に着き、寢た振りをして夜に更るを  
 待つて居る、然るに田宮新十郎は、此奴を召捕證儀をいたした  
 からは、毒婦玉の井の所在が判るで有らう」と軒をかき同じく  
 寢た振りをして容子を窺つて居る、早其中に夜も深く更澄り  
 丁度山寺の八ツの鐘ボン、ツと鳴つて居る、時分は宜しと山  
 猫國藏奴は、寢間より起き上り間の襖を密と明け、拔足差足を  
 してシイ、ツと傍へ近寄つて参り、蒲團の下へ左り、手を差入  
 れ、胸巻に手を掛け、ジイ、と手元へ繰り込まんとする、此時田  
 宮新十郎は、其手をグイと引摺む、南無三仕損じたりと山猫國

藏は、隠し持ッたる短刀引抜き、ヤア一ツと叫んで切り付けるを、心得たりと身を躲し突然利腕を取るよと見へしが、忽ち肩にと引擔ぎヤア一ツと一聲諸共に、二間ばかり彼方へズンデンと投げ付けたり、山猫國藏は斗頭打つて其處へドカと倒れ、起き上らんとする處を、飛び込み來つた、田宮新十郎は、馬乗りにあつてグイと首筋を押へた、所へ野中屋の亭主は、奥の騒ぎを聞付け其處へ駆け付け來り亭主ヤア一普化僧様、何うあさりました新十、オ、亭主、斯くの如く盜賊は取ッて押へた、速く繩を持てッ……亭主、エ、何うも大變をお勇力でございます新十、コリヤ亭主、今ぞ吾本名を語ッて聞す、斯く普化僧の姿に身を扮して居るが、誠は天下の副將軍水戸中納言光國卿の御内命を蒙り、盜賊詮義の爲に罷り越したる、某しこそは水府藩田宮新十郎宗顯と申す者ぢや、姓名を聞いて山猫國藏は國藏、エ……斯る御方とも知らず仕事をせんといたせしは、私の失策で

ございます新十此洞卷で汝を釣たのぢや、猫が洞卷で釣れたナア國藏へエ、何うも恐れ入れやした」そこで田宮新十郎は、此奴を取調べたらあらば毒婦玉の井の所在が知れるで有らう、然し今此處で取調べをしては宜しくないと、野中屋の亭主にも堅く口止めをして、山猫國藏を引立、其夜の中に密と此處を出立して、江戸表へ立歸ッて參り、賊の國藏を町奉行坪内左京之進へ引渡し、小石川館へ立歸り、御主君光國卿へ此趣きを言上り及ふ、然るに坪内左京之進は、山猫國藏を呼び出だし段々御吟味にありましたが、初めの程は何うしても白状いたしません段々理解を申し聞されたので、これに屈服しし到頭毒婦玉の井か、庚申山の奥ある猿が涉りの岩崖に居るといふ事を白状いたしました、そこで町奉行坪内左京之進は、賊の國藏を入牢申し付け置き、早速千代田城へ上り、副將軍水戸中納言光國卿へ申し上げる、すると光國卿は、三代將軍家光公の御前に出で光國



ハ、上様へ申し上げ奉つる、いよく毒婦玉の井は、野州庚申山の奥ある猿渡りの岩崖に有つて、山賊に均しき事をあし、軍用金を集め居る事判然あり、よつて今度こそは玉の井を取り逃さね様にいたさねば相成りませせん家光「ア、先玉の井の所在は相判つたが、然し悪狐は通力を得たるもの故、確に何處に居るといふ事は相判るまひ、これは如何いたすや……」光國ハ、さればにございませ、玉の井に乗り移つて御る白狐あれば、玉の井を亡滅しましたるからば、自然と悪狐は亡びるに相違ございませせん家光「然らば一同を集めて、評義をせよ」との御上意が下りました、そこで水戸光國卿は、それ「諸役人へ御沙汰とある、これによつて何づれも御本丸のお白書院に集まり、種々の御評義をして居られる然るに御次ぎの間に、三代將軍家光公が御寵愛にあさる、小牧猿が行儀を正して御評義を聞いて居るを、誰もお氣が注ぎませせん、すると將軍家光公は、フト小牧猿

にお目を注げられ家光「オ、其處に居るは小牧猿か、亦何事か知らしに來たか、苦しうあいこれへ來ひ」と御言葉が掛ると、小牧猿は其場を立つて、ツカトツと將軍家の御側に來り、イト懇懇に手を仕へ小牧「私は暫らく懸山に有つて、修行をいたせし故身に通力を得たり、よつてこれより庚申山に登り、上様の御心を惱し奉つる、悪狐の棲所を確に探り蛇度御知らせ申しまする故、御評定は暫らく御見合せ下され」と拙先にて文字を書き教へて置て、其儘其處を飛び去りました、これを御覽遊をしまする、將軍家光公は家光「ア、畜生あがらも、人間も及ばね天晴あもので有る」とお喜び遊ばして居らせられる、此時御側に扣へて居る、大久保彦左衛門忠教は彦左「ア、御一同、只今小牧猿の容子を御覽あされたで有らう、彼れを思へばまだ吾々の忠義が不足ん……」一同如何様大久保御老体の言はれる通り、彼の小牧猿が好き手本でござる、よつて吾々も尙一層忠義を盡さね

ばあらん」と一同勇み立て居る、然るに其日の御評定は中止と  
 あり、其亦翌日御白書院に列座をして、小牧狼が歸りを御待受  
 けにあつて居る、處へ速小牧狼が、お次ぎの間に來り扣へて居  
 る、此時將軍家光公は家光オ、小牧狼歸つたか、シテ庚申  
 山の容子は何うちや、小牧毒婦玉の井は、庚申山の奥ある狼が涉  
 りの岩崖に有つて、御當家様に怨み有る諸浪人を集め、専ら天  
 下を顛覆さんと企んで居ります、尙二百有餘年間年を経たる惡  
 狐も居りますれば、將軍家の御威光をもつてお攻めかざるに、  
 何んぞ神の祟りがございませうや、速々軍馬を差向けられよ」  
 と知らせました家光「フム、能くも知らした、實に汝は天晴ある  
 もので有る、ソレこれを取らす」と御手づからお餒頭を下され  
 る、すると小牧狼は、キイ／＼と打喜び、兩手を延して押  
 し頂さ、さも美味さうに食て居る、偕ても副將軍水戸光國卿は  
 光國「ソレ誰か有る、急ぎ天文方山地民部に登城せよと申し付け

ハ、ツと應答へて御使番が、急ぎ山地民部の邸へ來て、斯くと  
 通じました、山地民部は、委細長まつて衣類を改め、御登城を  
 してお白書院に出で、此方へ平伏して居る、此時水戸光國卿は  
 光國「如何に山地民部、いよ／＼今般毒婦玉の井の所在も、白狐  
 の棲所も相判つた、就いては取逃がさぬよう一時に亡滅す手段  
 を廻らさねばあらんが、其方何が宜き妙案を考へて申し上げ、  
 民部ハ、毎々申し上げましたる通り、玉の井に附いて居る白  
 狐ではございませうが、然し通力自在を得たる惡狐あれば、容  
 易に亡滅す事却／＼難かしく、いつて庚申山の麓四方八方に棒  
 杭を立て、これに七五三細を張り、天神地神八百萬の神々を勸  
 請し仰ぎ禱祀しましたるあらば、如何ある通力を得たる白狐たり  
 ども、此包圍を通れる事が出来ませうや、然して山を御狩立に  
 ありますれば、速に亡滅るに相違はございませぬ光國「フム、然  
 らば其方に御祈禱を申し付ける民部ハ、委細長より奉つる……

光國、ソレ、此趣きを松平下總守忠弘へ沙汰いたせ」と茲に御評  
義一決せられ、いよ、大久保彦左衛門忠教が、將軍家の御名  
代とあり、數多の勇士豪傑を従へ、玉の井征伐惡狐退治として  
野州庚申山へ乗り出しの一段、一寸息を入れまして、次席に讓  
つて申し上げる事にいたします……。

第九回

借ても松平下總守忠弘は、江戸表よりの御沙汰を聞いて、早速  
郡奉行島源太夫を召され、忠弘如何に源太夫、今般江戸表より云  
云、斯様う、との御沙汰よつて其庚申山の麓に出張に及び、彼  
界隈の百姓共に申し付け、四方八方へ棒杭を立てさせ、尙狩家  
を繕い万事不都合のあきやうにいたせ源太夫、長まりました。

と直ちに庚申山の麓に來り、村々の庄屋を呼び出し此由を申し  
付け、庄屋より百姓共に言ひ付け、四方八方へ棒杭を打たせ  
七五三を張らせ、狩屋を建てさせ充分の準備が出来る、處へ頃  
は寛永十四年十月月中旬、將軍家の御名代として、大久保彦左衛  
門忠教は、柳生但馬守宗矩、同飛騨守宗冬、小野治郎右衛門忠  
秋、御旗下には、安部四郎五郎、近藤登之助、金松又四郎、小  
栗又市、櫻井六郎左衛門、岩田權十郎、お弓組頭松浦吉右衛門、  
山本林之助、お鐵砲組頭久保田重太夫、村田平六郎其他御同勢  
千五百人を従へ、江戸表を乗り出だす、續いて水戸家の勇士朝  
比奈彌太郎、田宮新十郎、下總小金の住人伊東彌五郎、高弟平  
松源次郎其外同勢五百人を従へ乗り出だし、日を経て野州庚申  
山の麓ある狩家に到着して、天文方山地民部が御祈禱の御札を  
四方の棒杭に張つける、松平下總守忠弘は、十月十六日の五ツ時より  
狩立てる事にいたし、松平下總守忠弘は、同勢三百人を従へ先

手として、庚申山へ登ッて参り彼方此方の林の中を、勢子の者は割竹を鳴し、ツアツと鯨波を上げ狩立てる、するど今ま暗とあり、大雨がドウツと車軸を流すが如く降り出すを、事もせす吾もく進まんとする折りから何處ともおく石が降り来り、勢子の頭に的なる勢子痛いくと頭を抱へ狼狽する、此時松平下總守忠弘は忠弘ヤアく勢子の者ども、何條これしきの事に恐るゝ事があるか、進めく下知をあさる、此言葉に烈まされたる勢子の者は、尙も漸次に進んで来る、と此處に樹木蒸々と生茂りたる大森有り、忠弘ソレ、此中を狩立てよと鐵砲組弓組の者に下知をする、鐵砲弓組の人々は、鐵砲をボンツと打ち込む、矢は雨霰の如く切ッて放つ、すると林の中に頭取りましたそこで松平下總守忠弘は、手初め宜しと尙も進

めく下知をあし、ドンく山奥へ入り込んで来ると、岩との間に一ツの洞空有る、これを眺めた生田四郎左衛門は、四郎ヤアく勢子の人々、此穴の中こそ白狐の棲處に相違有るまひ、ソレ打ち込めよと下知をする、勢子の人々は、今既に穴の中へ打込まんとする中に、俄に穴の中より怪しき氣を吹き出しました、すると其氣に當り二三人即死をいたしたり、四郎左衛門は、此体を眺めて四郎いよく此穴の中にこそ白狐の棲む所と確かに認めたり、ソレ打てやくと下知するに、勢子は大きに恐れ、一人として進む者がございませぬ四郎ヤア、言ひ甲斐なき勢子の者共、これしきの事に恐るゝといふ事があるべきや、ソレ打ち込めよと下知をする、そこで鐵砲組弓組の人々は、其穴の中へ打ち込む、すると穴の中より四斗檜の如くある火の玉が、バアツと飛出し空中へ舞上ツたかと思ふと、さも物凄き老狐が現はれ、空中を駆け廻り多くの勢子を惱ます

此時勇士の人々は、一刀を引提げたり、只空中を眺めて居る中に柳生飛騨守宗冬は、重藤の弓に驚の羽の矢を打番ひ、豫て信する觀世音を念じ、天地も響くばかりの大音に飛騨ヤア、惡狐、汝これまで多くの人を惱まし來りしが、今日こそは最早遁れる事が出來ようや、惡狐退散怨敵退散と呼はりながら、ヒヨフツと矢を切ツて放ちました、すると其矢が惡狐に的中しか忽ちコン／＼と泣聲も聞へたかと思ふ内、速白狐は其處に倒れたり、處へおる、勇士の人々集合して、其惡狐を見るに二百有餘年間を経たる、サモ恐るしき老狐でございませ、そこで後に此惡狐の死体を燒山中に埋める、然るに其後何者か此處へ祠を建て玉姫明神と祀りましたのが、今の世まで野州庚申山に惡狐塚と、古跡に残つたのは即ちこれでございませ、借ても大公儀の御同勢と、松平下總守の同勢兩手合して、二千有餘騎ヲア／＼と調を上げて、猿が涉りの岩崖へ攻寄せ、此時猿

が涉りの岩崖に居る、毒婦玉の井は、其日に限ッて只何んどあ、悄然として居る處へ、一人の手下が遠た／＼しく手下へ、御注進々々……玉の「オ、何事有るか手下」斯様う／＼云云でございませ玉の「フツ、借ては日頃便寄りにする白狐が退治られたとして見れば、最早所詮敵はん此上は寄せ手を引受け、花々しく討死をいたさん」と覺悟を極め、先將軍秀忠公の忘れ紀念の若君康之助様を御侍に呼んで玉の「借て若様へ申し上げます、妾は卑賤き大谷家の眞人、武田作左衛門の娘でございませ、貴君は前の將軍台徳院殿様の御公達に波らせられ、當三代將軍家の御舍弟にございませからして、一度四代の將軍に仕奉まつらんと思ひしに、其甲斐もあく斯る有様にありませ、よつて貴君は當山の包圍を遁れ給ひ、何國にありとも世を忍び、時機を待つて世にお出まし遊ばせ、此錦の袋の中に收めて有ります、五郎入道正宗の一腰鞘は妾の御紋散し、これぞ台徳院殿様

の御紀念にございます。これを貴君にお渡し申して置きます。サア一刻も早く御立退き遊ばせ……若君現在母上のお討死を見捨、此儘此處を立退くは如何にしても本意にあらず」と兩顔に泪の浮べ御落涙を遊ばして居られます玉の「只今の其御言葉は千僧萬僧の回向より、尙いや増して嬉しうございます」とハラと涙を流し、母子が互に手に手を取つて落涙を催して居る折りにも麓の方より、ワイ、つといふ関の聲が聞へましたから、玉の井は玉の「アレ、彼の関の聲は、おゝ、討手が押し寄せると見へたり、サア若様最早躊躇をして居る場合はございませぬ、早々此地を御立退遊ばせ、若君然らば母上の御言に隨び、一先づ當山を遁れます」と餘波惜くも涙と共に別れを告げて、其儘何國ともかく御立退きにありました、其後姿を見て玉の井は、味方に集まる三十人の浪人、亦是手下の者へ申し付け、八方へ手配りに及び玉の「己れ見よ、今に妾が最期の働き

目に物を見せて呉れん」と後ろ鉢巻襷の用意白柄の薙刀小脇に抱へ、敵の来るを今や遅しと待受けて居る、處へ大久保彦左衛門、總大將とあり、人数を引率して其處へ押し寄せ来る、此時毒婦玉の井は、此方の岩上に立ち現はれて居るを見たる大久保彦左衛門は彦左「ヤア、玉の井よく承せれ、汝婦人の身をもつて天下を騒がさんとあしたる奸婦あり、斯くある上は最早通れん、サア此上は尋常に細にかゝるや、亦是近寄つて搦め捕らや、如何に」と呼はつたり……玉の「オ、珍らしや大久保彦左衛門、妾も女でこそ有り、大谷家の浪人武田作左衛門の娘あり、只此儘に空しく搦め捕れようや、イデや最期の働きこれを見よう」と薙刀をリウツツと打ち振り、寄手の中へ切り込ん

で来る、大久保彦左衛門は彦左「ッレ、玉の井を討取れよ」と下知をする、諸士の銘々、吾一に玉の井を討つて功名を現はさんと四方八方より切つて掛るを、玉の井は、薙刀を風車の如く

振り廻し、見るく、内に十四五人を斬り倒したり、此体を後陣  
 に有つて見て居たる、柳生飛騨守、小野治郎右衛門、伊東一刀  
 齋、平松源次郎、朝比奈彌太郎、田宮新十郎、御旗下の安藤四  
 郎五郎、金松又四郎、小栗又市、近藤登之助何づれも勇士の人  
 々は、玉の井を目掛けて切り込んで来る、これにはさしもの毒  
 婦玉の井も、逆も敵はんと其場を逃げんとするを、勇士の人々  
 は、ソレ逃すあつとおるく、後より追ひ折ける、玉の井は岩崖  
 の内へ逃げ込む、處へ勇士の人々は、岩崖の戸外まで、追詰來  
 る、此時三十人の浪士を初め手下の者等が、挫と切つて出で、  
 勇士と戦ひました、何うして敵ひませうや、到頭此處で討死  
 するも有り、或は生捕れる、此時勇士の人々は「同ソレツ」と  
 岩崖の中へ乗り込んで来る、それと見て取つたる玉の井は、  
 崖の中に火を放つ嵐烈しくして、火は炎々と燃上り見るく、  
 に傍りの草木に火が移り、一面の煙とある、斯くして置いて玉

の井は玉の詮救からん、最草これまでかり」と到頭自殺をし  
 て、彼方此方と玉の井の所在を捜しますするに、何うしても相判  
 りません、そこで火を消して見ると、玉の井は自殺をして死  
 は黒焦にかつて居ります、悪狐は退治、毒婦玉の井は自殺をして  
 相果たさして見れば、先づこれにて天下は泰平あり、然し豫て  
 將軍家より御内命の有し、先將軍家の若君康之助は、如何い  
 たされしや、御行方をお捜し申せと、彼方此方と手分けをして  
 お捜し申すに、何うしても、お行方が判りません、そこで黒焦に  
 あつて焼死んだる玉の井の死体を櫃に收め、其外生捕し者等を  
 引立江戸表へお引上げとあり、大久保彦左衛門より、三代將軍  
 家へ云々新様うと、言上に及ぶ、すると將軍家光公は、至極  
 御喜悦びとある、借て大公儀に有つては、黒焦にあつて居る玉  
 の井の死体、其外生捕れし者等を、鈴ヶ森にて磔の刑に所せら

れ、これにていよ、日出度事は相濟ました、然るに三代將軍家光公は、康之助は如何いたしたか、御父台徳院殿様の御遺言も有れば、行方が知れんとて此儘に捨置事は相成らん」と殊の外御心を痛めて居らせられるを、水戸光國卿は光國ハ、上様其儀は決して御心配御無用に遊ばせ、かゝらず庚申山は御立退あされしに相違ございませぬ、さすれば御存命で居らせられま

れても康之助様の事を、仰せられぬ日はございませぬ、これを御側に有つて承はつて居る、諸役人は、何んとかして御行方を捜し出したし、御兄弟の御對顔をさせ奉つらんと、尙もお行方を捜しますするに、何うしても相判りませぬ、斯くして居る中に光陰は矢の如し、速三ヶ年経過いたしました、丁度寛永十五年四月十七日とある、然るに三代將軍家光公には、亦々野州日光へ御社參の義を仰せ出だされ、御供の諸大名には、御家門、御普代、外様、國主方は薩州長州の兩大名丈け御供、其他御旗下の銘々へ御供を仰せ付けられ、總勢都合三千五百人にて、江戸表を御發駕、御道中は煙り止めと申して、將軍家御通行の間は火を焚く事は出来ません、日を経る漸々日光山へ御到着、と日光大僧正は將軍家へ御挨拶を申し上げる、翌朝東照大権現へ御參詣相濟、暫時御休憩有つて、これより日光名代の裏見の瀧を御見物、將軍家には、御瀧の元に來らせ給ひ、落來る瀧を



餘念なく御覽遊はして居らせられたる中に、速や日も西山に傾きし故、將軍家には還御を仰せ出たされ、御乗物に移らせ給ふ御供の銘々は前後を守護仕奉つりこれより御宿坊へ御引上げに  
ある其途中、折りから奥山より年齢十五六才ばかりの荒男、身  
の長六尺有餘にして髪は長髪、色真黒、兩眼は日月の如く、身  
は木の葉を繼しを纏ひ手に櫂の生木の杖を突き、脊に何か包し  
風呂敷包を背負、ズカ／＼と御行列の前に來り、大手を擴げ  
荒男「アイヤ、行列暫らく待てッ」と押し止める、すると御先供  
の人々は大きに驚き先供「ヤア、汝は何奴あるや、畏れ多くも上  
様の御通行先を不禮をいたすや、正氣の者では有るまひ、亂心  
者か……荒男「扣へ、汝等の知つたる事ではあい、其處を退け……  
役人「ヤア、いよ／＼此奴は怪しき者に相違あい、ソレ召捕ッ」  
と諸役人が四方より取巻く……荒男「コリヤ不禮をするぞ、汝等  
の爲にはあらんぞ、扣へ居れッ」と確と睨む……此騒ぎで御行

列がピタリと止まる……處へ徳川家の四天王、酒井、神原、井  
伊、本田の同勢が來る、此時件の荒男は荒男ム、それへ來たり  
しは、見覺への有る酒井左衛門尉、本田丹後守、榊原式部太輔  
井伊掃部頭か久々に對面したす「四天王の方々は、馬上より  
御覽あされ、此奴は餘程亂心をして居ると眺めてござる荒男「フ  
リヤ／＼四名の者、目通りを免す近こう／＼」此横柄ある言葉  
聞いて、四天王の方々は呆れ返つてござる、すると御旗下の銘  
々は一同己れッ、不禮者奴ッ、搦め捕れよ」と八方より取巻く  
荒男「ヤア、扣へ居れッ、汝等子を狼籍呼はりをするとは不届至  
極で有らう、コリヤ四名の者共汝等は子を見忘れたか、此上予  
に對して不禮をすれば、免さんぞ……」一同「ヤア、亂心者奴、一  
体汝は何者で有るや名を名乗れ荒男「オ、汝等は祖父家康公の  
御供をして、戦場を往來あし當三代將軍家迄、忠勤を盡したる  
旗、下共で有るか」御旗下一同は呆れ返りて一同「ヤア、汝は何者

ちや……荒男コリヤ、予は四名の者に申し付けたき事も有り、且は頼みも有れば此處へ參れ」四天王の方々は四名何事ぢや……荒男、汝等は予を見忘れたナア、速く兄君に會合して呉れ、これが頼みで有る四名シテ、兄君とは……荒男オ、征夷大將軍家が光公は、予が爲には兄上で有る哩」御旗下一同は、烈火の如く憤り一同畏れ多くも將軍家を兄君とは、不禮の一言ソレ擲め捕よ」と立騒ぐ……荒男コリヤ、旗下一共、騒ぐを静まれ、汝等に用はあ、速く將軍家に會合して呉れよ」と言つて居る處へ、大久保彦左衛門忠教が、其處へ駆け付け來り彦左、ヤア一同待て」と制して置いて彦左コリヤ其れある荒男、一体其方は何者あるや、姓名を語れ荒男オ、彦左衛門か、汝も予を見忘れたか、初めから名を申さば斯く騒がすのではあかりしが、コリヤ予は松平康之助で有るぞ」と御名を語られる、すると馬上に在りし人々は、バラ／＼と馬より飛下り、ハア／＼と大地に

平伏する、此時御老中松平伊豆守信綱は、將軍家の御乗り物の御傍に來り、云云斯様う／＼と言上り及ぶ、すると將軍家光公は家光オ、左様うか予が久しく捜ねて居た康之助か、ソレ速く予が側へ召伴れ來れ……伊豆ハ、其義は暫らく御止り下され家光何故止めるか……伊豆さればにございます、先一應若君康之助様に相違なきやの事實を、篤と相糺しましたる上に御對顔を願ひ奉る家光オ、然らば汝宜きに取斗らへ……伊豆ハ、畏まり奉つる」と康之助様の御傍に來り伊豆ハ、某しは松平伊豆守でございます康之助オ、智恵伊豆か伊豆ハ、貴君は康之助と仰せられますが、けつして御疑ひ申すのではございませぬが、これには何か確實ある、御證據物でも御所持遊ばして居らせられますや、此義承まはりたう存じます康之助斯る淺猿しい姿をして居るから、疑ふも有理あり、予は康之助に相違あと言ふ、證據は即ちこれに有る」と脊に負て居らせられ

たる、風呂敷包より取り出したる錦の袋、康之「サア、これを見て呉れよ」と御渡しにあり、伊豆守信綱は、これを受取り拜見して見ると、前の將軍台徳院殿様の御紀念、五郎入道正宗の御短刀で有るして見れば、疑ふ方なき若君康之の助様に相違ございませんからして、此趣きを將軍家へ言上に及ぶ、將軍家光公は、光「予は誠に懐しい、速く兄弟の對顔がいたしたい……伊豆何分御道中の事故、斯る處にて御對顔は甚だ宜しうございません、よつて一先江戸表へ御歸城の上、御對面遊ばされませう、家光「フム、有理の義ぢや、然らば左様ういたす、其由康之の助に申し聞せ……伊豆ハ、畏まり奉つる」と此旨康之の助様に申し聞けられ、然して康之の助君は、井伊掃部頭に御預け、御道中御大切に、櫻田御門外へ還御とある、掃部頭は康之の助様に御對顔の義を仰せ出される、掃部頭は、康之の助様に御對顔の義を仰せ出される、掃部頭は、康之の助様に御對顔の義を仰せ出される、掃部頭は、康之の助様に御對顔の義を仰せ出される、

義を申し上げる、すると康之の助君は康之「オ、明日は御兄君に朝とある、康之の助様は、お早くよりお眼をお登し有つて、惣身に水を掛り御身を清め給ふ、處へ井伊掃部頭は、麻の社祓を若し白木の三寶の上にお盃を乗せ持来り掃部「これは東照神君様台徳院殿様へ奉りし御神酒でございませすイデ御頂き遊ばせ康之「オ、御祖父様、御父上様へ奉りし御神酒を、御側衆が御銚子を持つて御酒を酌さぞ」とお盃をお取遊ばす、御側衆が御銚子を持つて御酒を酌さ奉つる康之の助は押し頂いて召飲り給ふ、其後へ御臆部を持来る漸々御膳も相濟みますると井伊掃部頭殿は、廣蓋の上にお召服に素袍大紋大刀小刀を取揃へ掃部若君様、上様より下し給はりし御時服、イザ御召替を遊ばせ」と差出す、康之の助は早速御時服を御着替とある、井伊掃部頭は、其御姿を打眺め掃部「ア、先將軍台徳院殿様に生寫し、ハ、恐れあがら最早御登城の御刻限

にございまする」と申し上げて居る處へ、大久保彦左衛門が、三ツ葉葵の御上紋の附きし御乗物をもつて、御出迎ひに来る、すると康之助様は康之、オ、爺彦左衛門、出迎ひ大義で有る」と直に御乗物に召給ふ、井伊掃部守、大久保彦左衛門の兩名が御附添にて、紅葉山千代田の御城へ御上りとあり、いよ／＼御兄弟御對顔のお物語り、如何ありまするや、次回に申し上げます……。

第 十 回

借で井伊掃部頭、大久保彦左衛門の兩名は、松平康之助様を守護仕奉つり、御登城の上大廣間御次席まで御案内を申し上げ、此席に康之助様を扣へさせ、掃部頭、彦左衛門の兩名は、大廣

間に通りお設けの座に扣へて居る、正面に御座が下つて有る、其前左りの御席には、尾州紀州水戸の御三家、右には御家門、御譜代、其他御旗下續いて、柳生親子、小野次郎右衛門何づれも、麻の社袴を着し列を正して控へて居る、懸て正面の御座が卷上ると、二重臺の上金鷹帽子直垂を召され、御手には金の中啓を握らせ給ひ、征夷大將軍源家光公、御着座遊ばして居らせられる、此時大久保彦左衛門忠教は、將軍家へ御挨拶を申し上げ彦左、ア、御次に控へられたる、松平康之助殿、上様の御許しあれば此處へお通り有れ、ハ、ツと應答へて間のお襖を左右に開かせ、松平康之助殿は、怖す臆せず静／＼と進み出で、遙か此方に兩手を支へ控へてござる彦左、ハ、上様へ申し上げ奉つる、只今彼れにお控へにあつて居らせられるは、即ち松平康之助殿でございます家光、ム、左様か、コレよ康之助久々の對面、予も誠に懐しいぞよ康之ハ、御兄君様にも麗しき御尊

顔を拜し奉つり、恐悦至極に存じまする家光、オ、其方にも無  
 事に成長いたせしは、予も満足に思ふぞ、何づれ近々の内に乾  
 度取立て得させざるぞよ康之ハ、家光ソレ誰有るか、盃を持てツ  
 ハ、ツと應答へて豫て用意がして有りましたか、御次の方より  
 白木の三賢の上、盃を乗せ、御銚子と共に持出る、三代將軍家  
 光公には、其お盃を取つて康之助殿に、差し給ひ此處に御兄弟  
 のお盃が相濟ました、すると居列ぶ諸大名を初め御旗下の銘々  
 は、言葉揃へ一同上様、康之助様、御兄弟の御對顔相濟、誠  
 にお目出度存じまする」と申し上げる、偕て三代將軍家光公に  
 は、御對顔相濟し其後で、松平康之助に向ひ家光「コレヨ康之助  
 其方は四年五年の其間久しく何處に居たのぢや、殊に過日野州  
 日光山にて見た時の姿は、實に見る蔭もあき淺猿しい姿で有つ  
 たが、一体何うして居たか康之ハ、亡母玉の井の心得遠より  
 して、西丸を立退き一度野州那須野ヶ原を遁れ、然して亦庚申

山嶺ヶ渉りの岩崖に隠れ潜んで居りましたが、終には事願れし  
 故、母は所詮遁れぬ事を察し、自害に及び相果ましてございま  
 す、拙者も既に其場にて切腹いたさうとは存せしが、此儘死し  
 ては徳川家の瑕瑾殊に兄上様にお目に掛り度、彼を思ひ是を  
 思ひ惜からぬ命を存命、終には庚申山を遁れ、それより同國日  
 光山は、御祖父東照神君の鎮座まします御地あれば此處へ立退  
 き、山間に身を隠しましたる事にございませぬ、然して兄上様に  
 お目に掛るに、何か一ツの功があければあらんと心得、日光裏  
 見の瀝にて荒行をあし、武術の玄妙を得んものと、朝夕人知れ  
 す修行をいたして居ります中、不思議や日光大天狗に出會、三  
 ケ年間粉骨碎身をして、到頭武術の極意を授けましたるからし  
 て、何うぞ一日も早く兄上様に御目に掛り度と思ひ居りし處、  
 豈に斗らんや御社參の際、態と御行列先を御不禮をいたしまし  
 てございませぬ家光「フム左様か、よくもそれまで辛苦艱難をせし

は天晴で有るぞ、然し母は早賤き者とは雖へども父は前の將軍  
台徳院殿様で有るぞ、サア此上は三ヶ年の間修行をかしたる、  
其手練の技倆を見せて呉れよ康之ハ、未熟の手の内御覽に入  
れますれば、誰ありとも敵手を御選み下され家光コレよ、誰か  
有る康之助と試合をせよ」と仰せられました、一同御遠慮を  
申し上げ、誰一人出でる者がございませぬ、そこで三代將軍家光  
公は、今日は敗る事嫌ひの大久保の爺を困らして遣らうと家光  
爺よ、其方康之助と一手試合をいたせ彦左ハ、何んと仰せら  
るます、此親爺に立合……イヤ宜しうございませぬ、年こそ寄ッ  
たる彦左衛門あれども、抑も十六才の往古いまだ平助と申せし  
三州志の異文字山の戦ひに、甲州武田方の勇士和田兵部を  
討取りしが初陣にして、それより數度戰場を往來あし勇士豪傑  
を討取ましたる其數知れず、近くは慶兄兩道の難波合戦、眞田  
後藤……家光コレヤ爺よ、モウ戰場の自慢話しは聞度はあゝい、

速く試合をせよ彦左宜しい、何康之助は如何程の御手練かは知  
りませぬが、太平育ち何條何程の事やあらん家光然らば速く、  
試合をせんが彦左宜しい、試合をいたしまするが、然し拙者は  
此頃時候の障りで逆上しますから、お敵手にはあれませぬ、宜  
しく御断りを申も上げます家光「フム、何か断りかそれから初め  
に申せ……彦左イヤ、拙者の断りは些と流變りでございませぬ、  
家光「アハ……然し爺よ旗下の中誰か其方の目鏡に叶ひし者を選  
め……彦左ハ、宜しうございませぬ、誰が宜からう」と一座を  
見渡しますると、其頃土手三番町にて八百石、金松又四郎に目  
がつきました、何故彦左衛門が此金松に目を付けたかと言ひま  
するに、茲に一ツの珍談がございませぬ、開は何かと申します  
に、大久保彦左衛門は、只今も伺ひました通り、天下分目の難  
波合戦には兩將軍の御危難を救け、餘程軍功を顯はして居りま  
す、然るに其難波合戦に御供をせあんだ旗下はそれを知りませ

んそこで大久保彦左衛門が、毎度千代田城の御旗を下溜りに来り  
 壯手旗下を集め難波合戦の自慢話をするのを、老年の娯樂に  
 して、居ります。或日彦左衛門は、例刻より速く登城して旗下  
 溜りに来ると、少し刻限が速かつたと見へて、いまだ壯年旗下  
 は、一人も来て居ませんからして、モウ其内に來るで有らうと  
 薄暗き片隅の方へ寄つて居眠りをして居る。處へおゐく集つ  
 て参り。○何んと御一同、今日は昨日の續き大阪鳴の口にて、  
 木村長門守重成が三千人にて、一万人の佐竹の同勢との大戦ひ  
 これ聞すんば有るべからずといふ處でござる。△左様うく何  
 うしても大久保御老体の御話しは、信に迫つて面白うござる然  
 しモウ御老体もお出で、有らう」とワイ／＼言つて居ります、  
 すると金松又四郎又四「アイヤ、御一同、各々方は大久保彦左衛  
 門の虚言話しを信に聞いてござるか、彼の親爺奴は、御一同が  
 戰場の事を御存知から、虚言八百に言ひからべて居る、彦

左衛門は始終戰場を逃げ廻つて居た奴で有る、拙者あぞは現に  
 真田左衛門尉幸村、後藤又兵衛基次に出會合せをいたした事  
 がござる、よつて其事實の御話しするから、以來親爺の話しは  
 信と思ひ給ふあ「同左様うでござるか、然らば何うかお聞せ下  
 され又四「宜しうござる」と大久保彦左衛門が聞て居るとも知ら  
 ず、口から出鱈目の虚言話しをし始める「同これは面白ひ」と  
 耳歌て、聞いて居る。處へ折りから旗下泊りの御廊下を、シイ  
 ……ツと制しの聲が掛る、すると金松又四郎は又四「誰方がお上  
 りか」と襖の透間より覗いて見れば、竹に雀の御上紋服を召て  
 在らせられるは、これあん伊達中納言正宗公でございます、此  
 御方は難波合戦の事は、詳細しう御存知で有るからして、金松  
 又四郎は、虚言話しをヒタリと止めて了つた、すると片隅の方  
 で聞いて居ました、大久保彦左衛門は、これまでは黙つて居た  
 が、モウ黙つて居られんと彦左「ヤイ／＼金松……又四其處に居

るのは、誰だ……彦左イヤ、誰でもあい乃公だ」と首を出す。  
又四「ヤア、大久保御老人か……サア失策た彦少何を失策たの  
だ、ヤイ金松今乃公が片隅の方で聞いて居ると、真田幸村に太  
刀合せをしたの、後藤又兵衛に鎗を合したあごと大言を吐たナ  
ア、それ程の豪膽者が何故伊達正宗に恐怖たか又四「何も伊達正  
宗に恐怖はせん彦左イヤ恐怖たに相違ない、恐怖んものから今  
正宗が此廊下を通行の際、何故話しを止めた又四「正宗に恐怖て  
止めたのぢやない、話し食切りで止めたのだ彦左イヤ  
宗に、恐怖んといふ證據を見せ又四「恐怖んといふのが證據だ、  
彦左イヤ、口では證據にあらん……天下の旗下が伊達正宗に  
恐怖る様うな事では、スワ事有る時には物の役には相立ん、以  
後はかあらず大言を吐か又四「オヤ、恐怖んといふ證據を見せよ  
う彦左「何うして見せる又四「さうぢやア、伊達正宗の横面を打擲  
る彦左「フム、これは面白ひ其位いゝ勢力があけりやお役にたよ

ん、サア往つて打擲れッ……又四「宜ッ」と、伊達正宗公の御側  
に來り又四「へ、伊達公にはお速き御登城、御苦勞に存じます  
る」と御挨拶を申し上げる、處が中納言正宗公は、御老体にて  
餘程お耳の聾お方でございます正宗「オ、金松又四郎か、朝夕  
は餘程凌ぎよくあつた喃……又四「伊達公には、お速きお上り御  
苦勞に存じます正宗「フム、またおなぐ寒くあると老人は困る  
哩」と正宗公はスカタンを挨拶をしてござるを、金松又四郎は  
拳を固め又四「エイ、此ド雙ば奴ッ」と横面をボカリと擲る、す  
ると正宗公は堪らず其處にお倒れにかりました、素より武道  
正宗と言はれたお方でございするから、直く起き上り烈火の如  
く憤り正宗「ヤア不禮者奴ッ」と御太刀の柄に手が掛る又四「オ  
面白ひ、サア抜け日光権現様の御遺書れる元和の百ヶ條の中  
に、殿中にて刀の鯉口三寸寛けたる者は、其家断絶切腹とある  
サア六十有餘万石と、八百石は宜い交易だ」と同じく一刀の柄



に手を掛る、すると正宗公は、ツツと考へ見ると、引合ん話してございませぬ、何か仔細の有る事と思はれし故、正宗金松待て、手は耳が遠い故何か氣障ツた事を申したので有らう、何うか免して呉れ、就いては些と其方に尋ねたき事も有れば、芝口の邸まで来て呉れ、又四ハハ、委細承知いたしました」と溜りへ歸つて参り、又四御老体、何うぢや……彦左イヤ、何うも感心、借て其翌日金松又四郎は、大久保彦左衛門と言ひ上りより、罪をかき、正宗公を打擲いたせし故、今日はからず御手討と覺悟をして、芝口新饒座の仙臺お上邸へ來り、御取次をもつて正宗公へ御目通りの義を申し入れる、すると早速これへと有つて、直にお目通りを仰せ付けられる、此時伊達公は、正宗オ、金松又四郎か、又四ハハ、正宗其方昨日不意に手を打擲いたせしは、何ういふ理由か聞して呉れ、又四ハハ、其仔細と申すは、云々斯様く、でございませぬ、洵に罪なき正宗公を打擲いたせしは、何とも申し

譯はございませぬ、サア此上はイザ御手討に遊ばせ」と若て居た上着を脱と下には白死裝束、此体を御覽あされし正宗公は、正宗ア、實に天晴く、將軍家の御側を守護する御旗下は、それ丈けの勢力がなければあらん、それでこそ徳川の天下は萬歳々、又四郎かあらず其精神を忘れるか、これは甚だ指古びし一腰あれどこれを興へると、關孫六の御佩刀を下し給はる、すると金松又四郎は、又四ハハ、御手討と思ひの外、御賞の御言葉に預かる而已ならず、斯る御佩刀まで下し給はりまする段、大慶至極に存じ奉つる、お頭を打擲して御褒美を下さるれば、今一ッ打擲いたしませうか、正宗コリヤ、さう頭を打たれて堪るものか、金松アハハ、ツ」と打笑ひ御佩刀を頂き御前を下る、餘事を申して恐れ入りまするが、大久保彦左衛門が、此金松又四郎に目を止め、彦左アア金松又四郎、其方日頃の勇氣を出して、若君康之助と試合をいたせ、又四ハハ、心得たり」と早速身仕度に及び

竹刀を携へ進んで参り又四若君、御手帳に願ひます康之オ、金松かさらば敵手にあらう、同じく御準備をあされ、双方竹刀を三寸の掛違ひにして置いて、互にシツと白眼合して居る、其中にヤアーツと一聲掛けるや否哉、竹刀を取つて立上り、ボン／＼と御次へ下る、其次に出ましたのが、神刀流をよく遣ふ、四郎が敵ひませうや、竹刀を打落され又四ハ、恐れ入りまし、櫻井六郎左衛門、これも負る、其又後へ浅山流岩田權六郎、同じく打負る、續いて出たのが小野流一刀流の達人、小野治郎左衛門が出て、三四合打ち合つて居る中に、何思ひけん竹刀を投げ治郎ハ、恐れ入りました、これでモウ此後へ誰も出る者はございませぬ、そこで三代將軍家光公には、先づ武術手練の程は相判りましたが、併し文道は如何んと學文上の事も御試しに、あつて見ると、大抵出来て居りますからして家光コンヤ康之助

其方は文武兩道に秀しは天晴で有る、追て取立遣はす、先づこれ迄は伊井掃部頭に預け置、今日は下ツて休息をいたせ康之ハ、申し上げる、列座の諸大名御旗下方も、將軍家へ御挨拶を申し、御前を下る、後に三代將軍家光公には、御老中松平伊豆守を召され家光如何に伊豆、御父台徳院殿様御最期の際に、吾亡き後、松平康之助は卑賤玉の井の腹より出産し者とは雖ども、予が血統に相違ない、よつて三家同様に取立呉れよとの御遺言で有る、故に渠康之助を百万石の諸侯に取立ようと思ふが、其國は何國に定めたら宜らう伊豆ハ、御有理ある仰せにございませ、前將軍台徳院殿様に渡らせられませすれば、御取立遊ばしたからば上様の御孝道にも相成ります、然しあがら今火急に御取立遊ばしてはお宜しうございませぬ、ト申しまするは一塵天下を亂さ

んとせし、玉の井亡びてよりいまだ五ヶ年も経過する内に、御  
取立に相成りましては、諸大名への間へも如何と存じますれば  
暫時御見合せ遊ばせ家光、有る義で有る、然らば見合  
す事にいたさう、さりながら渠康之助は、久しく日光山の奥に  
て荒行をあせし故、餘程身も疲勞て居るで有らう、よつて當  
分千石の捨扶持を遣はし、何づれかにて邸を興へ、其身の保養  
我儘の遊びをさせて遣つて呉れよ伊豆、ハ、委細長まり奉つり  
ましてございませう」と御受けに及び御前を下り、これより諸  
役人御評定の上、本所二ツ目にて立派ある御邸を建、此邸へ康  
之助様を入れ奉り、御立關には三ツ葉葵の御上紋の附きし高張  
を建、御門前には盛砂番手桶を出し、却々御威勢でございま  
す、其上御付人として、鞍馬流の御道をよく遣う、梁田七郎信  
行、神蔭流の久須見藤四郎景久、此兩人の外に中間の傳助辨藏  
を御側に付け置れるといふ、サアこれから松平康之助様の御身

の上につき、種々ある面白きお話しに移りまするが、一寸一息  
を入れまして、次回に申し上げます……。

第 十 一 回

借ても松平康之助は、三代將軍家光公より我儘ある遊興をさせ  
よとの、御上意が下りましたるからして、日々面白き御娛樂を  
して遊んで居らせられる、其上御邸内に道場を建、久須見、梁  
田の兩人を敵手に劔術の御稽古をあされ、亦是二人を御側に呼  
んで御酒宴をあさされての、御娛樂でございませう、然るに或日御  
酒宴の折りから、梁田、久須見の兩人が兩人恐れながら御前様  
の御手の内には、當時天下に列ぶ者は一人もございません康之  
イヤ、さうあはまい武藝といふものは上に上が有る、先當時

の指南番、柳生但馬や飛騨は、言ふまでもない名人で有る、然しまだ此の外にかからず人の知らぬ名人が有るに相違ない、何うか其者に出會手の内を試して見たいが、何ういたしたもので有らうと、御話しをしてござる、すると此時御次席にて御酒を頂いて居たる、中間傳助辨藏の二人は、大層酒に酔つて居ましたが今此お話しを聞いて其御席へ揉手をしかがら這入つて來り兩人へエ……殿様眞平御免んね……七郎コリヤ、下郎、汝等は何んと心得て此席へ這入つて來た、不禮者奴が下れ……康之不禮者めをするか、コリヤ下郎其方等は何か申す事が有るか  
 兩人へエ、有ります、康之何事ぢや……兩人エ……今吾儕等が其何んです、七郎コリヤ、御前のお目通りぢや、モツツと言葉を奇麗に申せ、兩人エ……左様にござり奉りますかぢやア言葉も奇麗に遣ひ奉ります、七郎ヤ、遣ひ奉つるとは何んだ、康之、梁田、言葉谷めをするか、サア下郎何事ぢや速く申せ

兩人へイ申し上げます、今御前が劍術の名人はあいかど、仰しやられました、が當御府内に浪人職と申して、諸所に道場を開いて居る者が有りますから、此道場を片ツ端から破つて廻つたら何うでございます、さうおすつたらかからず其中に名人が有るだらうと思ひや、七郎コリヤ、御前に道場破りをあされとは、何んといふ何を申すか、康之コリヤ、梁田、谷めるか捨置け、下郎の申す事却々活發にして面白ひ……七郎ハヤ、恐れながら若様は、當將軍家の御舎弟に渡らせられます、それにさうあ怪敷事を遊ばしては、將軍家へ對して恐れ入り奉りますれば何卒此義はお止まり下され、康之、コリヤ、さうではあいか方へ呼び寄せて試して見るのぢや、殊に浪人者の内に身貧乏者が有らば、これを取立て遣らうと思ふ、七郎、左様にござりますれば、一應此事を御届け申し上げた上の事に遊ばせ、康之、コリヤ、苦しうかい、誰でも介意呼んで參れ、兩人へイ、宜うござります、吾